# カオス レギオン 01

## 聖双去来篇

冲方 丁

イラスト 結賀さとる

富士見ファンタジア文庫

# カオス レギオン 01
## 聖双去来篇

　少女は思わず、言葉を発していた。
「あなたが、歩いている姿が、見えます」
　一度も会った事のない相手だった。だが、奇妙(きみょう)なことに懐(なつ)かしさを感じていた。まるで過去の自分と再会したような。
　すると、車椅子に乗った少年は返す。
「見えるんだな」
　彼は生まれつき、足が不自由だった。それでも、何度も立ち上がろうとしていた。世界を自分の手にするために。
　領主継承(りょうしゅけいしょう)に揺(ゆ)れる聖地シャイオン。その地で、黒印騎士(シュワルツ・リッター)ジークと旅を続ける聖女――ノヴィアは一人の少年と出会う。それは遠く失われたはずの絆(きずな)と、新たなる戦いを呼(よ)び醒(さ)ますのだった……。
　書き下ろし長編に連作短編を収録した、衝撃の新章突入!!

聖双去来篇
カオスレギオン
CHAOS LEGION
「あなたが、歩いている姿が、見えます」
「見せてやる。歩いてみせる」

ドラクロワは挨拶でもするみたいに剣を抜き打った。
刹那、ジークの左腕に雷閃が迸る。
「そんなに悔しいのか……みんな。その怨み……俺が引き受ける」

そこは冷たい水牢だった。
鎖に繋がれたジークは淡々と、
鉄格子の向こう側を見つめている。

# カオス レギオン 01

## 聖双去来篇

935

冲方 丁

富士見ファンタジア文庫

136-3

口絵・本文イラスト　結賀さとる

# 目次

在りし日の凱歌

# 第一話　剣の誓い

ひっく、としゃっくりが出て、少女の栗色の髪が揺れた。細い眉をひそめ、青い法衣の胸元を握りしめた。淡く澄んだ紫の目を眩しげに細め、白い滑らかな頬を緊張に震わせる。
「大丈夫ぅ、ノヴィアぁ」
　少女の細い肩に乗るものが、心配そうに声をかけた。掌ほどの大きさの妖精だ。金瞳に金髪、その背で震える羽も金に輝いている。
「大丈夫よ、アリスハート……ひっく。ぎ、〈銀の乙女〉なら、みんな通る道ですものね」
　声をつまらせながら、傍らの男を振り返る。
「お前の歳で、正式に称号を授かる者は、年に、数えるほどしかいないがな」
「じ、十人とか二十人ですか……ジーク様」
「二人か三人だ」
　少女の身が、ぐらりと傾いだ。妖精が慌てて少女の頬をぺちぺち叩く。

「ちょ、ちょっと、ノヴィア、しっかりっ。もぉっ、狼男っ、そういうこと言わないの」
「いつも通りにしていればいい」
男が、悠然と少女と妖精を見やる。鋭い目だ。妖精が、狼男と呼ぶのも、その目の鋭さゆえだった。美貌といえる顔立ちを、燃えるような赤髪が飾っている。ボロボロの白外套に黒革の鎧、赤籠手と、殺伐たる戦闘装束だが、その肩に担ぐのは、いかにも戦いとは無縁そうな、巨大な銀色のシャベルである。
「なんだか目が見えなかった時より不安で」
ノヴィアが言った。その紫の瞳は、かつて光を閉ざし、盲目に陥っていたのだ。そのとき握っていた杖はもう無い。また更に、ノヴィアから失われているものがあった。母の形見である〈銀の乙女〉の紋章が無いのだ。
「私、紋章、返してもらえるかなぁ……」
「すぐに返してもらえるよぉ、きっと」
「審査が終われば、正式に称号を刻まれて、お前の手に返される。それまでの辛抱だ」
だがノヴィアのしゃっくりは止まらず、
「いいかしら——?」
と、部屋のドアがノックされるや、ノヴィアは慌てて椅子から立ち上がり、

「ひゃいっく」
ちょっと形容しがたい声を放っていた。
くすくす笑いながら一人の老女が入ってきた。ぴんと伸ばした細い身に、藍色の法衣と穏やかな威厳をまとい、ジークを見やる。
「相変わらず大きなシャベルね、墓掘りさん。私もそろそろ自分の棺桶の寸法を測っておくべきかしらね。今でも戦死者専門なの？」
ジークが無造作に、はい、と返す。
「あら残念。死ぬ時は貴方に葬って欲しかったけど、この歳で戦場に出るのは辛いわ」
そんな風に笑って、老女がノヴィアを見た。
「ジークの従士が、こんな可愛らしいお嬢さんだなんて、どこから攫われてきたの？」
「ルールドの都市でジーク様に危急の場を救われました。ノヴィア・エルダーシャです」
「私は、エレミア・フェルテール」
老女は翡翠の目を細め、にっこり微笑んだ。
「これから何日か、貴女が〈銀の乙女〉の称号を得るに相応しいかどうか判断させて頂く、審査長よ。よろしくね、ノヴィア」

マグノリア大聖堂というのが今、ジーク達が滞在している場所である。聖法庁の下部組織である〈銀の乙女〉の総本山として、年に二回、紋章を授ける授章式を行う聖堂だった。
亡き母から受け継いだ力を開花させ、晴れて受章する事になったノヴィアであったが、
「授章の前の審査で不適格とされ、逆に聖道女の資格を失う人もいます。〈銀の乙女〉で何かを得るには、まず失う覚悟が必要よ」
そう言って微笑む老女は、〈実らす者〉の称号を持つ者だった。聖性の力で作物に働きかけ、豊穣の実りをもたらす者――〈銀の乙女〉の中でも最高位の一人である。
ノヴィアはぎくしゃくと頭を下げ、
「よ……よろしく、お願いいたします」
拍子にまたしゃっくりが出た。その背を、ジークが優しく叩いた。
「お前の一番、元気なところを見せてやれ」
「は、はいっ。ジーク様の従士として恥ずかしくないよう、頑張ります……ひっく」
「貴女は、別室に移動よ、ノヴィア。まず、そこのジークと面談させて頂きますね。そちらの妖精さんにも、いずれお話を伺うわ」
「えっ、あたしもっ!?」
「貴女から見たノヴィアについて、色々と訊かせて頂きたいの。よろしくね」

アリスハートが、ごくっと唾を飲んだ。
「うわぁあ、すごい人ぉぉ」
アリスハートが呆気に取られてわめいた。
控え室には、〈銀の乙女〉の紋章を獲得するために聖堂を訪れた女性と、その付き添いでひしめいている。ノヴィアが椅子に座るや否や、すぐに〈銀の乙女〉の紋章をつけた若い女性に呼ばれた。慌てて立ち上がり、
「が、頑張れっ、ノヴィアちゃんっ」
両手に拳を握って、自分に激励を発し、
「はいっ、頑張りますっ」
懸命に自分で応え、審査室へと赴いていった。
「が……頑張ってねぇ」
ぼんやりと宙に浮くアリスハートの耳に、急に周囲のざわめきの声が届いてくる。
「あの子も……の称号を狙ってるんだって。……の称号にすれば簡単なのに馬鹿よね」
「毎回、授章式で与えられる紋章の数には限りがあるって知ってる？」
「……の称号は、もう数が少ないみたい。私？　私はもうその称号が決まってるから」

みな、やたらと、ぎすぎすしている。何人かが競争心を剝き出しにしてノヴィアの事を訊いてくるのに耐えられず、アリスハートはやがて控え室から逃げ出してしまった。

「ううう、怖いなぁもぉ。みんな、人のことばっかり気にしすぎよぉ、もう」

アリスハートがぶつぶつ呟きながら、大聖堂の周囲を舞い飛ぶうち、ふと強い力を感じた。生命の源である聖性を力とする聖道女ばかりの中で、死と混沌をもたらす堕気がくっきりと浮き上がっているのだ。堕気はすなわちジークの気配である。

「どこ行っても、悪目立ちする男ねぇ」

呆れたように呟き、ふと腕組みして、

「あたしも審査に、参加するのよねぇ……」

すいっと飛んでゆき、窓からのぞけば確かにジークと老女がいる。いったいどんな質問をされるのか。アリスハートは自分が面談される時の参考に、盗み聞きを決めたのだった。

「万里眼の使い手にして、ラプンツェルの試練を乗り越えた者……透視と幻視の力か」

老女が感嘆を隠さず、ノヴィアの経歴が書かれているらしい資料をめくって、

「〈銀の乙女〉の指導員は、貴女に頭を下げて教えを請うべきね。どうやって、あんな小さな子を、ここまで導いたのかしら?」

「あいつの努力が、実ったただけです」
ジークの口調は、アリスハートが思わず笑いを噛み殺すほど、丁寧で腰が低い。
「彼女の希望は母親と同じ〈見守る者〉……確かにこの称号以外は考えられないわね」
「では……」
「審査員全員が反対しない限り大丈夫。式が終われば晴れて〈銀の乙女〉の仲間入りよ」
アリスハートが目を丸くした。そこで意外な事が起こった。ジークが、安堵の息をついたのだ。どんな敵にも眉一つ動かさない男が、実はノヴィアの合否に緊迫していたらしく、
「あいつをよろしくお願いします」
深々と頭を下げ、言ったものだった。
「それで……良いのね？」
「貴女なら安心してあいつを預けられます」
「私ではないわ。〈銀の乙女〉という組織が、彼女を導くことになるのよ」
「それでも、貴女の目が届いている」
「見込まれたものね。それで貴方は一人でドラクロワを追う……というわけね、ジーク」
アリスハートは危うく叫びそうになった。
（一人で――!?）

「なぜ……？　彼女は、貴方のもとで旅を続けることを願っているはずよ」
老女が、アリスハートの驚愕を代弁するように訊いた。ジークはかぶりを振り、
「俺の任務は……ドラクロワの追討です」
淡々と告げた。聖法庁から重大な秘儀を盗んで逃げたドラクロワを追って、ジークはもう二年以上も、旅を続けているのだ。
「危険だからつれて行けないと？」
「ドラクロワは、俺の親友です……」
「もちろん知っているわ。それで？」
「俺は、ドラクロワを討つかもしれない」
老女は、目を細め、深く溜息をついた。
「信頼し合っていた者同士が、殺し合う場面を、あの子に見せたくない……と」
「そしてこれからも、沢山の人死にを、あいつに見せることになる……」
「戦場の残酷さを見せてしまうことで、あの子が再び、目を閉ざして盲目になってしまうかもしれない……そう思っているの？」
「戦場は人の命だけでなく、心を殺します」
「世の中にある、裏切りや争いばかり見るわけではないわ。貴女の戦いから、きっとあの

子は他の多くのことを、学ぶでしょう」
「今はもう少年兵も少女兵も滅多にいない。あいつを戦場につれていく時代じゃない」
「少年兵を無くす……貴方とドラクロワが実現しようとしたことの一つだったわね。でも彼女は戦場につれていかれるとは思ってないはずよ。ただ自分のために戦っているだけ。貴方という人のそばでね、ジーク」
「そしていつか誰かの命を奪う……あいつが人を殺す前に、戦いから退けたい」
「別に貴方のそばにいなくても、彼女は、自分の力で誰かを殺すかもしれないわ」
老女が恐ろしいことを言った。アリスハートはぎくっとなった。確かにノヴィアにはそれだけの力がある。誰かを心底憎んだら、果たしてノヴィアはその力を使うだろうか。
「殺意が人をどれだけ狂わせるか、貴方なら知っているはずよ。その点でも彼女の師として貴方が適任だと思うけど？」
アリスハートは、複雑な気分になりつつも、老女の言葉にうなずかざるを得なかった。
「そもそも俺が……ノヴィアのことを貴女に頼める立場ではないのは分かっています」
とうとうジークが、懇願するような声を漏らした。アリスハートは老女に感心した。あのジークの内面にこれほど切り込めるこの老女こそ、確かに、審査長として適任だった。
「貴方の頼みを断りたいわけじゃないわ。むしろあの子を預けてくれる事を感謝してるの。

ただ貴方の気持ちを確かめたかっただけ」
てっきり老女がジークを説得しているのかと思っていたアリスハートは拍子抜けした。
頭を垂れるジークに、老女は笑って言った。
「ノヴィアのことは任せなさい。〈銀の乙女〉は貴方やドラクロワに、割と好意的なの」
三人の〈銀の乙女〉が次々に質問し、ノヴィアはそれに一つ一つ答えていった。質問は多岐にわたり、まるで自分という人間を言葉でばらばらにするようだった。あるとき、
「貴女は自分の力を偉大だと思いますか」
と質問され、ノヴィアは、はい、と即答している。母から受け継ぎ、試練を乗り越え、ジークの導きによって手に入れた力だ。母も試練もジークも偉大な存在だった。すると、
「では貴女は自分を偉大だと思いますか」
「……そうは思っていません」
「私達は貴女を偉大だと思います。それでも貴女は自分を偉大だと思わないのですか」
ノヴィアは目を丸くした。相手が本気で言ったとは思えなかった。しかし言われて気分の良い言葉なのは確かだった。だが——
「やっぱり思えません」

「なぜですか」
「誰かに偉大だと言われて、それで自分が偉大だと思っても、その人がいなくなったら、そうは思えなくなるような気がします。自分一人では、自分を偉大だなんて思えません」
すらりと答えた。
「それを、〝鏡の教訓〟と言います」
と、部屋に入って来た老女が、にこやかに告げた。ジークとの面談は終わったらしい。
「鏡の教訓……ですか」
「人は、他人の反応を見て自分が偉大か、正しいか、美しいか、鏡を見るように判断するわ。その鏡が無くても、ちゃんと自分で自分を見ることが出来るか、という教訓ね」
老女は、そう言いながら着席し、
「止まったわね」
ノヴィアがきょとんとした。いつの間にか、しゃっくりが止まっていたのである。
「楽しみなさい。若者というものがどれだけ可能性に満ちた存在か教えてあげるわ」
老女は片目をつむって笑ってみせた。

老女が部屋を去ると、ジークは窓へ寄り、

「おい、チビ」
ぼそっと、口にしていた。窓の上の方で咄嗟に身を隠していたアリスハートが、
「チ、チビって言うなぁっ。小さいだけっ」
ジークの頭上で思わずわめき、はっと口をつぐんだ。下から、ジークがじろりと見上げ、
「妙な気配がしたが、やはりお前か、チビ」
最後の言葉を、やや声高に言った。
「こ、この狼男ぉっ。あたしがいるかどうか分からずに、試しに呼んだなぁっ」
「どこまで話を聞いた」
「え……？　別に、何も……」
「お前のことを話しているところからか」
「えっ。そ、そんなの聞いてないよ。ノヴィアが紋章をもらえるってとこからだよ」
ジークが、何やらしみじみと腕を組む。
アリスハートは気になって、
「ねぇ、あたしのこと何て話したのぉ」
「お前の話をしてどうする」
へ……？　とアリスハートが目を丸くした。

「こ、この性格ねじ曲がった根暗の狼男っ。また引っ掛けたなぁっ」
「ノヴィアには言うな」
　ジークは構わず、鋭く、釘を刺した。
「う……なんでよぉ。ノヴィアはあんたについて行きたいんだよぉ？　急にそんな……」
「急にじゃない」
「え……」
「ずっと考えていた。ノヴィアが戦う力を手に入れてから、ずっと……」

「矢が……見えます」
　ノヴィアが言った。その眼前に、たちまち一本の金の矢が現れ、宙に浮かび上がる。
　幻視の力――そこにそれがあるという幻を見ることで実際に具現させる力である。
　とはいえ何でも具現出来るわけではない。人や動物など複雑なものや、火や水など形の定まりにくいものは、まだ到底、無理だった。
　ひゅっと空を裂いて、矢が壁に突き立った。〈銀の乙女〉達が感嘆した。石の壁を穿つほどの矢を、少女は放ったのだ。その幻視と、透視が、ノヴィアの視覚にやどる力だった。
「その矢で、命を奪ったことはある？」

老女が訊いた。ノヴィアが驚いた。矢がすっと消え、壁には穿たれた穴だけが残った。
「無い……です」
「その矢で、命を奪えると思う？」
はい、と答えた途端、ノヴィアの体が震えた。戦いの時は夢中で、冷静に考えたことはなかったが、今、その事が無性に怖かった。
「では私の命を、その矢で奪えるかしら？」
「出来ません、そんな……」
「私が貴女の敵なら、矢を私に放てる？」
「はい……でも命を奪おうとは思いません」
「では、ジークが、殺せと命じたら？」
老女が、そろりと、訊いた。
「出来ます」
ノヴィアが言った。ほとんど即答だった。体の震えが、ぴたりと止まっていた。
「なぜ……？」
「ジーク様がそう命じるからには、きっと何か考えがあるからです」
「いい子ね……」

老女は目を細め、口の中で、そっと呟いた。
「確かに……このまま戦場につれていくには、危険な子だわ……ジーク」
夕刻になってようやく審査から解放され、ノヴィアはジークが滞在する部屋を訪れた。
「ただ今、お食事の用意をいたします」
「今日はいい。ゆっくり休め」
「いえ、気持ちを落ち着けたいんです。ご用意させてください」
奮起するノヴィアをアリスハートが手伝い、
「すまんな」
ジークも、いつも以上に黙々と食べている。
別れの前に、味わっておこうというのだろうかと、アリスハートは心中複雑である。
一方、ノヴィアも複雑な顔で、
「どうしても、こうなってしまって……」
赤やら緑やら、やたらと強い色彩がごたまぜになって、あぶくを立てているものを見つめている。目が見えるようになっても全く変わらないのがその料理だったのだ。
「いや、ほら、見てくれはヒドイかもしんないけどぉ、食べると美味しいんだよぉ」

「そのうち……見た目もちゃんとします」
だが、そうすると不思議なことに、ひどく味気なくなってしまうのである。ジークはそもそもその必要を感じていないかのように平らげ、
「審査は上手くいってるようだな」
「はい。そういえば、ジーク様が最初に紋章を得たのも今の私の歳だと伺いました」
ノヴィアが嬉しそうに言う。老女が審査の合間に、ジークのことを色々と話してくれた。そのジークの武勇伝は、まさに桁外れだった。
「ジーク様は、これまで七つの紋章を得たと伺いました。大変な道のりですよね」
「ああ……」
「最初に紋章付きの剣を得た時〈招く者〉になられたと伺いました。よろしければ、その時の事を聞かせて頂きたいんです」
一日中、質問され続けたので、逆に誰かに質問したくなっているらしい。一方、アリスハートは、今日に限って言葉少なだ。
「ちょうど……今のお前と同じ歳の事だ」
ジークは言った。そして滅多に無いことに、自分の過去を静かに話し出したのだった。
その一言一言が、アリスハートには、まるでジークの別れの言葉に思えてならなかった。

かつて戦災孤児として育ち、十四歳で剣奴として戦場に売られたジークは、死者の声を聞くという才能で戦場を生き延びた。そしてその才能を求めたのがドラクロワである。長い銀髪に白皙たる容貌、澄んだ青い目に強い意志を秘めたその青年は、この世から争いを無くすために、ジークが必要だと言った。

ジークは、そのドラクロワに強く惹かれたが、一方でなぜ自分なのか分からなかった。死者の声を聞くことが、そんなに凄い力だと思えなかったのだ。何度そう問うても、

「〈招く者〉――それがお前の才能だ」

ドラクロワは、当時のジークには意味不明の言葉を告げるばかりである。

「私が受け継いだ聖堂に、伝わる秘儀だ……今はまだ、詳しく教える事は出来ない」

その秘儀について教えるには、ジークが、ドラクロワの配下になることが条件だった。だがジークは金で買われた剣奴である。軍籍を移すにも金が要る。ドラクロワが金を用意したが、兵団長が、首を縦に振らなかった。

要するにふっかけられたのである。タイミングも悪かった。当時、他にもジークを欲しがっている剣士団があったのだ。兵団長は、その剣士団とドラクロワの間で、ジークの値を吊り上げさせた。だいたい同額のところで微妙に競り合うようになると、

「お前ぇの好きな方に行かせてやるぜ」
欲深な兵団長は、ジークに言った。好きな方を選ばせる代わりに、軍籍が移る際にジークに支払われる金を、寄越せというのである。
「今の兵団にいます」
ジークはむっつりと返した。どこにも売られなければ、兵団長には一銭も入って来ない。
「可愛いつらして、可愛げの無ぇガキだ」
そう言って兵団長はジークをぶん殴った。戦場に似合わぬ整った顔立ちに、少年兵らしからぬ鋭い目。長い赤髪を束ね、痩せて小柄な身に、そぐわぬほどの長剣を背負う——というのが当時のジークの姿だった。
「生意気ぬかすと男娼にして売り飛ばすぞ」
だがジークは顔色一つ変えない。どんなに殴りつけても、静かに見返すだけである。兵団長も、人形を殴ってるようで気味が悪い。
「お前ぇの給金の四分の一だ。それだけ払や、好きな方を選ばせてやる」
実は兵団長も、さっさとジークを売りたがっていた。確かにジークは顔に似合わず、戦場では滅法、稼ぐ。だが先日死んだあいつが言うには、とか、さっき死んだやつが今こんなことを言っている、などと無表情に口にするジークは、薄気味悪くてしょうがないのだ。

そんなジークが欲しいという奇特な者がいるうちにさっさと売り飛ばすに限った。
さんざん殴られて、兵団長の幕舎から出てきたジークに、同じ剣奴仲間が声をかけた。
「せっかくの綺麗な顔が、ひでぇざまだな」
くっくっと笑いながら、水で濡らした布を渡してくれた。名をシフという。ジークと同じ里から売られてきた剣奴である。戦場に来る馬車の中で、絶対に仲間を裏切らない、仲間だけが全てだと誓い合った一人だった。
「俺が殴られると分かってたのか、シフ」
憮然と鼻を拭いながらジークが言う。
「お前は余計なことばかり言うからな。世渡りが下手だと、そのうち味方に殺されるぜ」
「それが言いたくて待ってたのか」
「本当に愛嬌の無ぇ野郎だな。わざわざ救護舎から水と布をくすねてきたのによ」
「お前が殴られそうなときは、俺がお前のために用意しておいてやるよ」
剣奴仲間は、呆れたように肩をすくめた。
「例の貴族様がまたお前に会いに来てるから、教えてやりに来たんだよ」
「あの男が？　どこだ？　兵舎か？」
途端に目の色を変えるジークに、

「別にお前の親が突然現れたわけじゃねぇ」
　剣奴仲間は、面白くなさそうに言う。
「貴族のぼんぼんが、単に、意地になってお前ぇの値を競り合ってるだけだろ」
「やめろ……あの男のことを悪く言うな」
　ジークが声を低めた。それがジークの怒りの表現だった。怒れば怒るほど声が低くなり、ぼそぼそと何を言っているのか分からなくなったかと思うと、いきなり剣光が閃き、決まって相手の額を、横一文字に切り裂くのだ。
　ジークの剣は恐ろしいほどの迅速さで有名だった。
　相手は、己の額から噴き出す血で、一瞬に視界を失う。いつか男色好みの兵が五人がかりでジークを襲ったことがあったが、そのときも全員が額を切られた。顔中を血で真っ赤にして逃げ惑う兵の真ん中で、ジークは一人、ぶつぶつと何やら呟き続けたという。
「待てよ。実は俺も、声がかかってるのさ」
「お前にも？　あの男が？」
「馬鹿。剣士団の方さ。知らねぇのか」
「何が」
「剣士団の団長だよ。なんでお前を欲しがってると思ってんだ。くそっ、あの兵団長め、

お前ぇに何も言ってねぇんだな」
「だから何が」
「ホスルだよ。里で一緒だったホスルが、剣士団の団長なんだよ」
ジークが愕然となり、咄嗟に言葉を失った。
「凄ぇぜホスルは。剣奴から剣士になって、今じゃ団長様だ。俺達の中で、一番の出世頭だぜ。俺達みんなで、ホスルを助けるんだよ」
「俺……どうしよう」
ジークはやっとのことでそう言った。剣奴仲間がぽかんとなり、ついで怒りの顔で、
「馬鹿野郎！」
猛然と怒鳴った。ジークがびくっとなった。
「ホスルは、仲間の剣奴を、みんな剣士団に入れるつもりなんだ。そうすりゃ仲間同士が、戦場で顔を合わせて、殺し合うなんてこたぁなくなる。それどころか力を合わせて戦えるんだ。こんな夢みてぇな話があるかよ」
ジークはうつむいた。まるきり少年の顔で唇を嚙んでいる。剣奴仲間も、哀しそうに、
「やめとけよ。貴族の従卒なんて、ろくな死に様しねぇよ。ホスルを選べよ、な？」
かきくどくような口調になって言う。

「お前を欲しがってるあの貴族、どう見ても優男じゃねぇか。あれじゃ戦場で生き残れねぇよ。どんな手柄立てさせてくれるんだよ」
答えるすべのないジークに、剣奴仲間も、
「……よく考えろよ」
それだけ言い、去っていった。考えるまでもなかった。ジークが、仲間同士の誓いを忘れるはずがない。ただ、哀しかった。ドラクロワという人物の期待を裏切ることが、どんなにひどく殴られることよりも辛かった。

兵舎に戻るなりドラクロワが出迎え、ジークの殴られた顔を見て血相を変えた。
「ひどいな。あの兵団長か」
本気で怒った。ジークは目を伏せた。自分が殴られたことで、ドラクロワがここまで怒ることが嬉しく——そして切なかった。
「口応えした俺が悪いんです」
憮然と言って、ドラクロワから身を離した。ちらりと見たドラクロワの顔立ちはいかにも綺麗で、今まで殴られたことなど一度もないような滑らかな頬をしていた。だが——
「ふむ。私も騎士団に入団したての頃は、無意味なしごきで、ひどくやられたものだ」

そういう意外さが、いちいちジークの心を惹いた。いったいどこの世界の貴族が、剣奴を相手に、自分がしごかれた話などするだろう。貴族というのは威張り腐って、自分が完璧だと人に思わせるのが仕事ではないのか。

「顔の造作が変わるほど殴られてな。次の日、鏡を見て悲鳴を上げてしまったよ。何せ見たこともない化け物がいたわけだからな」

そう言って可笑しげに笑うのだ。そんな風にドラクロワは、ジークと何気ない話をしては去っていくという事を繰り返していた。

兵団長と、ジークの金額について話し合っているのは分かっていたが、ドラクロワはそのことはあまり話さなかった。ドラクロワは決してジークを商品扱いしなかったのだ。

「――俺は今、幾らですか」

以前、ジークが訊いたとき、ドラクロワは正直にその金額を告げた。そして、

「だからといって、それがお前の命の額などと思うな。お前は人だ。物じゃない」

呆れるほど真剣に言い述べたものだった。

「……元気がないな。ひどく殴られたか」

ドラクロワの気遣わしげな眼差しに、ジークはかぶりを振ることしか出来ないでいる。

「また、剣が増えたのか？」

ドラクロワが、ジークの僅かな荷物を見た。布に巻かれた剣が、大切に置かれている。以前、ジークがいない間に、ドラクロワが、勝手にその剣を手に取った事があった。
そのときのジークの怒りは熾烈を極めた。いきなり斬りかかったのだ。ドラクロワは咄嗟にジークの剣を受け、決して剣技で劣らぬところを見せた。何合か打ち合ったところで、
「いったい、何を怒ってるんだ……？」
ドラクロワが、声を荒らげて訊いた。ジークは怒りに震えながら、言った。
「……俺の仲間の剣に、触るな」
同じ里で育った剣奴仲間の剣だったのだ。仲間が死ぬたびに、みな出来る限りその剣を見つけるようにしていた。ジークとともに戦場に売られた剣奴は十六名。そのうちジークは既に三振り、持っていた。
「……違う。仲間が死んだわけではないか」
ドラクロワが不思議そうにジークを見つめる。憮然として口を閉ざしがちのジークの内心を、ドラクロワはよくそうやって謎解きでもするみたいに探ろうとする。ジークにはそれが煩わしくもあり、嬉しくもあった。だが今回ばかりは、ただ哀しいだけだった。
「すいません……貴方のもとに行けません」
やがてジークは顔を伏せたまま告げていた。

ドラクロワが息をのむのが気配で分かった。怒られる、罵倒される。そう思った。だがかけられたのは意外なほど優しい声だった。
「私が、気づかぬうちにお前を苦しめてしまったのか……？　知らぬままお前の大事な仲間の形見に触れてしまったように？」
ジークは、慌てて顔を上げた。
「違うんです。俺……俺は……」
どちらも大事にしたいのに、どちらかを棄てねばならない事があまりに辛く、何をどう言えば良いのかも分からなかった。このままドラクロワが怒って帰ってしまったらと思うとひどく焦ったが、この男は静かにジークの言葉を待っててくれた。
「俺を買おうとしてる剣士団の団長は、俺と同じ里の出なんです……仲間なんです」
やっとの思いでジークは言った。するとドラクロワは、意外なほど愕然として、
「あの男が仲間……。あの男とは、お前のことで何度も話し合った。あれは危険な男だ」
「危険……？　ホスルは里の仲間でも一番、優しかった男です。仲間同士、誓い合おうと最初に言い出したのもホスルでした」
思わず強く言い返していた。ドラクロワは、何かを言いかけたが、それをのみ込み、
「お前にとって……仲間は全てだったな」

代わりに自分に言い聞かせるように、呟いていた。ジークはまた哀しくなった。せめて、どれほどドラクロワに励まされ、影響を受け、そして感謝しているか伝えたかったが、
「何度も来てくれたのに……すいません」
結局、言えたのは、それだけだった。
ふと、ドラクロワは、微笑した。
「お前が羨ましい」
そんなことを言った。ジークが目をみはった。ドラクロワの声には正直な響きがあった。
「何があっても信じられる仲間がいる……」
独り言のような口調だった。
「もう、ここに来ることも無いな」
ジークはただじっとドラクロワを見つめた。
「お前が選んだ剣士団に栄光があることを祈っている。いつかまた会えることを……」
ひどく呆気なくドラクロワは出ていった。
ジークは呆然と宙を見ていた。何も考えられなかった。手が白くなるほど拳を握りしめ、声を殺して泣くことしか出来なかった。

兵団長は、ジークの給金をかすめ取れなかった。ホスルがそうさせなかったのだ。
「俺達の仲間から、もう誰も、何も、かすめ取らせない。俺達の物は、俺達の物だ」
ホスルは、傲然と言ったものだ。長身だが、腕も肩も細い。とても剣士団の団長には見えない。だが短く刈った黒髪も、赤銅色の肌も、賢そうな顔も、精悍だった。全身が傷跡だらけで、腕などは、何色の肌をしているのか分からぬほど、傷に傷が重なっている。
「ようこそ、ホスル剣士団へ」
にやりと笑んだ頬も傷跡だらけで、相当の修羅場を生き抜いてきた事を物語っていた。
ジークとともに、シフとオダルという剣奴が剣士団に買われている。同じ里の出の剣奴は、その剣士団に六人もいた。みな涙ぐみながら、再会を喜び合った。
「見ろ、これが俺の剣だ」
ふいに、ホスルが剣を掲げた。とある聖堂の紋章付きの剣だ。武功を認められ、聖堂から剣を授かり、剣士団を組織する許しを得たのだ。みな昂奮した。なんと素晴らしい栄達だろう。思わずみなでホスルの名を唱えた。
幸せだった。いつ仲間同士で戦わねばならないかと怯えていた剣奴達が、一人の男の下で力を合わせることが出来るのだ。その幸せを噛みしめながら兵舎に案内されたジークに、
「相変わらず聞こえるのか、ジーク」

ホスルが呼びかけた。ジークが死者の声を聞くことは有名だった。ふと、危険な男だ、というドラクロワの言葉が思い出された。だがジークの目には、ホスルは何も変わっていないように見えた。どんな逆境でも常に活路を見いだす、賢くて、仲間思いの剣奴——

「これをお前に預けたい」

ホスルが言って、何振りかの剣を渡した。

「仲間達の剣だ。お前が弔ってやってくれ」

ジークはホスルを見つめた。かつて戦場へ運ばれる馬車の中で、仲間が全てだと言った男が、確かに、昔と変わらず目の前にいた。

「あと、これもだ」

それはホスル自身の名が刻まれた剣だった。

「剣奴ホスルは死んだ。剣士ホスルがここにいる。お前が持っていてくれ」

ジークは驚いた。

「俺——？　俺でいいのか？」

「お前は生き残る男だ、ジーク。だから是非ともお前が欲しかった」

「生き残る……？」

「そうだ。お前より剣が強い男は、ごまんといる。俺だってお前に勝てる自信はある」

ずけずけとした言い方に、思わず笑みが零れた。里にいた頃はジークが一番、剣の腕が弱かったのも、仲間内では有名な話だ。
「弱いお陰で、色々と気づけたさ」
するとホスルは意外なほど強くうなずいた。
「正解だ、ジーク。剣の腕比べするために戦場にいるんじゃない。生き残るためだ。そのことをお前はよく知ってる。だから死神も、お前を生かしたくなるのさ」
最上級の誉め言葉だった。ジークは頰が赤くなるほど照れた。その肩をホスルが叩いた。
「お前には、いずれ部隊を一つ任せたい」
ジークはうなずいた。何としてでもその期待に応えるという気概が湧いていた。

「いいか、命令は絶対だ。俺が剣士になれたのも、どんな命令にも従ったからだ。全ての命令には意味があると思え。いいな」
戦場で、ホスルは言った。誰も逆らわなかった。ホスルは既に絶対的な存在だった。
ホスル剣士団は、強い団結の下で次々に戦場を勝ち抜き、ジークも大いに戦った。
そんなある日、同じ剣奴仲間のオダルが、ホスルと揉めた。オダルは、仲間のシフとともに、ジークとは別部隊で戦っていた。

「もうホスルの命令をきくのは嫌だ。敵と戦うのが嫌なんじゃない。命令が嫌なんだ」

オダルは半狂乱になって叫んだ。しまいには何を思ったか剣を抜いてホスルに斬りかかった。ホスルは容赦せず、一刀のもとにオダルを斬り伏せた。みなしんと静まりかえる中、

「ジーク……葬ってやれ」

ホスルはそう言って兵舎に戻った。

「オダルが悪いんだ……」

誰かが言った。みなそれに賛成した。ジーク一人が、オダルを葬りながら問うていた。

「なぜだ……オダル。なぜ……」

ごうごうと怨みの風が吹いた。ジークはその怨みの凄まじさにオダルが何と訴えているのかさえ分からず、ただ呆然としていた。

しばらく経って、何人かがオダルと同じように半狂乱になって、ホスルやシフに斬られるということが起こった。そのため部隊が手薄になりジークと何人かがそちらに回されることになった。六人が狂死したのである。どれほど凄まじい戦場かと覚悟したが、部隊はむしろ戦場を離れ、近くの村へ向かった。

既にシフ達が先行していた。ジーク達が村に到着したとき、そこは血の海だった。女子供まで皆殺しになっている。愕然となるジーク達に、シフが血まみれの剣を手にわめいた。

「何をしている出口をふさげ。村人が逃げるぞ。ホスルの命令だ、皆殺しにしろ」
みな、弾かれたように動いた。ジークだけ動かなかった。いや、動けずにいた。
「やめろっ！　みんなやめろっ！　誰も武器を持ってないんだ。やめろっ！」
ジークが慌てて叫びを上げると、
「ホスルの命令なんだぞ、ジーク」
シフが不思議そうに返した。部隊のみながジークの周りに集まってきていた。そこへ、
「略奪部隊の仕事は気に入らんか、ジーク」
なんとホスル自身がやって来て言った。その全身が返り血で真っ赤だった。
「お前が毎日食っている糧食はどこから調達してると思ってるんだ、ジーク」
ホスルが笑った。ジークは凍りついた。
「色々な騎士団の糧食を、俺達が調達してるんだ。聖堂も黙認してる。これも立派な仕事だ。武功にはならんが報酬は高いぞ」
「ふざけるなっ！」
ジークが叫んだ。吐きそうだった。村人を殺して奪った食糧など、人の肉を食うのと同じではないか。しかもそれが日常的に行われている事がたとえようもなく恐ろしかった。
ホスルの表情が消えた。シフの表情が消えた。みなの表情が消えていた。ただジークだ

けが怒りと恐怖に顔を歪ませていた。
「お前には期待していたんだがな……」
ホスルがぼそりと言った。それが合図になった。
みながジークに斬りかかって来た。ジークは無我夢中で応戦し、片っ端から斬った。
気づけばシフが目の前にいて、驚いたようにジークを見ていた。ジークの剣が、シフの胸を深々と貫いていた。シフがそのまま後ろに倒れ、自然と剣が抜けた。
ジークは呆然とシフの死に顔を見つめた。
ふいにホスルが斬りかかってきた。咄嗟に剣で弾くが、胸の中にぽっかり穴が空いたような感じで、気力が追いつかなかった。
「生き残ることが全てだ！　確実に生き残るために弱い者を殺して食って何が悪い！」
ホスルの叫びとともに、ジークの左腕に、灼熱が走った。二の腕を切り裂かれたのだ。
ジークが呻いた。左手が痺れたようになって動かない。右手だけで剣を構えるが、ホスルの剣を受け止める自信は、もはやなかった。
そのとき、凄まじい声が飛んだ。
「ジーク！」
なんと、騎士が馬に乗って駆けてくるではないか。騎士は苛烈な斬撃で、剣士達を何人

か倒すや、ジークを馬上に引き上げ、すぐさま走り去った。ホスルが怒声を上げて追撃を命じたとき、既に騎士の姿は消えていた。

「危ないところだったな、ジーク」

そう言って、騎士が馬を駆りながら面頬を外した。

声だけで既に誰か分かっていた。だがその顔を見た途端、ジークは震えた。

騎士はドラクロワだった。なぜここにいるのか訊きたかったが、驚きに声が出なかった。

「以前から、ある剣士団が、各地の村を襲っているという情報があってな。内偵を命じられていたのだ。厄介な仕事を押しつけられたと思ったが……お陰でお前に会えた」

そうしてドラクロワは辺りを振り返り、

「何人かの騎士と一緒にいたんだが……」

誰もいないことに苦笑した。多くの騎士団が、ホスルから糧食や物資を買っているのだ。ホスルをまともに内偵する者などドラクロワ一人なのだという。ジークはじっと押し黙って聞いていた。ドラクロワが騎士団の砦に戻り、医師を呼んでジークの手当てをさせている間も、ジークは一言も喋らなかった。

「左手は、治るかどうか分からないそうだ」

ドラクロワは、医師の言をそう伝えた。腕の重要な筋を傷めたのだ。日常生活に支障は無いが、剣を振るうまでに回復するにはよほどの運と努力が必要だという。

「まだ右手が生きてます」

そこで初めてジークが言葉を発していた。

「助けてくれて……ありがとうございます」

幾ら感謝しても、し足りなかった。

「何とまぁ、野生の獣のような男だな。腕一つ失ったくらいでは、悲しみもしないか」

ドラクロワが笑った。そして静かに訊いた。

「まさか復讐しに行くわけではあるまいな」

ジークは、握力を失った左手を見つめ、

「しなければいけないことをするだけです」

「誰もホスルを倒そうと思わないのなら、自分がやらないといけない……そう思うのか」

「はい」

「では、今からお前は、私の部下だ」

ジークはぽかんとなった。

「私の仕事は、あの剣士団の内偵だ。証拠をつかみ次第、誅伐しろと言われている」

「俺と貴方の二人だけで？　無茶だ！」
「一人で行く方がよほど無茶だろう」
「でも……そんな、貴方まで……」
すっとドラクロワがジークの左腕に触れた。
「この左腕――私にくれ、ジーク」
「な……？」
「お前に力を与えてやる。〈招く者〉――万軍を招く……たった一人の軍団の力を」

# 第二話　一矢、報いて

「それでジーク様は〈招く者〉に……」
少女が、淡く澄んだ紫の目を、驚きに見開いて言った。その栗色の髪や、青い法衣が、獣油ランプの火の灯りに輝いている。
「〈招く者〉の秘儀――まだそのときは、それが、どんな力か分からなかった……」
男が、淡々と返す。鋭く引き締まった顔立ちをランプの火よりも赤い髪が飾っている。ボロボロの白外套を羽織り、足下には赤籠手に黒革の鎧と、殺伐とした装備を並べているが、背後の壁には、実に戦いとは無縁そうな、銀色のシャベルが立てかけられている。
「で……？　ねぇねぇ、続きは？」
テーブルの上で、小さなものが急かす。
掌ほどの背丈の妖精だ。金瞳金髪、その背の羽も淡い金色を帯びている。そこへ、
「待ってアリスハート。今、薬湯をご用意致しますね、ジーク様」
少女が、にっこり微笑んで言う。男がうなずき、少女が身も軽げに台所へ行くと、それ

まで男の語る過去を面白がって聞いていた妖精が、急に、しょんぼりとなって言った。
「ねぇ、狼男ぉ……本当に、ノヴィアを置いてっちゃうつもりなのぉ？」
狼男とは、男——ジークの鋭い目を茶化した渾名だ。アリスハートは口を尖らせ、
「だから、急に過去の事、話したりするのぉ？　いつもは、石みたいになーんにも話さないくせにさぁ……」
「ノヴィアが聞きたがっている。初めて受章する緊張を紛らわしたくて、俺の話を、聞きたいんだろう……」
ジークは言う。ノヴィアが聖法庁の下部組織である〈銀の乙女〉から紋章を授かる事が、今回の旅の目的だった。そこで受けねばならない審査の緊張を乗り越えようとして、ノヴィアは、かつてジークが初めて紋章を得た時の話を——〈招く者〉の力を得た時の過去を聞かせてくれるよう、頼んだのだ。だが、
「ノヴィアは、いつだってあんたの事が知りたいのさぁ……あんたの従士としてさぁ」
アリスハートは言う。ジークは、ノヴィアの事を〈銀の乙女〉に任せ、一人で旅立つつもりなのだ。むろんノヴィアは、ジークと共に旅するのを何より願っている。今回、紋章を得て正式に聖道女として認められるためにこの地を訪れたのも、ジークの従士として胸を張れる自分になりたい一心からだ。

そんな二人の思いを知りながら、アリスハートはジークに口止めされ、何もノヴィアに言えずにいた。それが、どうにも心苦しく、
「あたし、ノヴィアだけは裏切りたくない」
いつもは陽気なアリスハートが哀しげにぽつりと零すのへ、これまた滅多に無い事に、
「すまん」
ジークが真面目な顔で詫びるものだから、
「もぉ、あたし、どうしたら良いのか、訳分かんなくなっちゃうよぉ……」
頭を抱える、アリスハートなのだった。
そこへ、ノヴィアが、薬湯を温めて持って来た。かと思うと、じっとジークとアリスハートを見つめたまま、そこに突っ立ち、
「どしたのぉ、ノヴィアぁ」
「ううん……。何だか、眩しくて」
はにかんだように笑っている。灯りなどランプ一つしかない。だがノヴィアには、相手の顔が見える事自体、眩しく感じられるのだ。
盲目だったノヴィアは、ジークの顔さえ分からぬまま従士となった。礼を言って薬湯の椀を受けとるジークを見るノヴィアの眼差しは、まるで太陽でも見るみたいに眩しげだ。

実際、その視覚にやどした力が使いこなせず、盲目に陥っていた自分を導いてくれたジークは、ノヴィアにとってこの世に光をもたらした太陽そのものだ。そんなノヴィアが、これからもジークの従士でいたいのは当然ではないか。そう思いつつもアリスハートは、凄惨な戦場を、これ以上、ノヴィアに見せたくないというジークの気持ちも分かるのだ。
むしろジークはその気持ちから、ノヴィアに、過去を話しているのではないだろうか。
裏切り合い、殺し合う——そんな世界に、これ以上、ノヴィアが関わる事は無い、と。
「俺が、腕を斬られた後の話をしよう……」
ジークが、言った。少年時代——かつてジークは剣奴として戦場に売られ、信じられるものは同じ剣奴仲間しかいなかった。その仲間の一人であるホスルが、剣奴から剣士となって剣士団を組織し、ジークもそれに参加する事になった。だがジークがそこで見たのは、村を襲い、糧食を強奪する、ホスルの略奪部隊であった。ジークはみなを止めようとして逆にホスルに斬られて腕に傷を負い、窮地に陥ったところをドラクロワに救われたのだ。
ヴィクトール・ドラクロワ——長い銀髪に白皙たる相貌、ある聖堂の後継者にして、気高い理想を抱く青年だった。今でこそ、聖法庁から秘儀を盗み出し、ジークに追われる身であるドラクロワこそが、かつてジークを見いだし、力を与えた人物であったのである。
当時——負傷した身でホスルを倒そうとするジークに、ドラクロワは、告げた。

「お前のその左腕に、秘儀を授けよう……我が聖堂に伝わる〈招く者〉の力を──」

それはまさしくジークの人生の、新たな始まりの瞬間だった──

ドラクロワは、ジークをホスル剣士団から救った後、騎士団に許可を取って砦を離れ、ジークをつれて自分の聖堂へ戻っていた。

名目はホスル剣士団の調査だが、ドラクロワもジークも調査など考えていない。あくまで、ホスル剣士団を打倒するための行動だ。

ホスル剣士団は戦場に近い村々を襲い、食糧や物資を略奪する事を裏の仕事としていた。多くの騎士団や聖堂がそれを黙認し、誰も真面目に調査しようとしない中、

「なぜ貴方は、剣士団を倒そうと……？」

ジークが訊くと、ドラクロワは笑って、

「貴方などと呼ばないでくれ。歳だって二つか三つしか離れていない。お前でいいよ」

当時のジークには、無茶な注文をしつつ、

「かの剣士団を倒すのは、誰もやらないからさ」

そう答えていた。誰も進んでやらない困難で危険な任務をこなす事で、武功を挙げ、栄達を狙うのだという。理想を実現するためには地位が必要だとドラクロワは言い、また、

「それに……見過ごすには非道すぎる」
ホスル剣士団は、女子供まで皆殺しにして村の食糧を奪って行く。皆殺しにするのは生き残った者に怨まれるのが怖いからだ。だから幼い子供まで殺す。異常なやり方だった。
「お前が剣士団を倒すのは復讐のためか？」
ドラクロワが微笑して訊くと、ジークは、
「剣奴は、武器を持たない人間は殺さない」
そう答えた。それが剣奴の、せめてもの誇りだった。だがホスルは、その誇りを棄てた。
「俺は、あいつを止めたい」
必死の思いを込めて、ジークは言った。
ドラクロワは満足そうにうなずき、
「お前なら……この聖堂に伝わる力を、正しく受け継いでくれると信じている」
水晶球と、古ぼけた手記を、並べて見せた。
「これらが、私が受け継ごうとして何度も試しながらも、諦めざるをえなかった秘儀だ」
ジークは押し黙った。これが秘儀だと言われても、正直、訳が分からなかった。
「私の祖父の遺した手記だ。これを読めば、全て分かるはずだ」
そう言われて、ジークはまず手記を読んだ。

読み書きは里で叩き込まれている。軍令が理解できずに無駄死にする事を防ぐためだ。
だが読むのに数日かかった。量が多い上に、難しい言葉使いが理解出来なかったのだ。
「……『襟度を示す』って何ですか」
「普通なら誰も受け入れないような相手でも、進んで受け入れる心の広さを示すことだ」
「……『赤裸々』って？」
「何でも包み隠さない様子のことだ」
「じゃあそう書けばいいじゃないですか」
「まぁ……言い回しというのも、覚えればなかなか便利なものなのだよ」
ドラクロワは困ったように頰を搔いて笑う。
『死者に襟度を示し、自らをもまた赤裸々に示さば、死者をして語らしめん』
と手記は始まっていた。どんな死者でも受け入れ、自分を隠さず見せれば、死者は語り出す——そう理解した瞬間、ジークは愕然となって震えた。まさしくジークはそうして死者の声を聞き、戦場を生き抜いてきたのだ。
「まさか、これは……俺と同じ……」
ドラクロワは、ただ、黙ってうなずいた。
それは、死者の声を聞く男の手記であった。

ジークと全く同じ才能を持った人物が、時を超えて、ジークに、語りかけてきたのだ。
ジークは夢中で読んだ。難しい言葉使いもすぐに気にならなくなった。むしろ相手の思いがひしひしと伝わり、いつしか泣きながら読んでいた。自分と同じ才能を持つ者が、この世にいた事が、奇跡のように思えていた。
数日後——ジークは水晶球の前に立った。既に、手記が伝える恐るべき秘儀の知識を、ジークは完全に自分のものにしていた。
「その水晶は、聖印の原型だ……祖父の死後、誰もそれを受け継ぐことが出来なかった」
ドラクロワはそう水晶球の事を説明した。
ジークは、水晶球に左手をかざした。筋を傷め、剣を振るう握力を失った手だ。
「……怨みの重さで天に還れぬ死者の魂を弔うために……混沌の軍勢を世にもたらす」
ジークは、手記の秘儀を、そっと呟き、
「その力……俺が、受け継ぐ」
刹那、水晶球から激しい雷花が迸った。
「聖印が感応した……！」
ドラクロワの驚嘆とともに、水晶球が粉々に砕けた。いや、そもそもそれは水晶球に見えていただけで、実際は形の無い、力そのものだったのである。それが今、稲妻と化し、

にわかにジークの左腕へと走ったのだった。
ジークが絶叫を上げた。稲妻が腕を灼いて複雑な紋様を刻みつけたのだ。そしてその紋様を通して、稲妻が体内へと入り込んできた。
それは凄まじい力の流入だった。ジークは、そのとき闇へと落ちゆく幻の光景を見ていた。闇の底では、無数の死者が、怨みを晴らさせてくれと、ジークにすがりついてきた。〈招く者〉――死者達は、ジークを、そう呼んだ。ジークは闇の底で彼らを受け入れた。力を受け継ぐ事を受け入れた。まさしく襟度を示し、その心身を赤裸々にしたのだった。

一か月が経った。ジークはドラクロワとともに、ある街道にいた。地面に十振り以上の剣がずらりと突き立てられ、道を塞いでいる。
やがて向こうから数十人の剣士団がやって来た。先頭のホスルが、ジークの姿を見て足を止め、傷跡だらけの頬に、笑みを浮かべた。
「しばらくぶりだな。生きてたか」
剣士団が遠征した帰りを狙って待ち伏せたのだが、ホスルはまるで動揺もしていない。
ちらりと、ジークの右手を見た。その右手に、剣の柄を、縛り付けているのである。
「俺が斬ったせいか」

ジークはうなずいた。左手は使えず、右手だけで剣を振るうしかないための処置だった。
「そっちの男は、俺達を探ってたヤツか」
ホスルが顎をしゃくる。ドラクロワが剣士団を内偵していた事を知っているのだ。
「君らの悪事を報告しても誰も取り合ってくれなくてね。仕方なく我々だけで君らを倒す事に決めたのだよ」
ドラクロワは、微笑して言ったものだった。
ホスルが笑った。背後の兵達も笑った。略奪に慣れきった、残忍な笑いだった。
「剣の数だけは揃えたようだな……」
ふと、ホスルが笑みを消した。地面に突き立てられた剣に見覚えがあったからだ。全て、剣奴仲間達の、形見の剣だった。
「シフの剣まで……いったいどうして……」
剣士団の本拠地にある剣を、なぜジークが持っているのか。もし本拠地にジークが現れたら、問答無用で斬れと皆に命じてあった。
「お前の巣は潰した。誰も残っちゃいない」
ぼそりとジークが言った。ホスルが留守の間に、本拠地を殲滅したと告げたのだ。
ホスルが咄嗟に辺りを見回した。ジークの言う事が嘘でないとしたら、どこかに軍勢が

いるはずだからだ。だが明らかにジーク達二人だけである。目に見えてホスルは混乱した。
「剣を棄てててくれ」
ジークが言った。悲しい懇願の声だった。
「今さら剣以外に、生きる道があるか！」
それがホスルの返答だった。ホスルが剣を抜くと、兵達全員が、一斉に抜剣した。
「なぜ略奪の仕事なんて引き受けたんだ」
ジークが、周囲を囲む兵達を見もせず問う。
「それが、剣士になる条件だったからだ」
ホスルが告げた。ジークがかっと目を見開いた。刹那、左腕に眩い雷光が迸った。
「ジークが招く！　水刻星の連なりの下、凄魔アイベルとなって我が敵に見せしめろ！」
叫びを上げて、雷花をまとう左手を地面に叩きつけた。地中から噴き出す稲妻に、剣士団が驚愕して退くや——地面に突き立てられた剣の下から、何かがもこもこと土を掘り返して現れるのへ、誰もがぞっと凍りついた。
それは、剣を握る、人の形をしたトカゲの如き化け物であった。数は十三体。かっと牙を剥き、刃風を鳴らして兵達に躍りかかった。
「なんだ……なんなんだ、こいつらは！」

ホスルが愕然と叫び、そしてはっとなった。
兵達を猛然と斬り屠る化け物どもの剣技は、まさしく剣奴仲間達の技だった。
「こいつらは……まさか」
目を剣くホスルの前に、ジークが立った。
「みんなの魂を……俺が招いた」
悲しい顔で告げた。その時にはドラクロワも化け物どもと一緒に剣士団と戦っている。
「お前、やっぱり、死神に愛されてるよ」
ホスルが笑った。惚れ惚れするような笑顔だった。転瞬、その剣を凄絶に振るってきた。
ジークもまた応じて剣を振るっている。何度か激しく刃を衝撃き合わせるうちに、ホスルの顔色が変わった。右手だけしか使えないはずのジークに押されているのだ。
今やジークの剣技は新たな完成を見せていた。右手のみで振るう事を前提として、ドラクロワとともに工夫を凝らしたのだ。全身を躍らせて剣を振るい、その刃の届く範囲は両手で握るよりも格段に広い。
「ジークっ！」
ホスルが叫んだ。怒りのようでもあり、ジークを誉めるようでもあった。そして、その瞬間、二人の剣が、同時に半ばから折れ飛んでいた。

「紋章付きの剣が……剣奴の剣に負けたか」

ホスルが折れた剣を握りしめ、にやっと笑い、いきなり駆け込んできた。ジークが咄嗟に身をかわすや、そのまま崖下へと跳躍している。決して背を向けぬ、凄まじいまでの逃走の仕方だった。生き残るにはそれしかないと分かっていても簡単に出来るものではない。兵達も、化け物とドラクロワの強さに狼狽し、ホスルに従った。仲間達の屍を置き去りに、次々に崖へ身を投じ、姿を消した。

ジークが追おうとし、ぐらりと膝をついた。

「大丈夫か、ジーク！」

ジークはなんとかうなずいた。左腕は夥しい出血だった。折れ砕けた剣を握りしめ、

「……追わないと。ホスルを……」

「慌てるな。彼らが逃げ込む場所は一つだ」

ドラクロワの言葉をジークは素直に聞いた。

ここに来るまでも、ドラクロワは正確に剣士団の動きを読み、ジークはただただ感心して従ってきていたのだ。だがそのドラクロワにも、読み切れないものがあった。

剣士団が逃げ込んだ先は、ホスルに紋章付きの剣を授けた聖堂だった。

それ以外に、本拠地を潰されたホスルに行き場は無かった。
ジーク達は真っ直ぐその聖堂に先回りし、ホスルが逃げ込む前に捕らえる気だった。だが一歩遅かった。ドラクロワも、ホスル自身も、次に起こった惨状を予測出来なかった。
ホスルが聖堂の前で呼びかけた途端、門が開き、ずらりと並んだ弓兵が、出迎えていた。
「何だよ、お前ら」
ホスルが言った。子供が拗ねたような声だった。声の底に、果てしない諦めがあった。
ひゅっと矢が走った。助けを求めに来た剣士団が、逃げ場もなく次々に矢に射抜かれる中、ホスルは最後まで立っていた。胸に、腹に、腕に矢を受け、それでもじっと聖堂を、弓兵を、騎士を、そして自分達に略奪を命じた聖堂の聖職者達を、睨み続けていた。
「やめろっ！　やめてくれっ！」
ジークが叫んだ。ぴたりと矢の雨が止まった。ジークが駆けつけたとき、ホスルの体は矢でずたずただった。だがその背には一本も受けていない。ジークはそのとき初めて、ホスルの傷跡が、体の前面にしか無い事に気づいていた。ホスルは決して、逃げるときでさえも、襲いかかるものに対して背を向けてこなかったのだ。
そのホスルが、立ったまま血反吐を溢れさせて言った。
「俺達、弱い者が、生き残るため……仲間のため……命令、聞くしか、なかった……」

折れた剣が落ちた。宙をさまよう手が、ジークの左腕を、握りしめた。
ホスルの顔は、子供が泣くように、くしゃくしゃだった。
「悔しいなぁ……ジークぅ」
それを最後に命が消えた。どっと倒れ込む体を、ジークは歯を食いしばって抱き止めた。
「これは、どういう事ですかな聖堂長どの」
ドラクロワが、淡々と問う。
「悪逆無道の略奪者どもが、駆け込んで来たのでな。こうして退治したまでだ」
聖堂長は平然と返している。ホスル達が逃げ込んできたのを見るなり、一瞬で殲滅を決めたのだ。聖堂に逃げ込まれては自分達が彼らに略奪を命じた事が明らかになってしまう。そんな体面の悪い事態は避けねばならない。だから皆殺しにした。聖堂長は口でこそ言わなかったが、その本心は明らかだった。
ドラクロワがにっこり笑って肩をすくめると、聖堂長は、初めて本音を覗かせた。
「ドラクロワよ、お主のような若者が栄誉を求めるのも良いが、お陰で、こちらは大損なのだぞ。剣奴の代わりなど幾らでもいるとはいえ無料ではないのだ。紋章をやれば何でも言う事を聞く便利なヤツらだったものを」
「確かに大損ですな。全てを失うのだから。聖法庁からは、証拠をつかみ次第、略奪者を

誅伐せよとの命令でありますので」
ドラクロワが大声で言った。聖堂長も騎士達もぽかんとなり、そして、どっと笑った。
「大した冗談だ。お主、大物になるぞ」
笑って請け合う聖堂長に、刹那、ドラクロワは挨拶でもするみたいに剣を抜き打った。
「言われなくても、大物になるつもりですよ。貴方がたを倒してね」
聖堂長の首は、大口を開けて笑ったまま宙を舞い、地面に転がった。どうっと首を失った聖堂長が倒れた。騎士達が唖然とし――
「貴様ぁっ！」
一拍の間を置いて怒り狂った。たちまち矢が飛んだが、一本としてドラクロワには当たらない。ドラクロワの姿が、ふっと消え去り、気づけば騎士達の背後にいたからだ。
「幻術ですよ。まだ覚えたてなので、上着に穴が空いてしまいましたが……」
渋い顔で、矢が貫いたらしい外套の裾をつまむドラクロワに、騎士達が呆気に取られた。
そのとき、騒然と風が吹き荒れた。騎士達がぎょっとなって天を仰いだ。暗雲が渦巻き、ごうごうと唸りを上げて怨みの風が吹く中、
「そんなに悔しいのか、ホスル……みんな」
ジークが、ホスルの亡骸を横たえ、

「その怨み……俺が引き受ける」
刹那、ジークの左腕に雷閃が迸った。裂帛の叫びを上げ、左手を地面に叩きつけた。
地中から青ざめた稲妻が噴き出し、騎士達が度肝を抜かれて後ずさった。
地面のあちこちから、半ば形の定まらぬ化け物どもが、次から次へと現れるではないか。
形が定まらぬのは、死者の怨みが激しすぎて、ジークの力が足りないせいだった。それほどの怨みに満ちた化け物が、ぞろぞろと取り囲んだ。
「殺された剣奴と……そして村人達の魂だ」
ぼそっとジークが告げた。化け物どもが咆吼を上げた。動いた。化け物どもが一斉に騎士達に殺到した。ドラクロワでさえたまらず退き、息をのむほどの凄惨さだった。
騎士達は次々に化け物どもに貪り食われ、自分達がしてきたように、一方的に殺戮された。やがてその場に立つ人間が、ジークとドラクロワだけになると、化け物どもは、形を失い、もとの塵に還っていった。
その中で、十四体の化け物だけが、いつまでも消えずに、ジークの周囲に佇み続けた。
「シフ……オダル……」
ジークが呼んだ。十四体の化け物の名を、祈りを上げるように、一人一人呼び、
「……ホスル」

最後の一体の名を呼んだ。途端、仲間達は、咆吼を上げて形を失い――気づけばそこには、彼らが遺した十四振りの剣が突き立っている。
「もう仲間同士で殺し合う事なんてない……みんな、一緒だ」
ジークはそう言って、声を殺して泣いた。

このとき得た十四振りの剣に加えて、のち、ジークは残り二名の剣奴仲間とも、別の戦場で出会い、その剣と魂を託される事になる。
またドラクロワは、この誅伐の功績により、独自の戦士団を組織する権利を与えられた。
その事をドラクロワが告げに来たとき、ジークは、死者達を葬っている最中だった。
「聖堂の連中まで弔ってやってるのか」
ドラクロワは呆れたように言い、そしてジークの振るう巨大なシ、シャ、ベ、ルに感心した。
「ずいぶん、大きなシャベルだな」
「仲間の剣を溶かして、造らせました」
「形見の剣を、全部そのシャベルに!?」
ジークが淡々とうなずくのを見て、ドラクロワは大声で笑い、そして、深くうなずいた。
「彼らも喜ぶだろう。ずっと互いに一緒にいられるのだから」

そうしてジークに、ひと振りの剣を見せた。
「折れた剣の代わりに、受け取って欲しい」
差し出された剣の鍔元を、ジークは長い事見つめた。紋章付きの剣——ドラクロワが受け継いだ聖堂の紋章だった。
「俺が、剣士になる条件は何ですか？　ホスルのようにどんな命令でもきく事ですか？」
自分を救ってくれたドラクロワの命令であれば、何でも聞ける自信はあった。それこそ、ホスルよりも酷い事だってやれるだろう。
だが、ドラクロワは微笑してこう言った。
「ホスルとお前のようにだ」
咄嗟に意味を取り損ね、首を傾げた。
「お前はホスルの部下であったが、それ以上に、彼の友として、彼と戦っただろう？」
ジークは、こくんとうなずいた。
「それと同じことが条件だ」
ジークは眉をひそめ、そして急にその意味を察し、ぱぁっと顔が赤くなった。
剣奴仲間と同じように接すれば良いと、ドラクロワは言ったのだ。嬉しい反面、そんな事が出来るはずがないと叫び出したい気持ちだった。

「で、でも、貴方は……俺なんかより……」
「私なんかより、なんだ」
「身分も……」
「友というだけでは、駄目か」
ドラクロワの静かな声とともに、ジークの胸の中で、ずしんと重い何かが生じていた。
「お前が何者で、私が何者であるか。ただ友である……それだけでは駄目か、ジーク」
ジークはかぶりを振った。ドラクロワが真面目に言っているのは分かっていた。ドラクロワはジークが自分を信じるのと同じように、自分にもジークを信じさせろと言っていた。それは、ただ命令を忠実に守るよりも難しい事かもしれなかった。ホスルの時のように、いざとなれば命懸けで相手を止め、その是非を問わなければならないからだ。
ジークは大きく息を吸った。死んだ仲間達全員の名を心の中で唱えていた。彼らにどうすればいいか訊きたかった。そして答えは、訊かずとも自然と口をついて出ていた。
「俺で良ければ……喜んで」
途端に、また赤くなってうつむいた。
ドラクロワが笑って剣を差し出した。
「我が友ジークに、紋章を授ける。これは我が聖堂、我が系統の証したる紋章により、そ

なたに剣士の身分を保証するものである」
口振りこそ形式ばっていたが、何とも無造作に剣を渡し、そして受け取っていた。
のちにジークは格式に満ちた授章式を何度も経験する事になるが、このとき以上の喜びは無いと言っていい。こうしてジークは、右手に剣を、左手に秘儀の力を授かり、ドラクロワの戦士団の最初の一人となったのだった。

「狼男も、色々とあるのねぇ……」
アリスハートがしみじみと言った。ノヴィアの事でやきもきしていたのはどこへやら、すっかり話を面白がってしまっている。
「お話しして頂いて、ありがとうございます」
ノヴィアが頭を下げた。本心からの感謝だった。お陰で自分の審査の緊張など吹き飛び、目の前がぱっと明るくなる気分だった。
「少しは気が紛れたか」
「はい」
「なら今日はゆっくり休め」
「はい。ありがとうございます、ジーク様」

席を立ち、部屋を出ようとするノヴィアへ、
「ノヴィア」
ジークが声をかけた。
「お前に、俺が討てるか？」
ノヴィアは驚いて、目を大きく見開き、
「そんな……無理です」
笑って言った。桁違いの武力差を考えても無理な話だし、そもそもジークを討つなど、ノヴィアの心中では、想像もつかなかった。
ジークはうなずき、
「ゆっくり休んで明日に備えておけ」
それだけを言った。途端、アリスハートはどきっとした。まるで明日の朝にはジークが一人で旅立ち、居なくなっているような、そんな不安があった。ふと、ジークと目が合った。ノヴィアには何も言うなとジークは目で言っている。その眼差し一つで、アリスハートは完全に言動を封じられてしまっていた。
「お休みなさい、ジーク様」
ノヴィアが丁寧にお辞儀をし、ドアを閉めた。ドアが閉められるまで、ジークは静かに

ノヴィアを見つめていた。多分、ドアが閉められた後も、しばらく見つめ続けるだろう。その優しさが、他のどんな意地悪よりもノヴィアを傷つける事が分かっていても、アリスハートは、何も言えないでいた。

「可愛い！」
部屋に入るや叫ばれ、アリスハートはびくっとなった。ノヴィアの事について面談の場に呼ばれたアリスハートに、若い〈銀の乙女〉達が賑わうや、一人の老女が、
「お静かに」
穏やかに言った。別に睨んだわけでもないのに、みな慌てて居ずまいを正す。
老女はエレミア・フェルテール――審査長にして〈銀の乙女〉の最高位の一人である。
「お入りなさい、アリスハート」
アリスハートはおっかなびっくり、椅子の真ん中にちょこんと座り、老女を見上げた。
「ノヴィアとはどこで出会ったの？」
老女がにっこり笑って訊いた。まるで世間話でもするような気軽さだった。
その微笑みで、アリスハートの緊張はいっぺんに解けた。
後は立て板に水だった。老女に訊かれるままに、ノヴィアとの出会いや、ノヴィアとの

楽しい思い出や、ノヴィアが盲目になった時に、どんな風に過ごしたか話した。
もともとお喋り好きのくせに、ジークに口止めされたせいで、ろくに楽しく口を開けずにいたのだ。久々に喋りまくって気分が良かった。そしてあるとき、ふと我に返り、
「あのぉ……訊いて良いですか」
「なにかしら？」
「ノヴィアが紋章を貰えるの決まってるんでしょぉ？　なのに、あたしに何を訊くの？」
「その事はノヴィアには話した？」
「別に話さなくったって、ノヴィアなら絶対に紋章を貰えるもん」
「それだけノヴィアを信じてるのね」
老女が微笑んだ。
「では、ジークが、ノヴィアを置いてゆくつもりでいる事を話さないのは、なぜ？」
さすがに老女も、アリスハートが盗み聞きをしていた事を察していたらしい。
アリスハートは、それまで陽気にまくしたてていたのに、急にしょんぼりして、
「狼男が、ノヴィアを危険な目に遭わせたくないって言うからぁ……。でも……黙ってるだけで、なんだかノヴィアを裏切ってる気がするんだぁ……あたし」
「裏切ってるわけではないわ。ただ、見殺しにしているだけね。ノヴィアの意志を」

その言葉に、ぎょっとなった。確かにこのまま黙っていればノヴィアを危険から遠ざける事は出来る。だがノヴィアの意志は誰にも顧みられず、老女の言う通り、見殺しだった。
「私も、誰も、ノヴィアには話せないわ。貴女を除いてね、アリスハート」
あっと叫んだ。自分だけがノヴィアに自由に話せる立場にあるという事が、老女の一言ですとんとアリスハートの心に入ってきた。
「あたし、ノヴィアの友達だ」
目をまん丸にしてアリスハートは言った。そんな事も忘れていたのかと自分でびっくりした顔だ。老女も〈銀の乙女〉達も思わず微笑ましくなるほどの無邪気さだった。
ジークの旅についてゆく事がどれほど危険かなど、もはや関係無かった。ノヴィアの意志、ノヴィアの命だ。決める権利はノヴィアにある。なのに決める事も出来ない状況にあるノヴィアを、どうして見捨てられるだろう。アリスハートは本気で自分を恥じた。
「ノヴィアにチャンスを与えてあげなさい」
老女が決定的な一言を告げた。アリスハートは大きくうなずいた。ただ疑問があった。
「なんであたしにそんな事を言ってくれるのぉ。みんなノヴィアが狼男と別れてここに居た方が、良いと思ってるんでしょぉ？」
「貴女という〝鏡〟に映ったノヴィアを、覗いて見たかったからかしらね」

「鏡……」
意味は分からなかったが、アリスハートはその言葉が気に入った。お互いを映し合う鏡。
それならちゃんと映してあげないと。正直に、ありのまま。アリスハートは心に決めた。
「あたし、ノヴィアに話すよ」
それで面談は終わった。〈銀の乙女〉にドアを開けてもらってアリスハートが退室し、
「さて……ジークは、どう出るかしらね。あの子の、もう一つの大きな〝鏡〟は……」
老女が、そっと息をついて呟いていた。

ノヴィアは別室で〈銀の乙女〉の教義の問答をしているところだった。母からみっちり仕込まれたお陰で、いささかも返答に困らなかった。疲れはしたが、意気揚々と部屋を出て来たところに、アリスハートが飛んで来た。
「ノヴィアぁ、ごめんねぇえ」
言うや否や、アリスハートは泣き出した。
ノヴィアはきょとんとなっている。
「どうしたの、アリスハート？」
アリスハートは涙をこらえ、思い切って全てを話した。間もなく、アリスハートの目の

前で、ノヴィアは蒼白となって震えだした。
思いのほか、ドアは静かに開かれた。
部屋に居たジークは、事前に、気配で察していたらしい。ノックも無く開かれたドアを静かに見つめていた。ノヴィアも透視の力でそこにジークがいる事は分かっている。
「なぜですか……」
唇を震わせてノヴィアが言った。
ジークは答えない。口をつけていた薬湯の椀を置き、無言でアリスハートを見た。
「決めるのはノヴィアだよっ」
アリスハートが怒ったように言う。ここ丸一日のうっぷんをぶちまけるような声だった。
ジークはうなずき、白外套を羽織っただけで、鎧も籠手もつけぬ姿でシャベルを手に、
「ついて来い」
それだけ言って、部屋を出た。行き先は、聖堂の裏の空き地である。周りには誰もいない。夕暮れの陽射しが辺りを赤く染めている。
そこで互いに十歩ほど離れ、向き合った。
ノヴィアは、涙も、言いたい事も訊きたい事も全てこらえてジークを見つめている。

なぜ置いてゆくのか——全身が、震えながら、そう訴えていた。そしてそのノヴィアに、ジークは静かに、昨夜の問いを繰り返した。

「お前に……俺が討てるか？」

昨夜は分からなかった。だが今なら、ジークが本気で訊いているのが分かった。

「討てます」

ノヴィアがきっぱりと答えた。必死だった。そう答えるしかすべがなかった。

傍らで、アリスハートが愕然となった。自分が何もかも話したせいで、ジークとノヴィアの間には今や恐ろしい空気が張りつめようとしていた。アリスハートはそれに耐え、二人を見つめた。何が起ころうと、喋った以上は、全て見届けるべきだった。

どん！　ジークがシャベルを地面に突き立てた。かちりと柄を回し、現れた第二の柄を握りしめ、一瞬で銀の剣を抜き放つ。

ノヴィアもアリスハートも、声さえなくそれを見ていた。ジークは剣で、自分を中心に、地面に腕一つ分ほどの広さの円を描いた。

「この円が、俺の命だ」

ジークは、言った。

「そこから、俺を、この円から追い出せ」

「そうすれば、私を、ジーク様の従士として、認めて下さいますか」
ジークが、はっきりとうなずくのへ、ノヴィアは、零れそうになる嗚咽をのんで、敢然と、目を見開いた。
「矢が……見えます」
たちまち、金に輝く矢を幻視し――宙に具現させる。
矢が迅った。金色の軌跡を残し、真っ直ぐにジークへ飛来した。
ジークは微動だにしない。その右脚すれすれを矢はかすめ、地面に突き立ち、消えた。
ノヴィアがわざと外す事をジークは正確に読んでいた。続けて第二矢が放たれた。今度は真っ直ぐにジークの胸へと飛来した。だが今度も、ジークは身動ぎせず立ったままだ。
アリスハートが悲鳴を上げ、思わず目を閉じた。そろそろと開くと、矢の切っ先が、ジークの鎧も着ていない胸元に、かすかに触れた所で止まっており、ふっと、かき消えた。
ノヴィアを見ると、たった二つの矢を放っただけで、額に汗がびっしり浮いている。
冷たい汗だった。背筋が恐怖に凍りつきそうだった。かちかちと歯が鳴っていた。
「怖いか……」
ジークが呟くように訊いた。
「怖いです……」

ノヴィアが悲愴な顔で言った。
「俺以外の人間なら平気で殺せるのにか」
びくっとノヴィアがおののいた。アリスハートも愕然となった。ノヴィアがそんな事をするはずがない。そう叫びかけたとき、
「俺の命令なら、誰にでも矢を射るだろう」
ジークのその一言で、ノヴィアもアリスハートも凍りついたようになった。
「あるいは恐怖や怒りで、容易く相手を射るだろう。そしてそのとき、お前は、相手の顔さえ覚えないまま殺すだろう……」
ノヴィアが震えだした。それまでの震えとは根本的に違う、戦慄に襲われていた。
「俺を討てるか……ノヴィア」
三度目の同じ問いだった。ノヴィアが叫んだ。第三矢を幻視しながら泣き叫んでいた。
「置いて行かないで下さい！　お願いします！　私を置いて行かないで下さい！」
金色の軌跡が、閃光のように迅った。
矢は凄まじい速度で飛来し、ジークの頬をかすめ、遠く宙を飛び、そして消えた。
ジークは、やはり、少しも動かなかった。
その頬を、矢のかすめた跡に沿って血が流れ、顎先にしたたった。それを見たノヴィア

の足から力が失せた。その場にうずくまるようにして地面に座り込んでしまう。涙で視界がぼやけ、もはやその視覚にやどるどんな力も自分の意のままにならぬ気がした。

「明日……もう一度、機会をやる」

ジークが、言った。頬の血を拭いもせず剣を収めた。くるりと背を向け、そのまま振り返りもせず空き地を出てゆく。

「ジーク様っ」

叫びも虚しく、ジークは行ってしまった。

「分かんないよぉっ……アリスハート、私、どうすればいいのぉ。分かんないよぉっ！」

身を揉んで泣くノヴィアに何も言えず、アリスハートもただ一緒になって泣く事しか出来なかった。

ふと、ジークが立ち止まった。

「あの子の受章が決定したわ」

老女がそこに立ち、言った。困ったような顔で、険しい表情のジークを見つめ、

「あの子に、自分自身の残酷さを教えたというわけね……ジーク」

ジークは、小さく、うなずいた。

「一番、残酷な事よ。どんな戦場よりも、今の貴方の方が、彼女にとっては残酷ね」
「怨まれるのは、覚悟の上です……」
ジークは呻くように零し、去っていった。
老女は、そのジークの背から、遠くでうずくまるノヴィアへと目を移し、
「師と友……二つの〝鏡〟がどちらも一生懸命、貴女を映してるのよ。頑張りなさい」
陰からそっと応援するように、囁いていた。
明日は、ノヴィアの授章式だった。

# 第三話　新たな杖

朝の光が窓から射し込むベッドの枕元で、小さなものが、むにゃむにゃ言いながら起きあがり、目尻をこすった。女性形の、掌ほどの妖精だ。金髪金瞳、背で震える羽も、うっすら金に輝いている。寝間着代わりに体に巻いた白いハンカチを引きずりながら、
「ノヴィア……？」
一緒に寝ていた者の姿が無いのを見て、声を上げた。すると、寝室のドアが開き、
「おはよう、アリスハート」
既に目覚め、いつもの青い法衣姿で、凜と立つ少女が、いた。淡く澄んだ紫の瞳に、潑剌と束ねた栗色の髪、旅暮らしにも白さを失わぬ頬。その顔も声も朗らかで、とても昨夜、延々と悲しい涙を流していたとは思われない。
アリスハートは呆気に取られながらも、
「お、おはよう、ノヴィア……早起きねぇ」
そう返すや、少女は、ぱっと微笑んで、

「だって今日は、授章式ですもの。早く起きて準備をして、そして頑張らないと」
「頑張る……？」
「今日こそ、ジーク様に、ちゃんと私を従士として認めて貰うの」
少女——ノヴィアは、言ったものだ。
アリスハートは、ちょっと唖然となった。
今、二人がいるのはマグノリア大聖堂という。そこでノヴィアは正式に聖道女として認められ、今日、晴れて〈銀の乙女〉の紋章を授かるのだ。だが——昨日、師であるジークが、ノヴィアを〈銀の乙女〉に任せ、一人で去る気でいるのを知ったばかりなのである。
しかも、ジークの旅についてゆくために提示された試練に打ち勝てず、ただただ悲嘆に暮れるノヴィアであったはずなのに——
「急に元気になっちゃって、どぉしたの？」
「私、決めたの」
ノヴィアが笑って返す。その清々とした笑顔こそ、泣きに泣いた末にノヴィアが手に入れた、何かしらの決意のあらわれだった。
「聞いてくれる、アリスハート？」
アリスハートは思わず真顔になってうなずいた。ノヴィアは、この一夜で何かを決意し

たのだ。聞かずにいられるわけがなかった。

「私ね――」

とノヴィアが告げるのへ、アリスハートは固唾を呑んで聞き入った。そしてその内容を知ったアリスハートは目をまん丸にして驚き、

「はぁ……ノヴィアも、思い切りが良いっていうか……こうなったら、どうせ誰が何言っても聞かないって言うか……」

ふとそこで、にっこり笑って、

「あたしは、ノヴィアに何があっても、ノヴィアが何をしても、ノヴィアの友達だよ」

アリスハートがそう告げてくれる事こそ、ノヴィアにとって、最大の勇気だった。

「それにしても立ち直りが早くなっちゃって……ノヴィアも逞しくなったものねぇ」

「これくらい図太くなくっちゃ、ジーク様の従士は務まらないって、分かったのよ」

「押しかけ従士もそこまでいくと立派だわ」

アリスハートがしみじみと言った。

それから二人で朝食を摂り、ノヴィアが修道院の者に、ジークに朝食を届けて貰うよう頼んだ。そして、修道院の宿舎を出るや否や、

「頑張れ、ノヴィアちゃんっ！」

ノヴィアは、自分で自分を激励し、
「はいっ、頑張りますっ！」
我から声を上げて応える様子に、他の聖道女達が呆気に取られた顔でいる。
「やる気十分ねぇ」
のほほんと呟くアリスハートとともに、ノヴィアはいざ大聖堂へと向かうのだった。

それからしばらくして――
一人の男が、修道院の門前に佇む姿を、行き交う人々が驚きの目で振り返っていた。
男の美貌ともいえる顔立ちを、燃えるような赤髪が飾っている。しなやかな身にまとうのは、裾の破れた白外套に、黒革の鎧、赤籠手と、実に殺伐とした戦闘衣装である。その上、男が肩に担ぐものこそ異様だった。
それは巨大な、銀色の――
「シャベル……」
「シ、シャ、シャベルよ……」
聖道女達の囁きも気にせず、今朝届けられた朝食を口に放り込む男に、声がかけられた。
「ノヴィアなら、もう出たわ、ジーク」

穏やかな佇まいをした、一人の老女である。
名をエレミア・フェルテール――〈銀の乙女〉の最高位の一人にして、今回のノヴィアへの授章で審査長を務めた人物である。
「昨日はあれほど冷たく突き放したのに、わざわざ迎えに来るなんて、どうしたの？」
老女も、ジークがノヴィアに試練を与えた事を知っているのだ。
「今朝、届いた食事が普通の味でしたので」
「朝食が、普通の味……？」
男――ジークは、うなずいて、
「あいつが思い詰めると、味が変わります」
「とても塩辛くなったりするのかしら」
老女が納得して笑う。ジークに置いて行かれそうになったりすると、ノヴィアの料理はひどく塩辛くなるのだ。その事を、老女も審査の合間にノヴィアから聞いているらしく、
「いけない事だと分かっていても、ついつい、貴方に甘えたくなるのだと言ってたわ」
ふと、老女も何かを察し、笑みを消した。
「普通の味……吹っ切れたという事かしら」
ジークがうなずく。朝食が届く事自体、ノヴィアがまだ従士でいようとする証拠だった。

「ただ吹っ切ったのなら良いのですが……」
「思い詰めてしまってないか、様子を見に来てみたってわけね……心配性の墓掘りさん。それとも、ノヴィアを置いて行く事を、考え直す気にでも、なったのかしら……？」
「あいつが受章した時点で、あいつは正式に〈銀の乙女〉に所属します……」
「もちろん〈銀の乙女〉は責任を持ってノヴィアを受け入れます。……でも、貴方の従士であったからこそ、ノヴィアがあの若さで力を受け継ぐ事が出来たのも確かよ」
「……俺の使命はドラクロワの追討です」
「分かっているわ……ジーク」
「ノヴィアは母親を、ドラクロワの手勢に殺されました。これ以上、ドラクロワとの戦いに、あいつを巻き込むわけにはいかない」
「ジーク……〈銀の乙女〉が貴方に協力するのは、貴方にならドラクロワを止められると思っているからよ。聖法庁最強の軍団……そしてドラクロワの親友である貴方なら……単に武力でドラクロワを止めるだけでなく、なぜ彼が聖法庁に背いたのか……そして、なぜシーラが死なねばならなかったのか、答えが見つけられると思っているから」
　無言のジークに、老女は、静かに言った。
「大陸屈指の〈癒す者〉だったシーラ……彼女が貴方の左手を癒したのだったわね」

「はい……」
「貴方の左手が再び剣を握れるようになった事が、良い事か、それとも……。その答えが貴方にしか分からないのと同じように、ノヴィアにしか分からない答えもあるはずよ」
「ノヴィアにしか……？」
「あの子は誰も恨んではいないわ。母親を殺した者も、ドラクロワも……そして母親も」
「あいつが、審査で、その事を……？」
「貴方の従士となれたからこそ、誰も恨まずにいられた……そう、ノヴィアは言ったわ。なぜか、分かるかしら、ジーク？」
ジークは答えない。この男にしては珍しく、咄嗟に返答出来ずにいるようだった。
「確かにノヴィアは、貴方を完全だと思い詰めて、過ちを犯すかもしれない。けれどもそれは、彼女も貴方もまた、杖を突く者であるというだけの事よ……」
「杖を突く者……？」
「〈銀の乙女〉の教えの一つよ」
老女が、にっこりと笑んだ。
そのとき、大聖堂の鐘が大きく鳴り響いた。
間もなく、授章式が始まるのだ。

「なぜノヴィアが誰も恨まずにいられるのか……答えは、ノヴィアから聞きなさい。そしてその前に、彼女の晴れ姿を見届けなさい」

青煉瓦に彩られ、精緻な装飾の施された、大輪の花のごとき大聖堂の広間は、今や授章式に参列する者達でひしめき合っている。

審査に合格した、数十名の聖道女の一人一人が壇上に招かれ、〈銀の乙女〉の紋章を手渡されるつど、聖道女達の類縁や後見人たちから暖かな拍手が送られる。

その広間の片隅に、憮然と佇むジークがいた。ふと、その目が動き、広間の柱飾りに座る、アリスハートの姿をみとめている。

アリスハートもジークに気づき、ちらりとこちらを見やるが、ぱっと顔を背け、もじもじとしている。ジークは眉をひそめた。

アリスハートの挙動が、妙だった。本来ならばノヴィアが名を呼ばれるのを凝然と緊張して見守っているはずのアリスハートなのだ。それが、何やら他の事に気を取られているように、そわそわしているではないか。

ジークが、すっと、音もなく動き、アリスハートの座る柱飾りの真下に来た。

また誰かの名が呼ばれた。聖道女が壇上に登って紋章が手渡され、拍手が起こった。

その拍手の間に、またアリスハートがジークの居た方を見やり——きょとんとなった。

「あれ……狼男がいない」

狼男というのは、アリスハートがジークの鋭い目を茶化してつけたあだ名である。

「おい、チビ」

いきなりジークが真下から呼んだ。

うっ……とアリスハートが息をのみ、かろうじて驚きの悲鳴を上げるのをこらえ、

「チ、チビじゃないっ、小さいだけっ」

声を低め、ぼそぼそと眼下のジークに返す。

じろりとジークがアリスハートを見上げ、

「何かを黙ってろとノヴィアに言われたか」

ずけりと訊いた。アリスハートはうなずき、

「そうだよっ、だから、あたしはあんたのそばになるべく居ないように……」

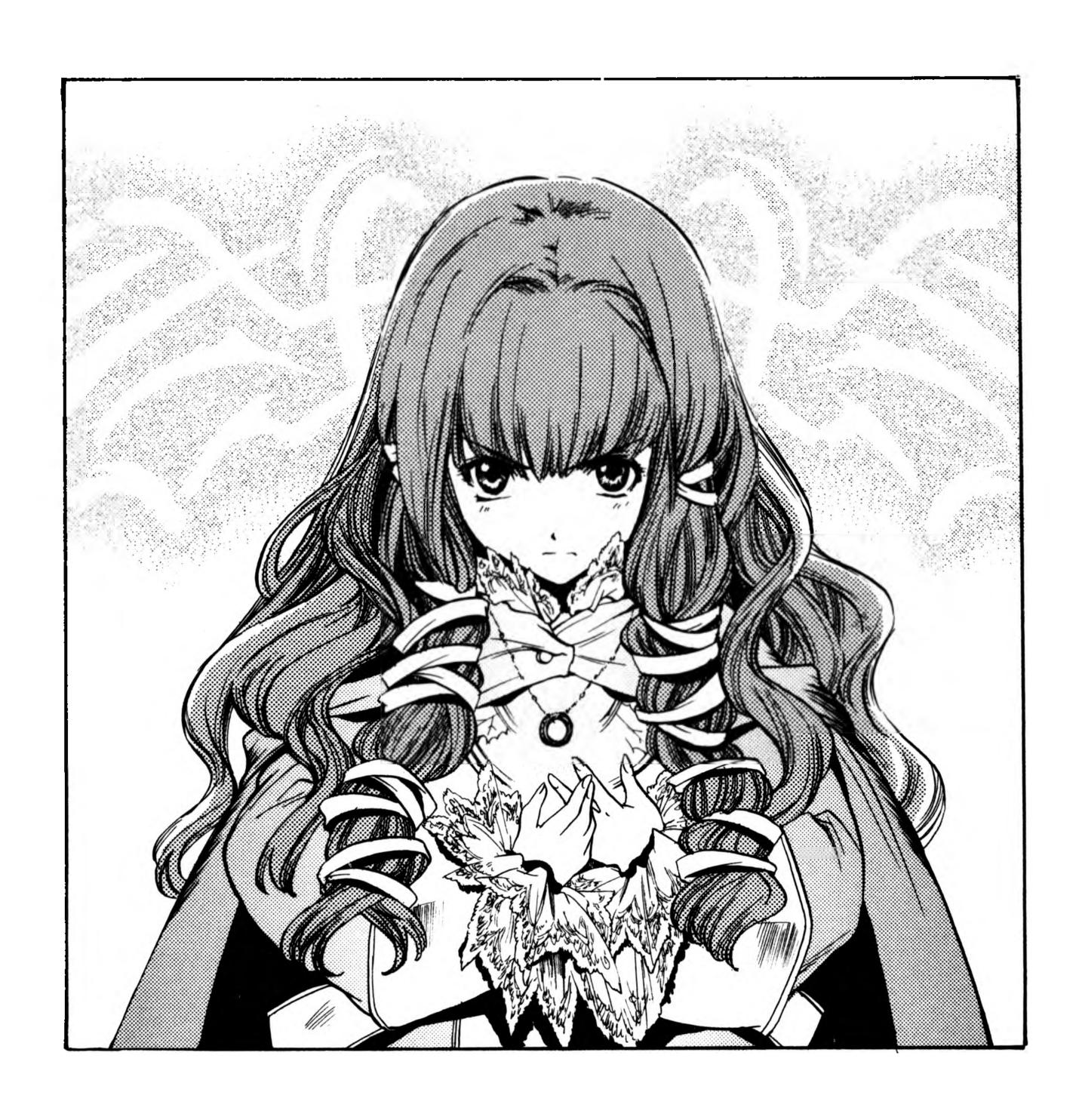
言いさし、またもや、うっと息をのんだ。

「知らないよっ。ノヴィアは何も決めたりしてないよっ」

「決める……？　何を決めた？」

「う……し、知らないっ」

アリスハートが羽を震わせ、飛んで逃げようとしたとき、ふいに、名が呼ばれた。
ノヴィアの名だ。ジークとアリスハートが、揃って口をつぐみ、壇上に目を向けた。
ノヴィアの小柄な身が、しずしずと壇上に上がり、観覧者と高位の聖道女達に一礼する。
「ノヴィア──〈見守る者〉」
老女が、授章する称号名を唱えた。
審査官達が、一人一人の身にやどる聖性を判断し、称号を選ぶのだ。見事に母と同じ称号を獲得したノヴィアが、そっと頭を垂れる。
老女が紋章の付いた首飾りを掲げ、静かにノヴィアの首にかけた。最年少の受章者とあってか、ひときわ大きな拍手が起こった。
同じく喜びはしゃいで観覧者とともに手を叩いているはずのアリスハートが、今、何やら緊張したようにノヴィアを見つめている。
「ノヴィアは、何を決めた……？」
ジークが改めて訊くや、アリスハートが身を強ばらせた。
ふいに──ジークは、強い視線を感じ、素早く壇上を振り返った。
そこに、ひたとジークを見つめるノヴィアが、いた。授けられたばかりの紋章の輝きを胸に、挑むかのような視線を送るノヴィアを、ジークもまた無言で、見つめ返した。

「ノヴィアが、何を決めたかなんて……ノヴィアから聞けば良い事だよ」
アリスハートが言う。ジークは、ノヴィアを見つめたまま、静かに、うなずいてみせた。
ノヴィアが、ジークから目を離し、凜として壇上から降りた。
聖道女達が、祈りの言葉を唱えてそのノヴィアを見送っている。
紋章を授けられた正当なる〈銀の乙女〉の道行きに、大いなる喜びと幸いがあらん事を
――それは、そういう祈りであった。
「昨日の場所で待っていると伝えろ」
ジークが常にない厳しい声音で告げた。
「う、うん……」
アリスハートが気圧されたように返す。
ジークは、外套を翻し、聖堂を出て行った。
戦場に出るがごとき烈気が、ジークの去った後も、まだ空気に残るようであった。
アリスハートは、ごくっと喉を鳴らし、
「が、頑張れ、ノヴィアっ」
思わず、祈るように口にしていた。

授章式が終わり、紋章を授けられた聖道女達と、その類縁や後見人達がごった返す中、

「エレミア様――」

と、老女を呼び止める者があった。老女が振り返ると、そこに、アリスハートをつれたノヴィアが、真摯な顔で佇んでいる。

「どうしたのかしら、ノヴィア」

老女が、やんわりと訊いた。

するとノヴィアは突然、ぺこりと頭を下げ、

「申し訳ありません」

そう、言い放つではないか。

「どういう事か、聞かせてくれるかしら」

老女は、あくまで柔らかく訊いている。

ノヴィアは顔を上げ、

「私、決めたんです――」

今朝、アリスハートに告げた事を、全て、老女にも告げたのだった。老女もまた驚きに目をみはったが、やがて静かにうなずき、ノヴィアの決意を受け入れる素振りをみせた。

「それが、貴女の真実の道行きなら、私にそれを止める権利は無いわ……。でも、一つだ

け、今、思い出してくれるかしら」

「はい」

「面接で、私が貴女に訊いた事の一つ……貴女の力が、完全であるか、という事よ」

ノヴィアは、唇を引き結んだ。それは、この数日間の審査で唯一、ノヴィアがまともに答える事の出来なかった問いだったのだ。

審査官はまずノヴィアに「自分の力を偉大だと思うか」と訊いてきた。ノヴィアが、母と聖女ラプンツェルの魂から受け継いだ二つの力——透視の力と、幻視の力の事である。母もラプンツェルも、そしてまた自分を導き、受け継いだ力を開花させてくれたジークも、ノヴィアにとって偉大な存在だった。

だから、はいと答えた。すると審査官は、「自分を偉大と思うか」と、訊いてきたのだ。

ノヴィアは、いいえと答えている。

更に審査官は、誰かに偉大だと言われて、ノヴィアが自分を偉大だと思うか試してきた。

これにもまた、ノヴィアはいいえと答えた。

その後で、しばらく違う質問が続き、やがて老女が、再三、力について訊いてきたのだ。

「貴女は、自分の力を、完全だと思う？」

ノヴィアは、そこで答えに詰まった。

まだ力を完全に使いこなせていない事は、自分でも分かっている。
だが、力の扱(あつか)いに熟練(じゅくれん)したとき、その力は完全といえるのか。
母もラプンツェルもジークも偉大だった。
ノヴィアにとっては絶対(ぜったい)的な存在である。
だがその力が完全であるかどうか――
まだ力を存分に発揮(はっき)出来ないノヴィアにとって、答えはひどく遠いところにあった。
「まだ、分からなくても良いわ。いつか貴女が今の質問に答えられる時が来るでしょう」
そのとき老女は、そう言ったものだが――
今、再び同じ質問がされるのへ、
「分かりません――こうして受章しても、私には分からないままです」
ノヴィアが、そう、素直(すなお)に返すと、
「なら、最後にきちんと教えて貰(もら)いなさい。これから、ジークに会うのでしょう?」
「はい」
「頑張(がんば)りなさい」
「は、はいっ。ありがとうございます。ジーク様にお会いした後で、また来ます」
そう告げて、ノヴィアは老女のもとから離(はな)れた。凜然(りんぜん)と歩み行くその小柄(こがら)な背に、

「貴女もまた、杖を突く者よ……ノヴィア」
老女が、そっと呟いていた。

聖堂の裏手の空き地に、毅然と立つジークの姿があった。鎧も籠手も脱いで地面に置き、白外套を羽織った、無防備の状態である。
肩にシャベルを担いだまま、抜けるように青い空を、静かに眺めている。
ときおり、左手を、開いたり閉じたりして、握力を試すように動かすのは、老女の言葉で、過去の記憶が呼び覚まされたからだ。
かつて――
村人から糧食を略奪する仲間達を止めようとして、ジークは、左腕を深く負傷したため、左手では剣が握れなくなるかもしれないとさえ言われていたのだ。
（大丈夫。まだ、その腕、癒せるわ……）
「シーラ……」
優れた〈癒す者〉であった女の、輝くような微笑みの記憶が、ジークの胸中を、冴え冴えとした風のように吹き抜けてゆく。
（俺の左手は、このままでいい――）

そのとき、ジークは、咄嗟に、
(仲間にやられた、大切な傷なんだ)
そう言って、女の癒しを拒んだものだった。
(俺は仲間が許せなかった。だから彼らを斬った。けど今でも、大事な仲間なんだ)
すると女は、限りない優しさをこめて、
(傷ではなく、罪を負いなさい。いつか自分もその人達も、許される事を祈って)
(傷ではなく、罪を——?)
(貴方が、その人達の分まで償いをしなさい。そしてそのために、その腕を癒すの)
誰かが、自分に、そう言ってくれる事が、何よりの癒しである事を、ジークは知った。
(人は、癒されて良いのよ)
そう言って、シーラは、大事な仲間を倒したというジークの罪悪感を綺麗に消してくれた。そしてまた、いつまでもドラクロワと対等になれずにいた自分に勇気をくれた。
「お前がいたから、俺はドラクロワと本当の戦友になれた……シーラ」
蒼天を見上げ、囁くように、そう口にした。
「俺はドラクロワを許せない……。ノヴィアを従士とする事……お前はどう思う」
澄み渡る空のどこにも答えは無い。ただ無限の空間に、問いが溶けてゆくばかりだった。

ドラクロワの手勢が、ノヴィアの母を殺したという事実が、古い傷の痛みのように、ジークの胸中に、疼いていた。
「俺に、ドラクロワの罪を背負えるか」
小さく、そう呟いたとき――
空き地の向こうに、ノヴィアが、アリスハートをつれて、現れていた。

「お待たせして申し訳ありませんでした」
ノヴィアがぺこりと頭を下げた。
再び顔を上げ、ひたと、ジークを見つめる。
そのノヴィアに、ジークが、静かに訊いた。
「お前に、俺が、討てるか」
再三に亘る問いだった。
最初、ノヴィアはいいえと答えた。
その次は、はいと答えた。
そして今――ノヴィアは決然と、告げた。
「それが、私の役目なら、私がジーク様を討ちます。他の誰にも、そうさせません」

ジークが、小さく、うなずいてみせた。
アリスハートが、ごくっと唾を呑み、ノヴィアのそばから離れる。もはや、頑張れと声をかける事も出来ぬような緊張が、ジークとノヴィアの間に、ぴりぴりと張りつめていた。
どん！　ジークがシャベルを地面に突き立てた。かちりと柄を回し、現れた第二の柄を握りしめ——銀に光る剣を抜き放つ。
その剣尖を地面に突き立て、ジークは、自分の周囲に、腕一つ分ほどの円を描いた。
「この円が、俺の命だ。三歩、近づけ。そこから、俺を、この円から追い出せ」
ノヴィアは、きちんと三歩近づいた。
それでも、互いに十歩は離れた距離である。
そこが、ジークが、ぎりぎり、ノヴィアを一刀のもとに斬り伏せる事の不可能な距離なのだ。そこから一歩でも近づけば、ジークは一瞬にして距離を跳躍し、ノヴィアを討てる。
まさしく、ノヴィアが、ジークの剣を封じられる境界線が、そこなのであった。
「もし、その円から追い出せたら、私をジーク様の従士として認めて下さいますか」
ジークが、はっきりとうなずいてみせるや、
「矢が……見えます」
ノヴィアの呟きとともに、眼前の空間に、一本の金の矢が現れ、宙に浮かび上がった。

幻視の力――そこにそれがあるという幻を見る事で、実際に具現させる力である。
ただし何でも具現化出来るわけではない。人や動物など複雑なものや、火や水など不定形のものを現すのは、まだ到底、無理だった。
それでも、その矢は、現実の矢に等しく、人の肉体を穿ち、命を奪うことが出来る。
その矢が、空を裂いて迅った。ジークが、僅かに半身を引いてかわした。金の軌跡が、ジークの背後で長く尾を引き、ふっと消えた。
アリスハートが一瞬遅れて、ぞっとなった。
ジークがかわさなければ、矢はその胸を貫いていたのである。昨日は、ついにジークを狙って矢を放てなかったノヴィアが、今、熾烈な眼差しでジークを見つめていた。
その瞬間、初めてジークの剣が振るわれ、二つの矢を、刃の一閃で斬り飛ばしている。
立て続けだった。第二矢、第三矢が放たれ、ジークの脚と腹を同時に狙った。
ノヴィアはその凄まじい剣風にも怯まず、息をのむようにして意識を集中させた。
にわかに、何十本もの矢群が現れ、雨のようにジークに向かって降り注いだ。
ただし、どの矢も小さい。数が多ければ多いほど矢の速度も威力も落ちる。
ジークが、冷静に自分に当たる矢だけ、剣で受け弾く隙を突き、ノヴィアは一本だけ、これまでと同じ矢を猛然と放っていた。

何十本もの矢を隠れ蓑にして、一本の矢が飛来したのだ。だが、その矢をジークはすぐに見極め、斬り弾いている。隠れ蓑の矢群は、一本たりともジークの身には届いていない。
ノヴィアは、歯を食いしばった。
怖かったし、悔しかった。そしてまた、ジークへの信頼がこれまで以上に感じられていた。ジークならば受け止めてくれると信じられるからこそ、むしろ矢を放てるのだ。
だがそれでも、ジークを円から出せない。
耐え難い無力感に襲われ、かぼそい勇気がかき消えそうになる。それでも諦めずにいられるのは決意のお陰だった。自分がそれを決めたという事が、今のノヴィアを支えていた。
自分はもはや何者でもない。〈銀の乙女〉でもジークの従士でもない。たった一人のノヴィアという名のちっぽけな存在だ。
強くそう思った瞬間――忽然と悟っていた。
力が完全かどうかを。
とても簡単で、その分、実感する事がひどく難しかった。この世のどんな力も、完全からはほど遠いのだ。死者の魂を招く、聖法庁最強の軍団たるジークでさえ、常に葛藤し続け、心で戦っているではないか。
ノヴィアは、ジークの命令ならば何でも正しいと思っていた自分を恥じた。それは、か

つて盲目だった自分に逆戻りする事だった。

そしてもし――

不完全な力しか無い人間が、力の限り生きてなお、過ちを犯したとしたら。

ジークがなぜ過去を語ってくれたか、急に分かった気がした。ジークは決して憎悪でドラクロワを追っていないし、憎くて仲間を斬ったのでもない。

ただ、過ちを止めたかっただけで――

「母さん……」

ノヴィアが呟いた。かつて自分を置いて死んでしまった母を憎んでいた。その思いが胸に甦り――すうっと消えた。胸の紋章を握りしめ、精一杯の勇気で矢を放った。

ジークが凄烈にその矢を斬り払うや、更にノヴィアは強い勇気が湧くのを覚えた。

昨夜、考えに考えた事を実行に移すための勇気だった。これまで放った矢は、全て、ジークへの信頼と、自分の勇気とが、ぴたりと一致する瞬間に到達するための階段だった。

もし、失敗したときは――いや、それ以前に、その行為自体が過ちだったとしたら――

階段の先は全くの闇だ。その闇に飛び込むようにして、ノヴィアは猛然と矢を放った。

足を狙うかに見えたその矢が、突如、軌道を変え、弧を描いてジークの顔へと迫った。

これまで真っ直ぐだった矢の動きが、急に変化し、咄嗟にジークが虚を突かれた。

が――ジークはすぐさま、顔面に迫る矢を、左手で、つかみ止めている。
だがノヴィアはそれを気にもしていない。
目的は、ジークにその矢を防がせて、一瞬だけ隙を作る事だった。矢を防ぐのではなく、かわすしかない隙を。
ジークが矢をつかんだ瞬間、ノヴィアはすかさず新たな、そして本命の矢を放っている。
閃光のように空を迅る矢を、ジークが素早くかわした。金の輝きを残して、ジークの背後で消失するかと思われたそのとき――
矢が、帰ってきた。宙で弧を描いて尖端をジークの背に向け、再度、飛来したのだ。
同時に――ノヴィアが、両手を広げている。
ジークに見えたのは、突然、自分の身をさらすような姿を見せた、ノヴィアだけである。
ジークが背後の矢に気づき、即、身をひねった。その腹をかすめるようにして飛び抜ける矢の行方に、ジークが気づいたのは、次の瞬間――矢が、眼前へと来てからであった。
その瞬間、ジークは、かっと目を見開き、全身で跳躍していた。
宙で、右手に握った剣の柄に、左手をしっかりと添えている。戦いでは、滅多に、剣を両手では握らぬジークが、このとき、その双腕の力の限りに、剣を振り下ろしていた。
一瞬、左手を癒した女の面影が脳裏をよぎった。同時に、ジークの左腕にやどる堕気が、

剣につたわり、刃が、青白い炎をあげている。
　その堕気のこもった刃が、眼前を迅り抜ける矢へと追いつき——聖性の塊である矢を、木っ端微塵に消し飛ばしたのだった。
「……あれ？」
　アリスハートが、素っ頓狂な声を上げた。
　気づけば、ジークが、円を出て、ノヴィアの眼前で、剣を振るっていたのだ。
「俺がかわせば、自分に当たるよう、矢を放ったな……」
　ジークが、ぼそっと言う。アリスハートが愕然と凍りついた。ジークが円を出たのは、ノヴィアを狙う矢を斬るためだったのだ。
　一方、ノヴィアは蒼白の顔で微笑んでいる。
　手も足も恐怖で震えながら、なお、花が咲くような微笑を、ジークに向け、
「ず、ずるかったですか……？」
　そう訊くノヴィアの目尻に涙がにじんだ。
「わ、私……これしか思いつかなくて……」
　ジークが、ゆっくりと左手を剣から離した。
「……もう二度とするな」

ぽつっと言った。ノヴィアが、おずおずと、
「円から、出ました」
言うや、ジークは、小さくうなずいた。
「円から、出ました……」
ノヴィアは震える声で繰り返した。怖さも不安も喜びも全てないまぜになった声だった。
だが——ジークは、重々しい声で、言った。
「俺が……お前の後見人となる。〈銀の乙女〉の一員として生きろ……ノヴィア」
ノヴィアは激しくかぶりを振った。
「円から、出ました」
大声で言った。途端に涙がこぼれ落ちた。
「〈銀の乙女〉が、お前に、俺についてゆく事を、許しはしない。俺が、〈銀の乙女〉に、そう頼んだ。お前は聖道女として……」
「私も、円から、出ました」
ノヴィアが言い放った。
「……なに？」
ジークが、意表を突かれたようになった。

「狼男の馬鹿ぁっ」
そのとき、アリスハートがたまらず喚いた。
「ノヴィアは辞退しちゃったんだっ。紋章を返すって言っちゃったんだよっ」
それこそノヴィアの決意であり、アリスハートが黙っていた事であったのだ。
「辞退――？」
愕然と返すジークの方こそ、見物であった。
こくんとノヴィアがうなずき、その胸の紋章を外すや、ジークを真っ直ぐ見つめた。
「今日の夕方までに、これを返す事を、エレミア様に約束しました」
「なぜだ――母親との絆を……」
ジークが呻いた。ノヴィアの気持ちが分からなかったのである。〈銀の乙女〉の紋章を捨てる事は、母との絆を捨てる事だ。そして親子の絆こそ、孤児であったジークにとって見果てぬものである。ジークが望んでも得られぬものを、なぜそう簡単に捨てられるのか。
するとノヴィアは、己の胸に手を当て、
「母は、ここで生きております」
師であるはずのジークに、逆に、教えてやるようにして言ったものだった。
ジークは信じがたいものでも見たようにかぶりを振り、

「だが……紋章を捨てれば、力も――」

そこでなお、ノヴィアはうなずいた。

もし、ジークの従士となれず、更に〈銀の乙女〉の一員である事をやめた場合、ノヴィアはその透視の力も、幻視の力も、持ち続ける事が許されなくなるのである。

師も無く、紋章も無いまま力を持てば、聖法庁の管理から外れる、重大な背信となる。

ノヴィアは紋章どころか、その力も身分も何もかもを捨てるつもりなのだ。だが――

「全てを失うわけではありません。ジーク様が導き、開かせてくれた、この目があります。そして私には、アリスハートもいます」

ノヴィアは、凛として告げるのだった。

「俺は……ドラクロワを追う事が使命だ」

「よく存じています」

「ドラクロワの手勢の者がお前の母を……」

「その後でジーク様が助けて下さいました」

「ドラクロワは……俺の友だ」

「はい」

「俺はあいつを止める。倒すのではなく」

「はい」
「なぜ、受け入れられる。ドラクロワが憎くないのか。あいつの友である俺が……」
「ジーク様の従士になれたから、私は今、誰も恨まずにいられます」
その言葉に、ジークはかすかに息をのんだ。
「ジーク様は、人の罪も過ちも背負う方です。だから私を遠ざけようとしたのではないですか……私に罪が及ばないように」
ノヴィアが、悲しい顔で、言った。
「もしアリスハートが罪を犯したら、私もそうします。一緒に罪を背負います。嬉しい事や悲しい事と同じように、背負います」
声が、強く訴えるように震えを帯びた。
「ジーク様は昔の仲間の罪も、ドラクロワの罪も、多くの死者の罪も同じように背負う方です。ジーク様のお陰でドラクロワを恨まずにいられました。母への恨みを消せました」
そして、ジークに向かって、叫ぶように告げていた。
「もしジーク様が過ちを犯したら、私も従士としてその罪を背負います。私がジーク様を討つ事になってもその罪を背負います！」
ジークは驚きに目をみはった。長い事、黙っていた。やがて、そっと肩を落とし言った。

「俺は、円から出た……」
たちまちノヴィアの笑顔が咲きかけ——途端に、泣き崩れてしまった。
「私、従士として、ご一緒に……」
声が震えて言葉にならなかった。アリスハートが慌ててノヴィアの首筋を撫でながら、
「ついてっても良いんだよね」
ノヴィアの代わりに念を押したものだ。
「……もし、お前が、その力で、過ちを犯したときは、俺が、従士であるお前と一緒に、その罪を背負おう……」
そう、ジークは、静かに言った。
「お前に、大事な物を捨てさせてしまった」
詫びるようなジークに、ノヴィアは、
「何も失ってません」
顔をくしゃくしゃにして、言った。
それから間もなく——ノヴィアの紋章を返却するため、大聖堂を訪れたジーク達に、
「答えはみんな出たかしら？」

老女が、にこりと笑って訊いたものだ。
これに、ジークが静かにうなずいてみせた。
「左手で剣を握れて、良かった――」
もし、双腕で剣を振るえなければ、ノヴィアに迫る矢の速度に追いついて斬る事が出来たか、分からなかったのである。
ジークは、再びうなずいた。
「貴方の手を癒した〈癒す者〉の思いが、今でもその左手にやどっているのよ……」
「あの、私、紋章をお返ししに……」
「少し待ってちょうだい。すぐに来るわ」
老女が不思議な事を言った。ノヴィアがきょとんとしていると、聖道女の一人が、手に、細長い物を持ってやって来た。
「杖を突く者として、受け取りなさい」
老女に促され、ノヴィアは訳も分からず手に取った。なんと白木細工の短杖である。しかも聖印を刻まれた宝玉のついた、宝杖だ。
「優れた聖道女である証しとして、その聖具を、ノヴィア・エルダーシャに授けます」
ノヴィアがびっくりして老女を見つめた。

「〈銀の乙女〉では、何かを捨てるには、より多くを背負う覚悟が必要です。その杖が、貴女が新たに背負う教えと思いなさい」
「この杖が――？」
「貴女の力は完全かしら、ノヴィア？」
ノヴィアは杖を握ったまま、かぶりを振り、
「どんな力も、完全ではありません」
きっぱりと言った。言葉にするのは簡単だが、それこそ万感のこもった返答だった。
「そう……どんな力も、完全へと歩むための杖のようなものに過ぎないわ。その宝杖は、その教えを真に知る者に授けられるものよ」
ノヴィアは呆然としつつも紋章を差し出し、
「あの、これを……お返しいたします」
すると、老女は微笑んでそれを受け取るや、
「ノヴィア・エルダーシャ……〈銀の乙女〉である貴女に、使命を授けます」
なんとそんな事を言いながら、再び、ノヴィアの首にかけてしまうではないか。
「わ、私、〈銀の乙女〉を辞めて……」
「審査員の全員一致で、却下しました」

老女はにべもない。唖然とするノヴィアに、
「そう簡単にこの大聖堂が授けた物を否定されては、〈銀の乙女〉が成り立ちません」
ちょっと厳しく言ったものだった。
「はあ……確かに、そうかもねぇ」
アリスハートが、のほほんと言う。ノヴィアは杖と紋章を手に、しどろもどろになった。
「あの、それで、どんな使命を……私……」
「貴女にしか出来ない非常に重要な使命よ」
まるで受章する前に逆戻りしたかのような不安に襲われるノヴィアに、老女は、言った。
「聖法庁に離反した重要人物を、現在、多くの者が追っています。貴女は〈見守る者〉としてその追討者の一人を見守り、戦いの様子と結果を〈銀の乙女〉に報告しなさい」
「え――」
「その追討者の名はジーク・ヴァールハイト。彼の様子を、こっそり見届けなさい」
「あ、あの、こっそりですか……？」
「出来る限りでいいわ。聖法庁最強の軍団であるこの男の動向は、〈銀の乙女〉も注目しています。詳細を報告する者が必要なの。この男と行動を共にする事が出来れば最高よ」
そう言って老女はジークを見やった。

「貴方なら、ドラクロワを止められると信じているわ。彼の罪を共に背負える貴方なら」

ジークは、老女に、静かに頭を垂れた。

（傷ではなく、罪を負いなさい——）

シーラの微笑が脳裏に甦り、ノヴィアの母に死をもたらしたのがドラクロワだという事実が、傷の痛みのような疼きではなく、静かな罪の念としてジークの胸に溶けていった。

翌朝、ジーク達は大聖堂を発った。ノヴィアは宝杖を手に、溌剌とジークの後を追った。

「杖を突く者……ねぇ。どんな力も完全じゃなくて、単に杖みたいなものってわけねぇ」

アリスハートは妙にその教えに感心して、

「あたしのこの羽も同じねぇ。自由に飛ぶだけだったら、一人ぼっちになるだけだもん」

ノヴィアも、微笑んで杖を見つめ、

「エレミア様は、その教えを忘れないために、この宝杖を授けて下さったんだわ……」

それは実際に地面を突くには短かすぎる杖だが、かつて盲目だったときの杖と同じくらい、頼もしい気持ちを与えてくれていた。

「ふうん。じゃあ、狼男にとっては、ノヴィアが、その宝杖みたいなものかしら」

妙に賢しげな調子でアリスハートが言うや、たちまちノヴィアが真っ赤になった。

「そ、そんな……アリスハートったら」

ジークは、肯定も、さりとて否定もしない。その歩みは淀みなく、ノヴィアはひたとジークの背を見守り、新たな杖を握りしめている。

やがて一行の前に、大きな道が見えていた。

# シャイオンの怪物

# Prologue　光の子／影の子

——また、この男に連れて行かれるのか。

少年は、父を心の中でこの男と呼んでいた。物心ついてからずっと、そうだった。

「支度は出来ているな、レオニス」

父が大声で呼ぶ。少年は暗鬱になりつつも、表面的には従順さを装って言った。

「万事、整っております」

父が、じろりと少年を見下ろした。知恵深く、武勇の誉れ高い領主の威厳が、父の全身には漂っている。胸には領主を表す紋章、腰にはジェルミナル家に伝わる宝剣という厳めしい姿で、十日に一度、領民の様子を見に、城を出るのだ。

その供をさせられることほど、少年にとって苦痛なことはない。

「脚が不自由だからといって、心まで萎えているのではあるまいな」

父の言葉が、鉄鞭のように少年を打つ。だが少年は心の痛みを隠し、穏やかに言った。

「父上、決してそのようなことは……」
「覇気を込めて喋らんか」
——また始まった。
父はことあるごとに少年を叱る。使用人の前だろうが領民の前だろうが、問答無用で、叱責してくる。その声、口調は、少年にとって棘のついた鞭で打たれるのに等しかった。
だが少年は、それでも素直に父を見上げ、にこりと微笑み返した。
「はい、父上」
ぞくりとする微笑だった。大人しげな顔の裏に、凶暴なものを秘めたような凄愴の笑みだ。心を全て隠しきるがゆえに、かえってその笑みに得体の知れない迫力を生んでいた。
それでなくとも人目を引く少年だった。澄んだ青紫色の瞳に、透き通るような色白の頬、細い眉。高い鼻筋からほっそりした顎先にかけては、白い磁器のような滑らかさだ。
何より、その髪が異様だった。全体は茶色がかった金髪だが、ところどころに銀色が混じり、特に顔の両脇の髪など、研ぎ澄まされた刃のごとき見事な銀髪なのである。
その妖しい金銀の髪に彩られた少年の顔が、得たいの知れない笑みを浮かべると、さしもの父でさえ、一瞬、無言になるほどの異様な光彩を放った。
「……では、行くぞ」

父が短く命じ、城を出た。少年には辛いことに、馬も駕籠も使わぬ、徒歩である。衛兵や従者らがぞろぞろと父の後に従うが、少年には、付き人が一人いるだけだ。
「頼むよ、トール」
少年が、自分の背後に立った付き人の青年を振り返る。
「はい、レオニス様」
濃い紫の目をした、銀髪の青年だった。いつも黒い法衣姿で、ひどく影が薄い。引き締まった顔立ちに、油断の無い切れ長の目をしていたが、人混みにたやすく紛れてしまうほど希薄な存在感なのだ。影法師トール――というのが、この青年につけられた渾名だった。
その青年が、影のように、ひっそりと少年を乗せているものを押し、運んだ。
車椅子――それが、少年の移動手段であり、日中の大半を、その上で過ごすものだった。
少年は、生まれつき脚が弱かった。長時間の直立に耐えられず、歩行は困難を極める。
その少年の脚について、これまで様々な医師が勝手なことを言った。骨が悪い、筋が弱い、神経の働きがよくない。中には精神的なものが原因であり、覇気によって回復するなどと馬鹿なことを言う医師もいた。そしてもっと馬鹿馬鹿しいことに、父もまた、少年の覇気の無さが脚に影響を与えていると、どこかで信じている素振りがあるのだった。
その父を先頭に列が進み、少年は車椅子で運ばれ、領地の見回りに出た。ちょっとした

行事だが、領民はことのほか喜ぶ。父を見ると、みな進んで頭を下げ、平伏したりする。
——また、みんなが、この男を誉めている。
領民はみんなして父を慕っていた。それが、ひどく少年の癇に障る。
「怖いですよ、あの人は。あの人に殺された人を、何人も見てますからね」
付き人の青年でさえ、父のことを、そんな風に言う。
父は、身内でも平気で処罰する厳格な領主だった。民族の違いを超えてこの聖地を統治するためには、苛烈なまでの厳しさが必要なのだ。だが少年には、眉一つ動かさず厳罰を下す父が、ときおり怪物じみたものに見えることがある。もし何か過ちを犯せば、自分などたやすくその怪物に消し飛ばされるだろう——少年はそう感じて生きてきた。
そんな父に逆らって生きるすべなどない。少年は歩くことさえ出来ないのだ。城を出て遠くへ逃げ出すことを何度も夢想したが、実現出来ると思ったことは一度もなかった。
「何という覇気の無さだ」
などと父に蔑まれても、ひたすら従順さを武器に、自分に出来ることに執念を燃やした。
学問がその筆頭だった。少年の頭脳は、数多の家庭教師や司祭を唸らせた。知識の吸収の早さが並大抵ではない上、次々にその応用を自分で考え出してしまうのだ。
だが父もまた、聖法庁ではかつて賢者とさえ呼ばれた人物であり、そのせいか、どれほ

ど少年がその頭脳の閃きを見せても歯牙にもかけない。それより少年が元気に飛び跳ねてくれた方が、よほどましだと思っているようだった。

それでも少年は知識を蓄え、思考の鋭敏化に努めた。父に蔑まれようと、領民に同情の目で見られようと、爆発しそうになる心をなんとか宥め、素直さと大人しさを演じ続けた。

その日――領地の見回りから、やっとのことで解放されると、少年は即座に言った。

「湖に行こう」

付き人の青年は、すぐに少年の意図を察し、大きな湖のそばに、少年を運んでくれた。

そこが、少年の、もう一つの執念の場だった。

青年が車椅子の車輪を固定するなり、少年は、すぐに身を起こそうとした。

「ここから、あの湖の縁まで、歩いていってやる」

口ではそういうが、足は一向に車椅子から降りてくれない。それどころか、歯を食いしばって体を持ち上げた途端、両脚からふっと力が抜け、どっと倒れ込んでしまった。

青年は、無言でそれを見ている。ここで手を貸せば、少年をひどく傷つけるからだ。

少年は、起きあがろうとしては、地面に這いつくばった。たちまち泥まみれになる少年のこんな姿を、付き人の青年以外、城の誰一人として知らない。

少年にとって、直立したときの頭の位置でさえ恐ろしい高さに感じられるものだ。その

高さから前のめりに倒れる恐怖を、脳裏に浮かぶおびただしい顔への怒りがかき消した。
父や、従者達や、領民達の顔だ。どの顔にも、少年への蔑みの表情が浮かんでいた。
それらの顔が少年の心をかきむしり、何度倒れようとも諦めることを許さない。まるで腹の底に凶暴な怪物がいて咆吼するようだった。その怪物が暴れ始めると、もう何も手がつかない。こうして無茶でもしなければ、とても落ち着けなかった。
やがて少年が力尽きた。汗と泥にまみれて倒れたまま動けず、荒い呼吸を繰り返した。
青年が、影のように、ひっそり車椅子を押して来て、その上に少年の体を乗せた。
それから青年は黙って、少年を、湖の縁まで運んでくれた。
聖地シャイオンの湖――アルカーナ大陸屈指の巨大さを誇る湖だった。
もともとシャイオンとは「澄んだ鏡」という意味で、この湖のことをさしている。
そしてまた、この湖には、古くから、一つの伝説があった。
「いつか湖の底から怪物が現れ――この世を滅ぼす」
呟きながら湖を覗き込むと、水面に、悔しさに歪んだ少年の顔が映っていた。
「ふん……澄んだ鏡を覗けば、そこに、誰にとっても一番の怪物がいるってことさ」
少年が皮肉そうに唇を歪めた。青年は、ただ黙って少年の傍らに立っている。
「トール」

「はい、レオニス様」
「僕は、何者だ」
「聖地シャイオンの守護者にして統治者です。この地を古くから統べる、ルミナス聖堂の唯一の跡取りとしてお生まれになり、御身に、二つの血を受け継ぐ者です」
淀みなく答えながら、青年が、ちらりと少年の髪を見た。その金銀の髪を。
「クレマチスの民の血と、ヴラドの民の血か」
少年が嗤った。クレマチスの民とは、聖法庁が授ける聖印によって豊穣の地を与えられた者達をいう。それ以外は蛮族と呼ばれ、たいてい聖法庁と争いの関係にあった。
「聖法庁の民と、蛮族——その両方の血が、僕の中に流れているわけだ」
「両者の平和の象徴です」
青年が言う。それがまさしく、少年の立場だった。だが少年はかぶりを振り、
「つまらないな、そんなの」
ぽつんと言って、湖の彼方に目を向けた。
「……ヴィクトール・ドラクロワ卿のことは聞いているだろう、トール」
「はい。聖法庁から重大な秘儀を盗み出し、もう二年以上も逃走し続けているとか」
「そればかりじゃない、各地で反聖法庁の動乱を巻き起こしている」

「はい」
「僕たちも、そんな風になれたらいいと思わないか」
「叛逆ですか」
「聖法庁や、世の中を、引っかき回せるほどの存在になるってことさ」
そう言ってにっこりと笑った。あどけないと言っていい、少年らしい微笑みだった。
「この世を滅ぼす怪物……ヴィクトール・ドラクロワ卿は、そうなろうとしているように僕には思えるよ。ただ……あの男は、そうは思っていないみたいだけどね」
あの男とは、少年の父のことだ。青年と二人きりで話すときだけ、少年は口に出して父のことを心の中で呼ぶように話すのだった。
「やはり、お父上は、ドラクロワの乱に……」
青年の語尾が、風に消えた。少年は応えず、鏡のように澄み切った湖を眺め、言った。
「早く、怪物が現れて……この世の全てを滅ぼしてくれればいいのに」
一拍の間があった。やがて、青年もまた湖を眺めながら、小さくうなずいていた。
「本当に、そうですね」

# 第一章　澄んだ鏡／花々の陰

砦の中庭では、騎士たちが鎧姿で馬に乗り、砂埃を巻き上げて練兵に励んでいる。
練兵といっても、二つの陣を組んで互いに攻め合う、実戦さながらの激しさに、
「うわー、すっごい迫力ぅー」
砦の窓から、驚嘆の声を上げるものがいた。白いシルクのドレスに身を包む、掌ほどの妖精だ。金髪金瞳、背で震える羽も淡く金に輝いている。
「ねえ、見てノヴィアぁ、本物の槍を使ってるよぉ」
「本当、アリスハート？」
栗色の髪を潑剌と束ねた少女が、窓辺に寄った。青い法衣を着込み、手に白木細工の宝杖を握りしめ、胸には〈銀の乙女〉の紋章を飾っている。その淡く澄んだ紫の瞳を見開き、
「凄い……。ここも戦さの準備をしてるのでしょうか、ジーク様」
「戦乱の気配を、敏感に察しているのだろう」
傍らの男が、淡々と言う。美貌といえる顔立ちを、燃えるような赤髪が飾っている。白

外套を羽織り、その下には黒革の鎧、赤籠手と、練兵に励む騎士に劣らぬ戦闘装束である。
が――その肩に担いだものが異様だった。部屋に、一人の大柄な騎士が入ってくるなり、
「相変わらず、恐ろしいものを持っとるな、ジーク」
男が肩に担ぐ、巨大な銀色のシャベルを見て、呆れたように唸ったものだ。
「部下どもが、俺のことを、なんとも準備の良い団長だと言って笑っておるわ。戦さの前に、墓掘りを砦に迎えているのだからな」
そう言って騎士は豪快に笑った。その胸には団長格を示す記章を帯びている。
「戦さか――」
「ああ。近隣で幾つか火の手が上がった。離反騎士団――あるいは蛮族どもの仕業だ。俺たちも何度か出陣している。そのうちこの辺りが戦場になる可能性もある」
騎士――ジークの古い戦友であるというこの騎士団長は、そう言って座るよう手振りで示した。円卓にジーク達が座ると、今度は数名の騎士達が大きな樽を運び込んで来た。
騎士団長は、その樽の中身を銅造りのコップに注ぎ、無造作に差し出した。
「麦酒だ。やってくれ」
「けっこうだ。薬湯をくれ」
ジークは滅多に酒は飲まない。騎士団長は肩をすくめ、どん、とノヴィアの前にコップ

を置いた。なみなみと黄金色の液体が注がれたそれを前にして、ノヴィアの目が丸くなる。
「あの……ジーク様」
「子供に酒をすすめるな」
ジークが、騎士が出す薬湯を受け取りながら言う。
その言いざまに、ノヴィアが、何となく、むっときた。
「子供ったって、立派なお前の従士だろう。そら、遠慮無く、ぐいっとやってくれ」
「はい」
ノヴィアが即答した。ジークが眉をひそめ、アリスハートがぽかんとなる。
そのときにはもう、ノヴィアは両手でコップを持ち、ぐいっと口をつけていた。
――が、すぐに慌ててコップを置き、
「う……に、苦いっ……」
ちょっと涙目になって、両手で口を覆ったものだ。
「もぉノヴィアったらぁ、大丈夫ぅ？　なにこれ、そんなに苦いのぉ？」
アリスハートも、コップの縁に指をつけて舐めてみるが、
「ううえー、なにこれぇ。まっずーい！」
ぺっぺっと口の中の味を必死になって吐き出してしまった。

「うちの騎士どもは、こいつに目が無くてな。気に入ったなら、何樽でも持ってくるぞ」
騎士団長がそう言って爆笑したが、じろりとジークに睨まれて黙った。
「ノヴィアには、まだ早い」
ぴしりと言う声音の底に、怒りの気配がある。いかにも剛の者といった騎士団長が、
肩をすぼめて恐縮し、差し出したコップを引っ込め、代わりに自分で呑んだものだ。
「悪かった、悪かった」
ノヴィアは、他の騎士が笑って出してくれた水を受け取り、慌てて口にふくんでいる。
「美味かったか」
ジークが、分かっていながら、そんなことを言う。ノヴィアは口を尖らせ、
「……申し訳ありませんでした」
ぼそぼそと返した。子供扱いされたせいでノヴィアがむきになったことを察しているのか、ジークもそれ以上は何も言わず、団長の方へ向き直った。
「戦さのことだが――」
呆れたことに騎士団長は既に二杯目を干し、三杯目を手にしながら、うなずいていた。
「おう、離反騎士団と、蛮族のことだろう。こっちも不審に思ってるところだ」
「動きが、組織的すぎるからだな」

「その通りだ、ジーク。聖堂に保管されている聖印や作物を狙って、蛮族が攻めてくるのは、まぁ、よくあることだ。その騒ぎに、離反騎士団が加わるのも最近じゃ珍しくない。だが蛮族と複数の騎士団が、次々に騒ぎを起こすってのは、尋常じゃないんだ」
本来、蛮族と騎士団は敵対関係にあり、共闘などしない。また騎士団同士も、領土や聖印の管理を主張して争うことはあっても、聖法庁の命令も無く連合するとは考えにくい。
「それが――このところ、奴らが連携してるように見えることがある」
四杯目を干すや、盛大なげっぷをして、ノヴィアとアリスハートをびっくりさせた。
「そこで……だ。複数の反勢力が連携しているなら、聖法庁に匹敵する存在が、背後にいる証拠だ。領土が狭かったり、辺境に飛ばされたりして、不平たらたらの騎士団どもに、聖法庁に叛逆するよう、そそのかしてる男がいるだろう？」
すっとジークの目が鋭くなった。騎士団長が、コップに麦酒を注ぎながら、うなずいた。
「そう……ヴィクトール・ドラクロワさ。とはいえ、この辺りで直接ドラクロワの気配を感じたことはないがな。奴が近辺にいるなら、とっくにここは攻め込まれてるだろう」
「この近辺で、ドラクロワに協力する者がいる……？」
「俺には分からん。そいつを明らかにするのは、俺たちの仕事じゃない」
「ドラクロワに代わって乱を煽る者がいる。どこかでドラクロワと通じているはずだ」

「ドラクロワを、追うか……」
騎士団長が、ぽつっと零した。
「お前とドラクロワがともに戦う姿を、俺は何度も見てきた。そのお前達が……」
騎士団長はそれ以上は言わず、無言のジークに、杯を捧げるようにして、
「確かに、苦い酒だ。お前の代わりに飲んでやらなきゃ、やってられんよ」
そういうと、樽の最後の中身を、綺麗に飲み干してしまった。

ジークと騎士団長が、近辺の地図を挟んで議論している間、ノヴィアはアリスハートと砦の厨房に入り、食事の用意にかかった。気性の荒っぽい砦の騎士たちのこととて料理もぞんざいだろうと思っていたら、案外こだわりがあるらしく、
「ここに運ばれてくる干し肉は塩がききすぎているから、菜を添えて煮た方が良いぞ」
「そいつは葉と茎を分けて、刻んで焼いたものを後でパン粉に混ぜるんだ」
などと色々な騎士たちが口を出してくる。そのつど、ノヴィアがにっこり微笑み、
「ありがとうございます、参考になります」
丁寧に返すものだから、騎士たちも調子に乗ってこの小さな従士に声をかけてくる。
そのうち、練兵を終えた騎士たちが次々にやって来ては、

「見ろ、話には聞いてたが、まさかあのジークの従士が本当にあんな子供とは」
「だが〈銀の乙女〉から、ジークのお目付役を命じられたほどの使い手だそうだ」
いつの間にか、厨房中に人が詰めかける騒ぎとなり、ついには、
「ジークの従士に銀貨一枚！」
「我が誇り高き騎士団の精鋭に、有り金全部だ！」
なんと料理の達者な騎士が、ノヴィアと包丁捌きを競い、賭けが飛び交う有様となった。
アリスハートは呆れつつも、騒ぎ立てる騎士たちに煽られ、
「うう……が、頑張れ、ノヴィアっ」
ついつい躍起になって応援している。結果は、ノヴィアの連勝だった。
「ノヴィアぁ、すごぉーい！」
アリスハートを筆頭に、やんやの喝采が上がり、
「料理は、慣れてますから……」
ノヴィアがはにかんでいると、いきなり、ずっしりと金の入った袋が渡された。
「あんたの取り分だ。ずいぶん稼がせてくれたよ、大したもんだ」
賭けの胴元をしていたらしい騎士が、にんまり笑って言う。ノヴィアは愕然となった。
「そ、そんな……！　受け取れません！」

金は〈銀の乙女〉から支給され、それ以外の金銭の受け取りは禁じられている。あまつさえ賭博で得た金など、受け取れるものではない。慌てて返そうとするが、
「こいつで美味いもの食って舌を肥やして、あんたの主に、良いもの食わせてやんな」
強引に受け取らされてしまった。何より大人たちが自分を認めてくれているのがノヴィアには、やけに嬉しかったのである。
「お金は、後でジーク様にお渡しして、返してもらいましょう」
こっそりアリスハートに言うと、気楽な返答がかえってきた。
「せっかく勝ったんだから、良いんじゃないのぉ。もらっちゃえば?」
「そういうわけには、いきません」
こういうところは人一倍固いノヴィアなのだった。
そんな騒ぎも、ノヴィアの料理が進むにつれて、静まっている。圧倒されて沈黙したと言っていい。原因は、ノヴィアの料理そのものにあった。
「出来ました。沢山作ったので、みなさんもどうぞ召し上がって下さい」
ノヴィアが言っても、返答する者とてない。みな戦慄の顔で、鍋一杯に満ちる緑色に泡立つものや、赤やら黄色やら得たいの知れないまだらの物体を見つめている。
その視線をよそに、ノヴィアは鼻歌を歌いながらジークの分をよそい、運んでゆく。

「いや、だからぁ、食べてみれば美味しいんだよぉ。本当だってばぁ」
アリスハートが釈明していると、ずいっと前に出る者がいた。おおっと歓声が上がる。
その騎士が、握りしめたおたまで鍋の中身をすくい、
「おう！」
裂帛の呼気を込めて、口をつけたものだ。アリスハートは呆れ返って言葉もない。
「——おう⁉」
静まり返る厨房に、騎士の驚愕の叫びがこだました。
「ど、どうした」
「それほど不味いのか」
だが口をつけた騎士が立て続けに、二口目、三口目と無言で食らうのを見て、
「お……俺にも食わせろ」
俺が先だ、いや俺がと、ノヴィアの料理に群がり、
「ほんと、陽気な人たちねぇ」
殺気立って争う騎士たちの頭上で、あくまでのほほんと呟くアリスハートだった。
「たまには良いだろう。貰っておけ」

賭けで受け取った金をノヴィアが渡そうとすると、ジークはあっさりとそう言った。
騎士団長も、鷹揚に笑って、部下の遊びを許している。
「で、でも……〈銀の乙女〉では、こういうお金は禁じられているんですが……」
「騎士連中の好意だ。受け取っておけ」
いつものごとく端的なジークの物言いだった。
「気に病むなら、〈銀の乙女〉ゆかりの修道院に寄付すればいい」
それでもまだノヴィアは困っている。
「騎士たちの分の食事も多少、用意したのだろう。その代金だと思えばいい」
「でも、そのためにご用意したわけでは……」
「それだけの価値があるということだ」
淡々とした言い方だったが、ノヴィアの心臓がとくんと跳ねた。
騎士団長も笑ってジークに賛同している。ジークと一緒に相伴に預かったのだ。この騎士団長は、料理の見てくれなど気にもせず、綺麗に平らげてくれた。
「分かりました、これは頂いておきます」
ぺこりと頭を下げた。取り繕いつつも、内心は嬉しさでいっぱいだった。価値がある。
何気ない言葉というには、あまりに強烈だった。どきどきして顔が赤くなってきた。

「部屋におりますので、何かご用がありましたら呼んで下さい」
それ以上、ジークの邪魔をしないよう、素直に退室した。
しばらくジークも騎士団長も無言だった。やがて、騎士団長がぼそっと言った。
「お前をぶん殴りたくなってきたよ」
ジークが眉をひそめた。騎士団長は、にたりと笑んで、
「いやいや、いったいどうしてあんな可愛い従士が、お前みたいな恐ろしい男になぁ」
「母親を、ドラクロワに呼応した離反騎士団に殺された。敵は撃滅したが――」
「ふむ……それが縁で、見込まれたってわけか」
「ついてくることを諦めさせようともしたが――」
「それは、やめておけ」
騎士団長が手を振って断言した。ジークが怪訝そうな顔になる。
「お前にも、人間らしいところがあるのを見せてくれんと、怖くてたまらんよ」
「怖い――？」
「ああ、怖い」
騎士団長は、本気だった。
「お前の力を初めて見たのは、聖地シャイオンでの、あの騒ぎだった。あそこの湖の伝説

は、覚えているだろう、ジーク」
「いつか怪物が、湖から現れるという――」
「そうだ。あのとき俺は、お前こそが、それだと思ったもんだ」
「それ――？」
「怪物さ」
そう、騎士団長は畏怖のこもった声で、言った。
「〈招く者〉――ただ一人の、軍団……。そのお前が、あのとき俺には、人間ではない、恐ろしい怪物のように感じられたもんさ」
かと思うと、その顔に、急に、太い笑みが戻った。
「だがお前は、人間だ。その証拠に、あんな可愛い従士に慕われてるってわけだ」
ジークは無言で地図を見ている。騎士団長が、笑った。
「どうした、照れたか」
「聖地シャイオン――」
「うむ――？」
「聖法庁の密偵が、今、ひそかに調査している」
「あの聖地をか……？　なぜだ？」

「各地の蛮族や離反騎士団に、糧食や武器を提供している存在がいる。広範囲に及ぶ流通経路と権益を持たなければ出来ないことだ。それが出来る土地は限られる」
「あの聖地が、争いを求めているというのか。お前とドラクロワはそれを防ぐため……」
「そのドラクロワが、今、乱を呼んでいる」
厳しいジークの声音だった。騎士団長は、長いことそのジークを黙って見つめた。
「行くか……聖地シャイオンに。この砦の兵を動かす必要があるなら、いつでも……」
「いや、逆だ。決して動かないでくれ」
騎士団長が絶句した。
「俺が、闇に葬る。あの地を守るために」
ジークが鋭く告げた。騎士団長は呆然とした顔で、ゆっくりとうなずいた。
「俺たちが動くのは……お前が死んでからだというんだな。お前一人で……」
「すまん――」
「やめてくれ。謝らないでくれ。俺たちが動けば、ことが公になると言うんだろう」
騎士団長は、きつくかぶりを振った。そして、強い口調で、断定した。
「お前は人間だ、ジーク。どこまでも人間だ」

その夜は、取り立てて何の用事もなく、ノヴィアはアリスハートとともに砦の一室で、のんびりと時間を過ごした。砦には水が豊富にあり、湯浴みを済ませ、ベッドに横になって、もらった金を数えながら磨いたりした。金を喜ぶというよりも、ノヴィアは、ジークに言われたことの嬉しさを何度も思い出しながら、そうしていたのだった。
「結局、もらっちゃったのねぇ。これで、何を買うのぉ？」
硬貨に顔を映して遊んだりしながらアリスハートが訊く。さあ……とノヴィアが首を傾げる。法衣は何着かあるし、巡礼用の靴も、新しく揃えたばかりだった。
「お洒落をするためのものを買えばいいじゃない。綺麗なものとかぁ」
「でも、宝石を身につけるのも、よく考えてからじゃないと……」
鉱石は、それ自体が聖性を帯びており、〈銀の乙女〉では自分に適したものを身につけるのが作法だった。お洒落のためといって、それで自分自身の聖性を乱しては意味がない。
それよりも、今はとにかくアリスハートと一緒に、あれこれ話し合う方が楽しかった。
「料理の道具かしらねぇ。おっきな鍋とかぁ」
「美味しい食べ物かしら」
「それとも、ジーク様に、何か贈り物を差し上げようかしら……」
そう呟いた瞬間、ノヴィアは口の中に何かを感じた。

それは苦みだった。むきになって酒に口をつけたときの記憶が、急に甦ってきたのだ。
「子供……か」
そう言われたときの妙な悔しさが、ちくりとノヴィアの胸の中で疼いた。
「どしたの、ノヴィアぁ？」
アリスハートが無邪気に訊くが、答えようがなかった。ただ、
「認められたいな……」
ぽつんと言った。価値がある。そう言われた喜びが、口の中の苦さとあいまって、何だか不思議な、嬉しいとも悲しいともつかない気分になってくる。
「狼男のやつに、従士として認めさせたじゃない」
アリスハートが呆れたように言う。狼男とはジークの目の鋭さを茶化した渾名である。
ノヴィアはうなずきつつ、そこでまた別のものを思い出していた。
それは一人の女性だった。自分とは違う、大人の女性だ。蜂蜜色の髪に、翡翠の瞳、ノヴィアが大人になろうとして抱く、理想の姿と雰囲気を兼ね備えたような存在――
「シーラ・リヴィエール……」
そういう名の女性だった。アリスハートが首を傾げ、ふと思い出した顔になる。
「ああ、ラグネナイの泉で見たひとねぇ」

ノヴィアがうなずく。だがそれは、女性本人を見たのではない。ある戦いで、ジークの心を読んだ水の精霊が、その女性の姿に擬態したのだ。女性自身は何年も前に亡くなったと聞いている。何かの理由で命を失い、そして今なおジークの中で強く息づく女性だった。
その女性に関してだけは、いまだに何一つとしてジークに訊けないでいる。ジークの心に土足で踏み込む気がするからだし――何より、訊くのがなぜか、怖かった。
「早く、大人になりたいなぁ」
それが、今のこの絡み合ったような妙な気持ちの、行き着く先のような気がした。
「あら、なんか久々に聞いたわねぇ、それ」
アリスハートが、優しく茶化す。
「ほんと、ノヴィアったら頑張り屋さんなんだから。そのうち狼男より強くなっちゃうんじゃないのぉ。それで逆に、狼男の方が、ノヴィアについて来るようになったりして」
あまりに途方もない考えに、思わずノヴィアも笑ってしまった。
「それよりも、次の街で何を買うか、考えようよぉ」
「うん――」
にっこり笑って、ノヴィアはこの小さな友達に心の中で感謝した。

月が映る湖の、大きな堤防の上で、黒い法衣の青年が、大きなものに布を巻きつけ、少年の言う通り、布の隙間から、黒っぽい血にまみれた、人間の手首がのぞいていた。
車椅子に乗った少年が、面白そうに指をさして言う。
「ほら、はみ出ているぞ、トール」
「はい、レオニス様」
青年が素直に応じ、手首を布の内側に押し込め、縄で縛り付けた。
「そいつを始末したとき、怖くはなかった、トール？」
青年が淡々と返す。布で隠した死体に、今度は、重りとなる石を結びつけてゆく。
「いいえ。特に何も感じません」
「父は、そいつを始末させるとき、何て言ってた？」
「消せ──と」
「そいつが何者か、聞かされてないの？」
「ええ」
「諜報院……聖法庁の密偵だよ。聖王の命令でしか動かない奴らさ。とうとう、聖地シャイオンは、聖王の配下の者に、手を出したわけだ」

少年が、微笑んで言う。

「なるほど」

青年は表情を変えずに淡々と動いている。人の死に対して何も感じていないようだった。しかも自分が殺した相手の死体を始末しているというのに、まるで存在感というものがない。生気の欠けた黒い影が、音もなく死者をもてあそんでいるようにも見える。

影法師トール——それが青年の渾名であり、同時に、青年の裏の仕事を表していた。隠密であり、暗殺者である。その手練で青年の右に出る者はいなかった。それこそ背後から喉を掻き切られるまで、誰も青年の気配に気づかないのだ。

逆に気配を隠す者を発見するのもお手の物だった。密偵が忍び込むと、すぐさま気配を察し、追撃して仕留めてしまう。まさしく天性の猟犬といえた。

この青年が、このように影として生きる理由を、少年はよく知っていた。

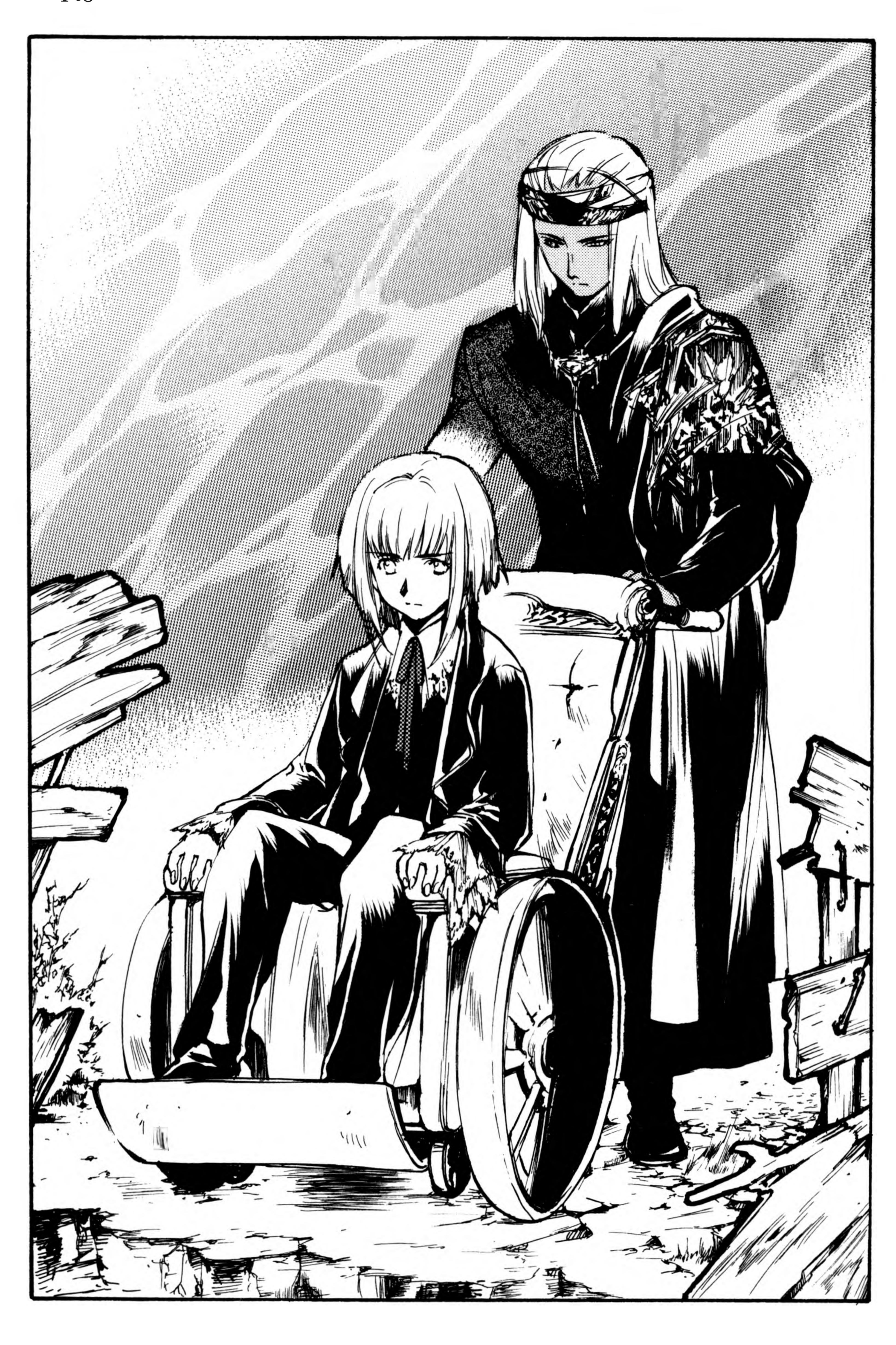
少年にとって青年は従兄にあたる。少年の母と、青年の父が、兄妹なのだ。

青年は生粋の蛮族——ヴラドの民の一人だった。そして青年の父は民の英雄であり、あくまで聖法庁との戦いを求めた。その英雄が死に、ようやくこの地に平和が訪れたのだ。

死ぬことで平和の一歩となった父——それが青年の背負う烙印だった。

青年を見れば、民は昔の英雄を思い出す。それが不穏な空気を招く。青年は決して目立

ってはいけないのだ。もはや影法師になる以外、生きるすべはなかった。
だが皮肉なのは、青年自身が、父の死によって平和を得た一人であるということだ。
「父が死んでくれて、せいせいしました」
かつて、青年は、少年に、はっきりとそう言った。
青年の父は、妻や息子に仮借無く暴力を振るう暴虐の英雄だった。
母が死んだのも、父の暴力のせいだ——そう青年は信じていた。
母の葬儀で父が悲しむのを見て、生まれて初めて殺意を覚えた。自分が殺したくせに悲しむ父を、この手で殺してやりたいとさえ思った。だがどんな戦士も、青年の父には勝てなかった。青年の父は、それほどの戦士だったのだ。そう、誰もが信じていた。
い、い、あのとき——聖法庁の剣士が、大勢の前で、青年の父と戦うまでは。
相手は、燃え立つような赤い髪をした剣士だった。
とても青年の父と戦えるとは思えぬ若さであり、また身分の低い男である。
だがその剣は鋭く、迅く、更には混沌をもたらす堕気を力とし、まるで疲れを見せない。
まさしく死に神のような男であり、そんな者を相手にした青年の父こそ不運だった。
青年の父が無惨に敗北したとき、少年も青年も、とても信じられなかった。それは武勇の完全否定だった。いかにも無力に見える者が、実は恐るべき力を秘めている——そうい

う生き方もあることを少年と青年は初めて知った。無力な自分に光明さえ見た気がした。
「……主、汚れし霊に問いたもう。汝の名は、何か——」
月光に輝く湖を眺めながら、少年が、そっと聖典の一節を唱え上げた。
「彼、答えていわく——」
「〝軍団〟——我ら大勢なるがゆえに」
青年が、死体に最後の重りを縛り付けながら、後を続けた。
かつて、少年と青年に、衝撃を与えた男の、その力にまつわる一節であった。
「諜報院の次は、あの赤い髪の男が、来るよ。……怖いかい、トール？」
青年が、かぶりを振った。
「いいえ、レオニス様」
どんな感情もこもらない声音だった。
縛り付けた死体を足で転がし、そのまま、堤防の縁から、死体を蹴り落とした。
死体は、闇の底へ落下し、やがて水の音が遠く下方で響いた。
「この湖の聖性が、死体の堕気を、浄化してくれる。すぐには分からないさ」
少年が、金銀の髪を妖しく月光にきらめかせ、にっこりと笑った。
「ほら、餌だよ。早く出ておいで」

湖に向かって、囁いた。
「僕らに、姿を見せておくれ」
湖の底に眠るという怪物に、呼びかけているのであった。
むろん何も現れはしない。月光に輝く湖面を、少年と青年は、長いこと見つめ続けた。

見渡すばかりの耕地に、治水の整備された川が、輝く陽光の下で縦横に流れている。
「はあぁ……のどかねぇ」
アリスハートが、ノヴィアの肩で、とろとろと眠るような目を、景色に向ける。
馬車に揺られての、街道の旅であった。騎士団長が用意してくれた馬車であり、
「堕気に鈍い馬を選んでやったぜ。御者付きで貸してやる。せいぜい恩に着てくれ」
とのことだ。そうして砦を出てから、三日が経っていた。途中、とある街で丸二日を費やしている。聖法庁の使者と、そこで落ち合う予定だったのである。
だが、使者はついに現れず、ジークは、独断で行動することを決めたのだった。
「本当に、豊かな場所ですね」
ノヴィアが辺りの豊穣さに、驚いて言う。

「聖地が近いせいだ。じきに湖が見えてくる」
ぼそっとしたジークの返答だった。その声が、ノヴィアにはどこか重々しく感じられた。
「湖……ですか、ジーク様」
「聖地シャイオンの湖だ。ここらの川は全てそこにつながっている」
淡々と説明してくれるが、それ以上のことは何も言わない。表面的には冷静そのものの
ジークが、今、内心で緊迫するものを抱えているのを、ノヴィアは敏感に感じ取っていた。
目を閉じてジークの気配を窺うと、その気配が常になくざわめいているのが分かる。
盲目の身で、長くジークのそばにいたからこそ感じられる、ノヴィアだけの理解だった。
かつては、そうしたジークの葛藤を感じても、何も訊けないでいたものだ。力を使いこ
なせず盲目に陥っていた状態で、いったい何を聞き出せるというのか。任務の話の席で気
になることがあっても、黙っているしかないのが、そのときのノヴィアだったが――
「今は、違うもの」
思わず、馬車に揺られながら、口に出してしまった。
「どうした」
ジークが、ノヴィアを見やる。ノヴィアは慌てて、
「何でもありません――」

と言いつつ、ふと、それではいけないような気がし、
「ジーク様、あの……」
咄嗟にジークを振り返り、思い切って、言ってみた。
「お話ししませんか」
ジークの眉が、かすかに寄った。明らかに怪訝そうな表情である。
「あの、つまり……色々と、お聞きしたり、普段話さないこととか……」
しどろもどろになるノヴィアに、
「……退屈か？」
「え、その……」
「あちらを見てみろ」
ジークが、丘陵の森を指さし、言った。
「両手の指を立てて、見る範囲を定めろ。だいたいこれくらいだ。この範囲で視野を分割する。幾つかに分割した視野を、順番に見てゆき、最初に戻る。これを繰り返す」
「は……はい。あの……なんでしょうか、それ」
「哨戒の基本——敵の斥候や伏兵を、発見するためのものだ」
ノヴィアはつくづく困ったような顔でジークを見ている。

「……退屈か」
ジークが、ぼつんと呟く。ノヴィアが、ちょっと本気で怒ったようになった。
「ベ……別に、暇を潰したくて、ジーク様に声をかけたわけじゃありません！」
これにアリスハートが驚いて、むにゃむにゃ寝ぼけた顔で、
「どしたのぉ、ノヴィアぁ。まーた狼男に喧嘩を売ってるのぉ」
「う、売ってません！」
大声で返しつつも、今度は、何だか悲しくなってくるノヴィアだった。
「だって、ジーク様、ずっと黙ったまま、何かに苦しんでいるみたいで……」
宝杖を握りしめ、花のしおれるように悄然とうつむき、
「少しくらい、お話しして下さっても……」
アリスハートが、よしよしとノヴィアの首を撫でてやりながら、
「だってさ。話してあげなよ」
あっけらかんとジークに言う。ジークは、ふむ……と案外、真面目にうなずき、
「大きな真実を、葬らねばならないかもしれない――」
「真実を……？」
ノヴィアが顔を上げると、ジークは、ひどく遠い目を、周囲の豊穣の地に向けていた。

「かつて俺は、この地で戦ったことがある……和平のための、最後の血を流すために」
「最後の血……」
「平和な土地の多くは、血塗られた経緯を持つ……」
辺りの景色に、囁きかけるような声音だった。
「出来るなら戦いを未然に防ぎたい。だが、そのためには情報が要る。その情報をくれるはずだった聖法庁の者は姿を現さなかった。既に、消されたのかもしれん……」
そこでちらりと、ジークがノヴィアを見た。
「お前達を連れてきてしまうことを、考え直そうともしたが……」
「駄目です。私には、ジーク様の戦いを見守る使命がありますから」
ぴしりとノヴィアが言った。もはや条件反射的でさえあった。
「私は、ジーク様を信じておりますから。何があってもお供させて頂きます」
ジークは、無言のまま小さくうなずいた。そこを、アリスハートがさっそく茶化した。
「狼男も大変ねぇ。ノヴィアに監視されるなんてぇ」
「監視じゃありませんっ。見守るのっ」
ノヴィアが、むきになって喚いたとき、行く手に、きらりと光るものがあった。
「……な、なにあれっ。でかいよっ」

アリスハートが、ぎょっとなるほどの大きさだった。木々の間から現れたそれは、対岸が霞んで見えるほどの、巨大な湖だったのである。
「聖地シャイオンの湖だ――」
ジークが言った。ノヴィアも、丘を越える前に既にその万里眼で湖の全容を見ている。
「怖いくらいに澄んだ水……。ここからでも、聖性を感じます……」
天地の光景が、そのまま水面に吸い込まれてゆきそうな透明さだった。水全体が、ほのかな聖性をやどしている。澄んだ鏡――その名にふさわしい聖地の中心であった。
「この湖――自然のものではないんですか」
ノヴィアが、各所で、聖印の刻まれた堤防や水路を目ざとく見つけ、
「そうだ。かつてあれは、蛮族の土地だった」
「へ？　どういうことぉ？」
アリスハートが興味津々になって訊くのへ、ジークが湖を指さし、
「あれは本来、ヴラドの民と呼ばれる者たちの土地だ。彼らの神殿があったのが、ちょうど、あの、湖の真ん中辺りだ」
ノヴィアが、あっと声を上げた。
「水の底に……建物があります」

「建物ぉ!?」
「百年以上も昔……この辺りは、岩山ばかりの土地だった。それを、聖法庁が、あの湖を造り上げることで、一帯を豊穣の地に変えた」
「か、変えたって……」
「沈めたんだ。川を引き、治水を整え、百年近くかけて、あの湖が生まれた」
「そして……それまで住んでいた人々の土地は、湖の底に……」
ノヴィアが青ざめた顔になる。水底に沈む建物に、空恐ろしい気分になっていた。
「それ以来、ヴラドの民と、聖法庁とは、長年、争いの関係にあった」
「はぁ、そりゃ当然よねぇ。人の家を沈めるなんて、ちょっとひどすぎるわねぇ……」
「だがこの湖がなければ、ここは荒れ野のままだったろう。そしてヴラドの民の集落は、この一帯で、最も低地にあった……一番、水が流れ込みやすい場所に」
うーん、とアリスハートが腕組みして考え込んでしまった。
「そして、ヴラドの民の間では、一つの伝説が語られるようになった」
「伝説、ですか……」
「いつか湖から怪物が現れ、この世の全てを、滅ぼす……そういう伝説だ」
それは、街も神殿も沈められて造られた、豊穣の大地に対する、怒りの伝説だった。

ノヴィアは、改めて豊かな耕地を見渡した。平和な土地の多くが、血塗られた経緯があるということが、しんと静まる心に染みこんできた。戦いを未然に防ぐというジークの気持ちに素直に共感出来た。大地全体が、過去の悲しみを、怒りを伝えてくるようだった。
「私、お手伝いします」
ノヴィアが、ジークに、ひたむきな目を向けた。
「お手伝いさせて下さい」
ジークは、ノヴィアを見つめ返し、静かにうなずいてみせた。

湖を巡り、城が見えたところで馬車を降りた。ジークが御者と話し、馬車を砦に帰した。
川の堤に沿って城を目指すと、ふいに大勢の人が集まっているところに出くわした。
中でも長身の男がノヴィアの目を引いた。濃い茶の髪に、濃い口髭。胸には領主を示す首飾りをし、腰には聖印の刻まれた宝剣を吊っている。いかにも厳格な感じの男だった。
その男が、透明な、方形に切り取った水晶か何かに見える、ものを掲げている。
ジークが立ち止まり、その男の作業を待つかたちとなった。
「……なになに？」
アリスハートが何となく声を潜めて、訊く。ノヴィアも咄嗟に分からずただ見守った。

突然、男の掲げた水晶が、かっと稲妻を迸らせ、アリスハートをぎょっとさせた。
稲妻が、堤防の一部に降り注ぐや、石の柱の一面に、精緻な紋様が刻み込まれ、
「聖印……」
ノヴィアは、驚きの声を上げた。聖印が刻まれることで柱が強固なものとなって水を支え、更には目に見えぬ力が、周囲の壁の崩落や老朽をも防ぐのである。
「ここで待っていろ。話をしてくる」
「あ、ジーク様――」
「周囲をよく見ていろ」
ジークが言った。この地に争乱の種があるとすれば、何が起きてもおかしくなかった。
いきなり取り囲まれて捕らえられるかもしれないのだ。ノヴィアは緊張してうなずいた。
ふと男が、ジークに気づいた。その顔に、驚きと――喜びの色が浮かんだ。
「……お久しぶりです、ロムルス・ジェルミナル公」
「おお、おお。久しいな、ジークよ。ロムルスと呼んでくれ。そう、昔のようにな」
「聖印の秘儀を……？」
「雨のたびに、水が漏れる箇所があってな。民と相談していたところだ」
男は喜びに目を細めて笑んでいる。周囲の人々にも、敵意はまるで見られなかった。

「あそこにいるのは？　お前の供か、ジーク？」
「俺の従士です」
ジークが手振りで、ノヴィア達を招いた。
異変が起こったのは、その直後だった。さっと男の顔色が一変したのだ。
「ノヴィア・エルダーシャです。ジーク様の従士をさせて頂いております」
ぺこりと頭を下げた。アリスハートは、おどおどとノヴィアの肩にしがみついている。
ノヴィアが顔を上げたとき、真っ向から、男のその顔色と向き合っていた。
なんと男は息をのみ、驚愕の表情で、まじまじとノヴィアを見つめているではないか。
「あの……」
思わず、ノヴィアが目を丸くした。ジークもアリスハートもその異常に気づいている。
「ロムルス――」
ジークが、警戒するように呼んだ。そのとき、男がのんでいた息を吐き出し、
「イルミナ……」
そろそろと、畏怖にも似た声音で、ノヴィアのことを、そう呼んでいた。
ジークが眉をひそめた。ノヴィアもアリスハートも、ただぽかんとするばかりである。
男が、はっとなった。かぶりを振って、

「いや……すまん。なに……人違いだ。非礼をお詫びする。そうか……〈見守る者〉か。正式に、〈銀の乙女〉の紋章を得ておるようだな」

「は……はい」

何となく気まずい感じがして、ノヴィアは肩をすぼめている。

周囲の人々も、妙にノヴィアに注目していた。ふいに男が咳払いして、ジークを手招き、

「積もる話もある。城に来てくれ」

まるでノヴィアから身を離すように、きびすを返していた。

「……なんか変なの。なぁに、イルミナって。人の名前？」

アリスハートが怪訝そうに訊くが、ノヴィアにも分かるわけがなかった。

城へ行く途中に、大きな聖堂があった。

名をルミナス聖堂という。領主の男——ロムルス・ジェルミナルは、本来この聖堂に派遣された司祭であったらしい。ロムルスが派遣された当時は、領主も別にいたが、相次ぐ戦いで戦死し、代わりにロムルスが、新領主として城に住むようになったのである。

「当時は、ひどくうるさい事を言われたがな」

城への道すがら、ロムルスは、渋い顔で笑ったものだった。

聖堂の守護者が、土地の統治者となるだけならまだしも、敵対していたはずの蛮族の娘と結婚した挙げ句、和平に尽力する例など、まず無かったからだ。
「ヴラドの民からは何の魂胆があるのかと疑われ、聖法庁からは裏切り者扱いだ。実に、きわどい日々だった。分かるだろう、ジークよ」
ジークがうなずいた。ロムルスが暗殺されかけたのも、一度や二度では無い。それも、ヴラドの民と聖法庁、双方から送られる暗殺者が、相手だった。
「わしとイルミナは、毎日、決断を迫られていた。このまま進むか、全てを諦めるか。そして二人で、全てを懸けて、前へと進んだ」
そうロムルスが言ったところで、ようやく、アリスハートが合点して、
「ははあ、イルミナって、あの人の奥さんなんだ。やっぱ人の名前だったねぇ」
ぼそぼそと、ノヴィアに囁く。だがそれでもノヴィアは首を傾げている。
「私、ヴラドの民なんて全然知らないのに」
人違いにしても、まさか聖法庁の民以外の者と間違えられるとは思いもよらなかった。
妙な気がしつつも、ノヴィアは、ロムルスとジークの会話を、後ろで聞いていた。
「だが今、百年に亘る憎悪と復讐に終止符が打たれ……そして今、全てが受け継がれる。息子に城を譲り、わしは長年の夢である、聖堂での隠遁生活を送らせてもらう」

「子息に、領主権の継承を――？」

「うむ。てっきり継承式のお目付役として、お前が派遣されたのかと思ったぞ。どんな事情でこの地に来たか知らぬが、お前には、ぜひ継承式には出席してもらいたいものだ」

「御子息は幾つに――？」

「十五だ。領主としてはまだ幼い。しばらくは、廷臣どもが統治を助けるだろうが、二十歳までには、領主としての実権を確かなものにするつもりだ。老いぼれた隠者として、日々を、亡き妻への祈りに捧げる。それが、今のわしの夢さ」

そう、ロムルスは、心を込めて言ったものだった。

「修道院に、案内させるゆえ、まずは従士も、旅の疲れを取るが良い」

城に入るや否や、ロムルスが言った。道中も馬車だったし特に疲れてはいないが、ロムルスの態度には、ノヴィアのそれ以上の同行を拒むような感じもあり、

「ゆっくり休め。ついでに、この辺りの豊かな景色を、よく見させてもらえ」

何よりジークにそう言われて、ノヴィアは、素直に引き下がった。

「それでは、お先に失礼させて頂きます。夕刻にはまた伺います」

丁寧に言って、修道院への案内を請うた。ジークは、ロムルスと応客室に入っている。

「いつもなら、一緒に話を聞くって言い張るのに、やけに素直ねぇ」
不思議そうなアリスハートに、ノヴィアはこっそり囁いた。
「ジーク様は、ただ私に、休んでろって言ったわけじゃないもの」
景色をよく見ろとは、一帯の地理や、人の動きなどを、よく把握しておけという意味だ。
ジークは決して過去を懐かしむためにここに来たのではない。今の内に、ノヴィアの万里眼――透視の力でしか見えないものを、何かしら見つけ出しておくべきだった。
「ちゃんと役に立つところを、お見せしないと」
今まで、こんな風に任務に参加させてもらえたことはないのだ。着いたばかりの土地で何かを見つけろというのも途方もない話だが、自然とやる気がこみ上げてくる。
与えられた部屋に荷物を置くなり、すぐさま表に飛び出した。門前で宝杖を握りしめ、
「頑張れ、ノヴィアちゃんっ！」
自分に向かって激励を発し、
「はいっ、頑張りますっ！」
周囲の注目を浴びることなど全く意に介さず、すぐさま自分で応じている。
「ここが、従士としての、力の見せどころってわけねぇ」
頭上では、アリスハートが相変わらず、のんびり呟いていた。

「今でも、時折、当時の夢を見ることがある——」
　ロムルスが、虚空を見つめながら、静かな声で、言った。
「豊かなこの地に花々が咲き乱れ、その上を、剣を持った者どもが争いに明け暮れている。そのうち地面は死体だらけになる。首のない死体、腕のない死体、足のない死体。老人も若者もいる。女も子供もいる。みんな死んでいる」
　ジークもまた淡々とした面持ちで、それを聞いている。
「追いつめられた戦士が、自ら妻子を殺して絶望的な戦いに臨んでくる。親を殺された子供が怨みのままに剣を振るう。蛮族も聖法庁もない。そこにいるのはただ人だ。憎しみを棄てられぬ人だ。そしてその無数の死者の上にこそ、花々は咲き乱れている」
　すっと、ロムルスの厳しい目が、ジークを向いた。
「何をしに来た……ジークよ。この地の平和を、確かめに来たか」
「花の下にあるものを」
　ぽつっと零すようにジークが言う。
「この地の花の下にあるのは、もはや過去ばかりだ、ジーク」
「大量の物資が流れている。大半が武器だ。心当たりはありますか」

「聖地シャイオンは、大陸有数の耕作地だ。古くから鉱物も豊富だ。我々が作った物が、戦乱で用いられている可能性は高い」
「では——」
「だからと言って、我々が生産をやめるわけにはいかん。そんなことをすれば、商売上の混乱が起こる。その混乱が、むしろ戦乱を広げることになろう。それが何より恐ろしい」
「では……物資の流通を操作することで、戦乱を操作できると思いますか」
「まさか……。お前も、凄まじいことを思いつくな」
ロムルスが目を見開いた。心底、驚いているようだった。
「口で言うのはたやすい。確かに物によって人は動く。だが戦乱を操作するには、あらゆる土地の利害を正確に知る必要がある。また、好きなときに利害を生み、好きなときに消せねばならない。だが利害とは生き物だ。到底、たやすく操作出来るものではない」
流れるような、見事な返答だった。だが、ジークはロムルスから目をそらさず、
「貴方は、賢者だ。そしてそのことが、疑いになる——」
「まさか今度はお前が、私を襲う暗殺者になると言うのではあるまいな」
「場合によっては、そうなります」
必要とあればすぐさま本気でやるというジークの態度に、場が一瞬にして凍りついた。

だが、ロムルスは、ふっと溜息をついて、すんなりとその緊張をかわし、
「そうやって自分の身を挺し、相手の真意を探るか。無茶なことをする……」
笑顔さえ浮かべて言ったものだ。そのとき、部屋の扉が叩かれ、
「ようやく来たか。入れ」
扉が開き、一人の少年と、青年が、入ってきた。
金銀の髪の少年であった。その背後には、黒衣の青年が、影のように付き従っている。
「我が愚息だ。覚えているか、ジーク」
少年が、青紫色の目を細めて微笑み、真っ白な歯がこぼれた。
「レオニス・ジェルミナルです。僕はよく覚えております、ジーク・ヴァールハイト」
「俺も、ロムルスの子の顔は、よく覚えている。脚は――」
「治らん。何人もの医師に診させたが、満足に立つことさえ出来ん。お陰で、継承式の式次第に、いささか難儀していてな。厄介なことだ」
無造作なロムルスの言が、すっと、刃のように少年の心に切りつける。
だが少年は、穏やかに微笑んだままだ。青年の表情も、微動だにしない。
ジークは、ただ淡々と静かな眼差しで、この父と少年と、そして――青年を見つめた。
「そちらは――」

「トール・ヴュラードだ、ジーク」

ロムルスが言う。青年が静かに一礼した。案外に長い銀髪が、はらりとその青年の面を覆った。ジークはかすかに息をのみ、

「ヴュラード……」

「そうだ。あのヴュラードの息子だ。今では城で、レオニスを助けてもらっている」

「ヴラドの英雄のことは、よく覚えている――」

ジークが言う。だが青年は、一言も発せず、ただ影のごとく佇むばかりである。

「お前達、下がって良いぞ」

ロムルスが、手を振った。少年が従順そうな微笑みを浮かべて、

「それでは、父上……失礼させて頂きます」

青年が、車椅子を押し、少年の体を部屋の外へ運び、静かに扉を閉めた。

「かたや軟弱に笑ってばかり、かたや黙然として喋ろうともせぬ。だが従兄弟同士、なぜか気が合うようでな。いつでも一緒におる」

「あなたの息子と、ヴュラードの息子が一緒に――」

「これが、今のこの地の現実だ、ジーク。一切の怨みは、花の下の過去だ」

「俺の疑いを消したくて、あの子達を、俺に見せたんですか」

「因縁を知ってな欲しくてな……この地には、わしの栄光と呪いの全てがある。他の土地へは、もはや興味が失せてしまった。近隣の戦乱も――わしの心には遠く感じられる」
ふとロムルスの面が暗く翳った。笑みが消え、急に老けたような顔になっていた。
「ところで……あの、お前の従士だが……代々の〈銀の乙女〉なのかね？」
ジークが眉をひそめた。あからさまに話を変えようとしているように思われたからだ。
「あいつの母は、万里眼の使い手……フェリシテ・エルダーシャです」
「そうか……万里眼……恐らく母親も、同じように紫の瞳をしていたのであろうな」
「同じ紫の瞳……？」
「聖性の継承には、体の色が同じであることが望ましいのだ。肌や髪、瞳の色など……」
ジークがうなずいた。聖性とは、いわば光のようなものであり、鉱石が聖性を帯びるように、色彩と非常に密接な関係がある。だがそんな話を急に出して気をそらそうとするのは、いかにも愚かだった。到底、賢者とさえ呼ばれた男の言動ではない。
「ロムルス――」
ジークが静かに呼んだ。馬鹿なことはやめろと言外に言うようだった。
ロムルスが苦笑した。十分に自分の言動の馬鹿馬鹿しさを理解している顔である。
「わしも、老いた――お前に、こんな話をするとは……」

苦い笑みが、重く悲しみの影を帯びていた。
「老いた……心が弱っておる。かつて戦乱を幾たびも経て、妻の死さえ乗り越えたわしが、ただお前と、昔のことを話したくなる。未来のことを考えられなくなっている」
そして、哀しい光をたたえた目で、ジークを見つめた。
「だから今、我が子に領主の座を譲りたいのだ。それを邪魔してくれるな……ジーク」
ジークは、うなずきもせず、ただ一言、断りを入れた。
「一通りの検分は、させてもらう」
「存分にやってくれ。この地が、どれだけ発展したか、見てやってくれ。お前には、まだ過去を懐かしむ気持ちはなかろうが……わしは日々、過去の影に覆われてゆくようだ」
ロムルスが椅子に身を沈めた。その体が、力を失って弱々しく縮むようだった。
ジークはそのロムルスをじっと見つめ、やがて立ち上がり、一礼した。老いた賢者の、これまでの功績を讃えるように。ジークにしては珍しく格式に則った礼だった。

「両手の指を、こんな感じで立てて……視野を区切るの」
ノヴィアが、両手の人差し指を、辺りの景色を切り取るようにして立て、

「それから、順番に見ていくのが、基本よ。ジーク様はこのために、これを私に教えて下さったんだわ。〈見守る者〉の私にとっては、とても役に立つ方法ですもの」
「いやぁ……単に、他に話題が思いつかなかっただけじゃないかなぁ」
アリスハートが疑い深げに腕を組むが、ノヴィアは聞いていない。
小高い丘にいた。ちょうど、城と街を一望出来る場所である。
そこから、ノヴィアは、ジークに教えられた通りに、透視の力で、片っ端から辺りを見ているのだった。疲れたときには、宝杖の青い宝玉を額に当てた。宝玉にやどる聖性が、多少の疲労なら、すぐに癒してくれるのである。
「ねえねえ、何が見えるのぉ」
「西の方には家畜小屋が沢山あるわ。どの家畜もよく育ってるわね」
「他にはぁ？」
「街の南は鍛冶場があるわ。武器もあるけど、ほとんど農具ね」
「ふぅん。それで？」
「何か所かに農作物を集めてるわ。聖堂にもずいぶん蓄えがあるみたい」
「全然、怪しく無いじゃん。つまんないのぉ」
だがノヴィアは真面目に街の様子を見続け、やがてかすかな異常を発見していた。

「なんで道があるのかしら」

「──道？」

「湖に向かって、幾つも道が延びてるのよ」

アリスハートが首を傾げた。森が邪魔でよく見えないが、確かに煉瓦敷きの道が幾つも湖へ向かっているようだった。まるで、湖に沈める物がそれだけ沢山あるというように。

「昔の道の跡に沿って作ってるみたい……なんであんな風に遺そうとするのかしら」

「昔を大切にしてるのかしらねぇ。だってそれだけひどい事してるんだからさぁ」

ノヴィアはなおも湖の周辺を見ようとして、ふと、おかしな光景に出くわした。

それは、少年と青年の二人組だった。どちらも、特に怪しい人物というわけではない。

ただ少年が立ち上がろうとしては倒れ、それを青年が黙って見ているのである。

その少年の必死さと、青年の無感動さの取り合わせが、何とも異常だった。

「あの人達……何してるんだろう」

気づけば、ノヴィアはそちらに引き寄せられるようにして、歩き出している。

「あ……ちょっと、ノヴィアぁ。どこ行くのぉ」

それほど興味を引かれたわけでもなかった。脚が不自由な子供が、歩く訓練をしていると思えば、ただそれだけのことだ。今の目的とは何の関係も無いはずである。

だがそれでも、体が勝手に、そちらへ向かってゆく。まるでそこに、自分でも予想もつかない何かがあることを、ノヴィアの魂が、敏感に感じ取るようだった。
ノヴィアは、いつしか足を速めて、丘を降りていた。

立ち上がろうとする少年の胸に、激烈な感情が渦を巻いていた。到底、じっとしていられない。脳裏には、難儀なことだと言い放った父の顔が浮かんでいた。
難儀——その意味は痛いほど分かっている。継承式では、領主を表す首飾りと、ジェルミナル家に伝わる宝剣を授かるのだ。壇上に上がって、領民の前でそれらの品を受け取り、正しく継承されたことを示さねばならない。
そのためには是が非にも、定められた距離を歩く必要があった。少なくとも父や領民はそう思っている。車椅子に座ったまま、それらの品を受け取る領主など聞いたこともない。
せめて立ち上がっていなければ示しがつかない。それさえ出来ない者を、領民は何と思うだろうか。これが領主かと不満に思うのではないか。
新たな領主に対する不満は、統治の不満に直結する。ただ一度、そのときだけでも歩ける姿を見せねば、それは少年のその後の一生に関わってくる。
冗談ではなかった。そんな目に遭ってまで領主になどなりたくない。

だが新たな領主は少年でなくてはならなかった。聖法庁の民とヴラドの民、その二つの血を受け継いだ少年が領主になることにこそ、この聖地の過去の清算があった。
父も領民もそう思っている。凄まじいまでの期待が少年の身に寄せられているのだ。
しかもその期待は、決して難しいことではない。ただ立って歩くだけのことだ。だが、それが少年にとっては途方もなく難しい。悔しさで体が震え出すほどの難しさだった。
ここから、湖の縁まで歩く。そう思って立ち上がるが、向かう先は果てしなく遠い。
――もう嫌だ。全て消えて無くなってくれ。
少年の心はもう既に悲鳴を上げている。領主も聖地も、どうでもいい。この地に悲劇的な歴史があったからといってなぜ自分がこんな目に遭わねばならないのか。過去の清算など自分抜きでやってくれ。そうでなければ全てぶち壊しにして、無に帰してしまえ。
それでも必死に歯を食いしばって歩こうとするのは、決して健気だからではない。
ただただ、見返してやりたいという、執念であり、怒りだった。
汗みずくになって倒れ伏し、なお立とうとしながら、少年は、怪物の姿を夢想した。
湖から立ち上がる巨大な怪物が、この世の何もかもを破壊し、踏み潰し、打ち砕くのだ。
父も領民も聖地も、全て滅べ。怪物に食われて消えてしまえ――熾烈な憎悪が少年を駆り立て、遠い先の湖へ進もうとしたとき、ふいに突然、何かが目の前に現れた。

気づけば、少年と湖の間に、怪物とはまるで違う存在が立って、
「私には、見えます」
地に這う少年を、真っ直ぐに見つめながら、ひどく澄んだ声音で、告げていた。
「あなたが、歩いている姿が、見えます」

# 第二章　輝く未来／最後の血

考えてしたことではない。ほとんど無意識の行為といってよかった。
ノヴィアは、この少年に向かって真っ直ぐ森に入り、そして、じかに少年を見守るうち、ふいに体が勝手に動いていたのだ。まるで少年の感情に応じるものが、ノヴィアの中にあるように。少年の前に立ち、ひたとその姿を見つめ、そして言葉を放っていた。
自分には、この少年が歩いている姿が、見えると。
そして、それは、真実だった。確信がない限り、そんなことを言うノヴィアではない。
少年は、目を見開いて、ノヴィアを見上げている。
その後方では、青年が、意表を突かれたような顔で、事の成り行きを眺めていた。
「ちょ、ちょっと……ノヴィア、この子のこと知ってるのぉ？」
アリスハートが慌てて、声を低めて訊く。
ノヴィアは少年を見つめたまま、かぶりを振った。正真正銘、初対面の少年なのだ。
青紫の瞳に、白皙の面。金銀の珍しい髪。手足はノヴィアよりも華奢なのではないかと

思えるほど、ほっそりとしている。これほど目を引く少年を一度見たら忘れるわけがない。一度も会ったことの無い相手なのは分かりきっていた。

だがそれでも――ノヴィアは、この少年に対して何かを感じていた。それは奇妙なことに、懐かしさだった。どこかで一度、親しく触れ合っていた気さえするのだ。

過去の自分――ノヴィアはそんな風に、その奇妙な感覚を解釈した。かつて盲目の身で闇をさまよっていたときの、もう一人の自分に、ふいにこうして再会した気がするのだ。

それは、ノヴィアにとって、自分の姿を鏡映しにしたような存在との再会である。

だからこそ、無造作ともいえる態度で、言い放ったのだった。

「私に、見せて下さい。あなたの、歩いている姿を」

さすがに、これには、青年が反応した。

「レオニス様」

素早く、少年を呼んだ。この突然の闖入者を、追い払うかと、訊いたのだ。

青年は、この少女が森に入った時点で既に気づいている。黙って見ているだけなら、わざわざ追い払って少年に気づかせる必要はないと思っていた。観客の存在が少年を傷つけることを気遣ったのである。だからこそ少女の言動は、青年にとって許せるものではない。少年の言があり次第、この無礼な少女をひっつかんで叩き出す気だった。

「いい、トール」
だが、少年の返答は、青年と、またアリスハートの、双方の意表を突くものだった。
「見えるんだな」
少年が、念を押すように言った。明らかに、ノヴィアに対する言葉である。
「はい」
ノヴィアが、きっぱりとうなずいた。
「私には、見えます」
そう言って、ここまで来い、というように、少年に向かって、手を差し伸べている。
少年が、無言で、膝に力を込めた。
その、少年の両脚を、ノヴィアの淡く澄んだ紫の瞳が、じっと見つめている。
アリスハートが、はらはらして、少年とノヴィアの間で目を行ったり来たりさせた。
青年も同様だった。なんとも落ち着かぬ顔で、固唾を呑んでいるのだ。
少年の口から、う……と唸り声が漏れた。震える膝が、少しずつ、体全体を持ち上げてゆく。足首が小刻みに震え、危うい平衡を保ち、そしてその震えが止まった。
少年は、立っていた。
少年と、ノヴィアが、数歩の距離を隔てて、向かい合った。

少年が、その青紫の目を、つと、差し伸べられたノヴィアの手に、向けた。
「そこまで、歩いてみせる」
声を上げて、脚を震わせた。
右の脚だ。その、足のつま先が、ゆっくりと持ち上がってゆく。
右足が、完全に地面を離れた。一瞬、左脚に全体重がかかり、強く震えた。
だが、倒れない。右足が地面についた。少年の目が、大きく見開かれた。
「見えます」
ノヴィアが、言った。更に歩けというのだ。
「見せてやる」
少年が、応じた。渾身の力を込めて、左脚を前へと引き寄せる。
今度は、右脚に、体全体を支え、推し進める力が要求された。
全身の筋肉が強ばった。左足のつま先が短く宙を移動し、そしてその足の裏が、地面を踏んだ。両膝に、衝撃がきた。全身が前へ放り出されそうになる。こらえかけたところを、
「そのまま」
ノヴィアの声が、少年の右脚を、前へ出させた。
一度進み始めた力を、そのまま利用するかたちで、全身を運び、右足を地につける。

拍子に、大きく少年の体が傾いた。アリスハートと青年がひやりとなる。
だが少年は、何とか平衡を保ち、左脚を前へ運んだ。
左足を地面につけながら、少年が、懸命になって手を伸ばした。
ノヴィアの差し出された手が、それを迎えた。
少年の右足が、最後の一歩を踏んだとき——少年の手が、ノヴィアの手に触れた。
二人の手が、互いに、強く握り合った。
そしてそのまま、少年の体が、前のめりに倒れ込んだ。
ノヴィアが、少年を抱きすくめるようにして、なんとかそれを支えた。
ノヴィアと少年の体が揺れ、やがて、ゆっくりと、二人して地面に腰を下ろした。
少年は、すぐには言葉を発することも出来なかった。
肩を上下させながら、荒い呼吸を繰り返し、握りしめた手を見つめている。
やっとのことで息を整え、目を、ノヴィアの顔へと向けた。
「見たか」
叩きつけるように、言った。
「見ました」
ノヴィアが、にっこりと笑った。目の前で、ふわりと花の咲いたような笑顔だった。

たちまち少年の頬を、かっと血がのぼった。赤くなる顔を、ごまかすようにして背け、
「トール！」
背後の青年を、大声で、呼んでいた。
「——はい、レオニス様」
「見たか！」
「はい」
「五歩だ！」
「はい」
「五歩だぞ！」
「はい」
「ちゃんと見たかっ！」
「しかとこの目で」
「歩けた……」
少年の声が震えた。一瞬、泣き顔が浮かんだ。慌ててこみ上げてくる思いを飲み込み、
「歩けたぞ！」
腹の底から、高らかに叫んでいた。ノヴィアが微笑み、アリスハートは唖然としている。

「はい、レオニス様」
青年も、どこか呆然とした顔で応えていた。
「嬉しいか、トール！」
「嬉しいです」
青年は、こくっとうなずき、真顔でこう言った。
「まるで、父が死んだときのようです」
アリスハートがぎょっとなる。だが少年は快哉の声を上げた。
「そうか！　そんなに嬉しいか！」
アリスハートはつくづく呆気に取られ、
「な……なんか、屈折した人たちねぇ……」
こっそり、ノヴィアの頭上で呟いていた。
「君、名は――？」
少年が、ノヴィアに目を戻した。なんとまだ手を握ったままである。
「ノヴィア・エルダーシャ」
ノヴィアが微笑する。途端にまた少年が赤くなった。だが今度は目は離さない。
「ジーク・ヴァールハイトの従士だね。さっき、城の入り口で見かけた」

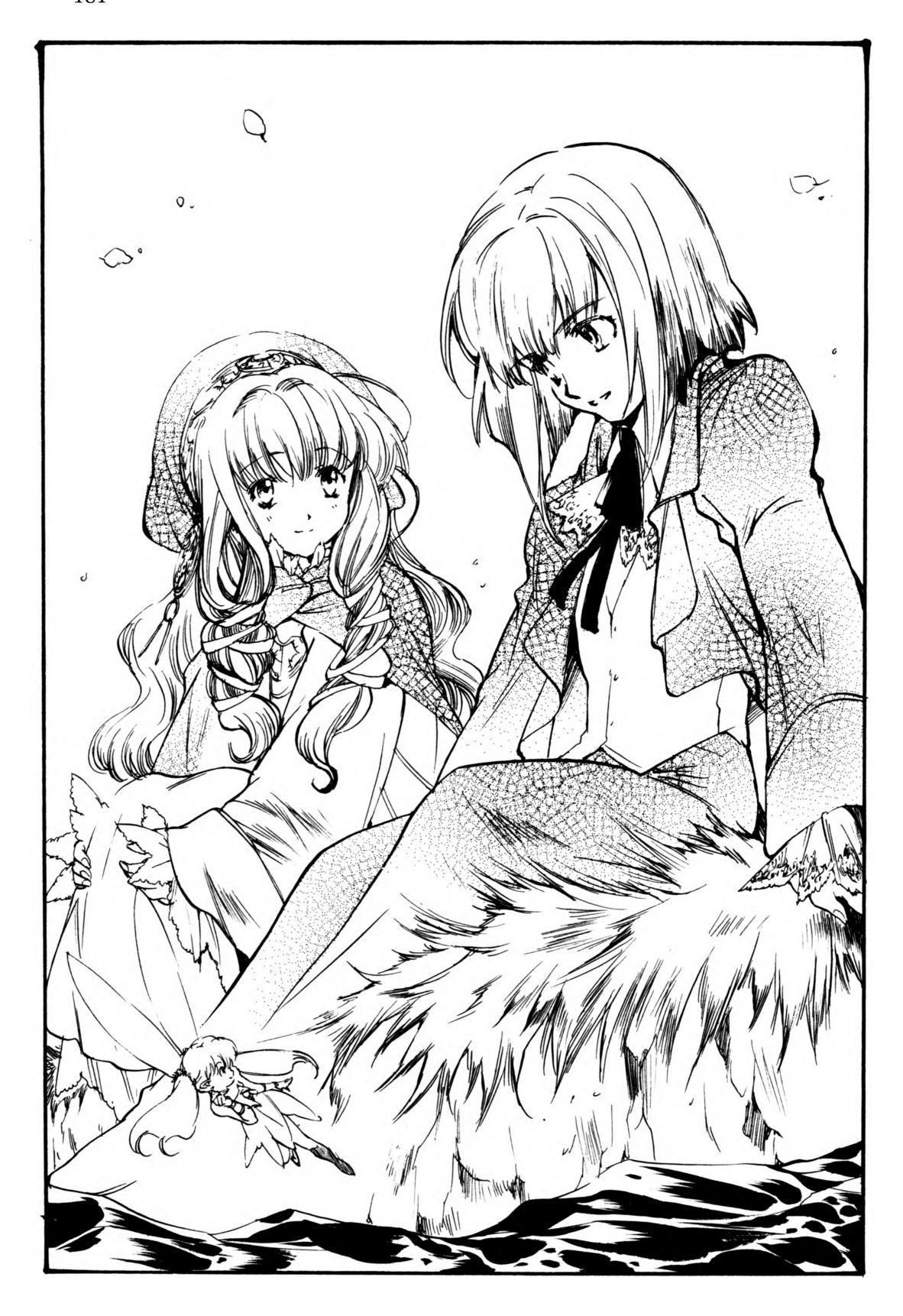
「はい。——あなたは？」
「レオニス・ジェルミナル」
毅然として名乗る少年の顔に、そのとき、はっきりとした笑顔が浮かんだ。
「聖地シャイオンの、新しい領主だ——！」
まるでたった今、自分で思い出したかのように、誇らしげな声を上げた。
たとえどれほど屈折していようとも、そのときの少年の笑顔だけは、本物だった。

「ノヴィアは、旅は長いの？」
「ええ。物心ついたときから、ずっと母と旅をしてました」
「羨ましいな。僕はずっとこの場所から出たことがない」
「美しい土地ですね」
「ずっと見ていれば慣れてしまうよ」
少年——レオニスが屈託なく笑う。湖の縁に、両脚を投げ出した格好だった。青年——トールに運んで、そうしてもらったのである。その脚のすぐ下に、湖の水面がある。
ノヴィアは、その少年の横顔を見るかたちで、草の上に腰を下ろしている。

アリスハートが、二人の傍らで宙に浮かび、トールは距離を取ったところで、影のように佇んでいた。そのトールを、珍しいものでも見るようにアリスハートが声をかけ、
「ねぇ、あんたは座んないのぉ」
「いえ」
「一緒に話せばいいのにぃ」
「いえ」
「無口ねぇ。うちの狼男と、良い勝負だわ」
などと言いつつ、トールの銀色の髪を引っ張ったりして、
「綺麗な髪ねぇ。あんたの主人の髪も変わってるけど、どっちも綺麗よねぇ」
一向に反応を見せないのを良いことに、勝手なことを言うのだった。
「ねぇねぇ、あんたのことなんて呼べばいい？　なんか、渾名あるぅ？」
「影法師」
トールが、ぼそっと呟いた。
「幽霊、かかし、木偶、消し炭、油虫、なまくら」
すらすらと並べ立てた。その全てが、誰かに言われたものらしい。
「どれでも、どうぞ」

真顔で言う。アリスハートが唸った。それでは悪口雑言そのものである。
「影法師が、一番ましに聞こえてくるわね」
「はい」
「うーん、それだったらぁ、あたしが、もっと良い渾名を付けてあげるわよぉ」
「本当ですか」
トールが、ひたとアリスハートを見た。無感動なその濃い紫の目に、あるかなしかの、期待の光のようなものがある。
「う……うん。まぁ、思いついたらね。それまではトールって呼ぶわよぉ」
「はい」
トールが丁寧に頭を下げ、はらりとその銀髪が顔を隠す。
ふと、そのトールの目が、さっと森の方を向いた。木々の間に目を走らせ、そのまま、すっと、音もなく、それこそ影そのもののように、森へと歩んでいってしまう。
「そうねえ、こう……何か、格好良いのが良いわよねぇ。呼ばれて嬉しいような……」
アリスハートが言ったときには、トールの姿は完全に無い。
「あ、あれ……？」
ちょっと目を離した隙に、忽然と消えている。確かに呆れるほどの気配の無さだ。

「はぁ……影法師さん、ねぇ」
どうにも、ぴったりの渾名だった。——かと思うと、
「トール——？　どうしたんだろう」
レオニスが言った。なんと背を向けていたにもかかわらず、トールがいなくなったことを真っ先に感づいていた。ノヴィアでさえ、咄嗟にはトールの不在に気づかなかったのだ。
「誰かが、森にいたのかな。ま、すぐにまた現れるよ」
気楽な様子でレオニスが肩をすくめる。本当に幽霊扱いだった。
「トールは、僕の従兄なんだ。僕の母とあいつの父が、兄妹なのさ」
「お母様が……？」
「僕の母もあいつの母も、とっくに死んでるけどね。ノヴィアのご両親は？」
「私も、母を戦乱で亡くしました。父は……私が幼いときに亡くなったと聞いてます」
レオニスが親しげに話すのに対し、ノヴィアはあくまで敬語である。旅暮らしで、友達などいなかったノヴィアにとって、大人よりも、同年齢の子供の方が、遠い存在に感じられるのだ。そのせいか、どこか一線を引いたような接し方になるのだった。
「そうか……母親の顔って、覚えてる？」
だがレオニスは、そんなノヴィアの態度も気にせず、親しげに声をかけている。

「つい先年、亡くなったばかりですから……」
「良いな。僕の母は幼い頃に死んでしまった。しかも父が、母の肖像画や遺品を、全て処分してしまったんだよ。そのせいで、ろくに顔も分からない」
「まあ……」
「兄弟は――？」
「一人っ子です」
「僕も一人っ子だけど……ちょっと違うかな」
「違う――？」
「双子だったらしいんだ。でも、一人は生まれたときに死んだらしい」
レオニスが、ぽつんと言った。ノヴィアがびっくりした顔になる。
「でも本当に死んだかどうかは分からない……そういうことにしただけかもしれない」
「そういうこと……ですか？」
「君たちは、なぜ蛮族というものが存在するか、知ってる？」
ふいにレオニスが訊いた。アリスハートが首を傾げる。ノヴィアが思案げに答え、
「彼らが、聖法庁の教義に反する風習を、持っているからです」
「そう。蛮族と呼ばれる民は、みな聖法庁の教義と矛盾する教えを持っていて、それを棄

てる事を拒んだせいで、聖印を授けられず、蛮族とされたんだ」
「ふぅん。何だか難しいのねぇ……。みんなで仲良くすれば良いのにぃ」
アリスハートが、しみじみと言う。レオニスが、くすっと少年らしく笑った。
「そういうわけにもいかなかったのさ。ヴラドの民が、どういう風習を持っていたせいで蛮族とされたか、知っているかい？」
ノヴィアとアリスハートが、当然のようにかぶりを振った。
「子減らしさ」
これまた当然のようにレオニスが言うのへ、二人がどきっとなる。
「子供が、同時に一人以上生まれたとき、数を減らして、一人にするんだよ」
「そ、そんな……生まれた子供を減らすって、それって……」
「一番最後に生まれた子供以外、忌まわしい子として処分するんだ。それがヴラドの民の信仰だよ。そして聖法庁は、子供を殺すことを重大な罪としているんだ。当然、聖印も豊穣の土地も授けられず、敵対関係となったってわけさ」
さらりと告げるレオニスに、アリスハートが呆れたようにうなだれた。
「はあ……街を湖に沈めたり、子供を殺したり……何だか大変な土地なのねぇ」
「それほど貧しい土地だったんだよ。痩せた母親が乳を与えられるのは、一人の子が限界

だったんだ。土地の事情に、信仰が重なって、習慣になったんじゃないかな」
そう言われてようやく、ノヴィアはレオニスの言わんとしていることを察した。
「今でも……残っている風習なんですか？」
「最近じゃ、そんなことは無いよ。この土地はもうそれほど貧しくはないからね」
レオニスが笑って、この豊かな大地を手で示してみせた。
「ただ……僕が生まれたときは、まだその習慣は残ってた。僕は双子だったんだ」
そこでようやくアリスハートが、遅れてその言葉の意味を理解した。
「じゃ、じゃあ……あんたの兄弟って……」
「父も廷臣達も、死産だって言ってるけどね。でもどこにも墓が無いんだ。殺したのか、捨てたのか……。確かなことは分からないし、誰もそのことを話したがらないのさ」
レオニスは表情の消えた顔で湖を眺め、言った。
「争いが絶えなかった頃の……昔のことだからね。当時を知ってる人達が、話したがらないのも分かるよ。出来れば忘れたいんじゃないかな……」
そのレオニスの横顔を、ノヴィアは静かに見つめた。レオニスが生まれながらにして背負わねばならないものの哀しさが、いたくノヴィアの胸に迫るようだった。
全てが闇に葬られた末に生まれた者として、レオニスは自分の兄弟がどうなったかさえ

訊くことが出来ないのだ。それに何より――
「消されていたのは、僕の方だったかもしれない……」
レオニスはそう呟いていた。それは決して、生き残ったことを喜ぶ言葉ではない。
「たまに、自分が死んでたら良かったのにって、思うよ。わざわざ残した方が、まともに歩くことさえ出来ないなんて……」
そう囁くレオニスの顔からは、一切の表情が冷たく消え果ててゆくようだった。
誰も何も言わずとも、レオニスは敏感に周囲の感情を察するのだろう。あるいはそれはレオニスの勘違いかもしれない。だが人と接するたびに幻の声が聞こえてくるのは確かだ。
お前の方が先に生まれていれば良かったのに――そうすれば……それはそういう声だ。
そしてノヴィアは、そこで、レオニスの予想を超えることをした。
レオニスと全く同じような表情で、そっとうなずいてみせたのである。
「そうですね。そういう風に思うこと、私もあります」
レオニスが目を見開き――ノヴィアを振り返った。ノヴィアの表情には全く嘘偽りがなかった。本気でそう思ったことがある顔だった。レオニスは驚き、そして少し笑った。
「君みたいな人でも、そういうことあるんだ……」
ノヴィアが、無言で微笑んでみせた。その優しい笑みに、レオニスもまた引き込まれた

ように微笑んでいた。何の屈託もない、心をあらわにした自然な笑顔だった。
「ね……ノヴィアは、故郷はどこ？」
「聖都に近い街で生まれたと聞いています……故郷という感じではありませんが」
旅そのものが生活だったノヴィアにとって、故郷というのは漠然とした存在である。
レオニスに訊かれると、何だか自分がとても大事なものを放り出して生きてきたような気にさせられる。父の存在、故郷、母の生い立ち、家系、生まれ——そうしたものがノヴィアには、今ひとつ希薄だった。そんなところは孤児だったジークに似たところがある。
そう漏らすと、レオニスはかぶりを振った。そしてひどく遠い目をして言った。
「羨ましいよ。僕なんか、いつでもがんじがらめだ。……僕も、旅をしてみたい」
諦念の固まりのような声だった。それが、ぴりっとノヴィアの胸の内に触れた。
何となく、少年の感情が、そのまま、ノヴィアの中に流れ込んでくるような感じだった。
「出来ますよ」
「——そうかな」
「私、ジーク様を追って街を出たとき、目が見えなかったんです」
今度はレオニスがぎょっとなってノヴィアを見つめた。
「見えなかった？　だって、そんな——……」

そこでノヴィアが真っ直ぐ見つめ返すのへ、急に頰を赤らめ、ごにょごにょ呟いて、
「……綺麗な目なのに」
うつむくようにして言った。それから、やけにあどけない顔で、
「目が見えないのに、旅に出るなんて……怖くなかった――？」
「怖かったです。でも、アリスハートがいました。ジーク様の従士にもなれました。そしてそのお陰で、目を開くことが出来たんです」
「凄い……。ノヴィアは凄いな。……君は、なんで、旅に？」
と、宙のアリスハートを見やる。
「あたしは、ノヴィアの友達だもん。ノヴィアと一緒にいるのが楽しいからよぉ」
「ふぅん。良いな。旅か……」
また諦めたような声だった。ノヴィアが、ちょっと力を込めて言った。
「あなたにも、出来ます」
最初に、レオニスの歩いている姿が見えると言ったときの口調である。
妙に、ノヴィア自身が、この少年の感情に敏感になっているようなところがあった。
「君に言われると、何だか本当に、出来るような気がしてくるよ……」
レオニスが苦笑した。そして、ふと思いついたように、

「あの……」
「はい？」
「いや……別に」
だがぴたりと口を閉ざすレオニスに、ノヴィアはすぐに反応してしまう。
思いを閉じこめることは、ノヴィアにとっては耐えられないことだったし、この少年が、これまで常に思いを閉じこめて生きてきたのが、深く察せられるのだ。
まるで、もう一人の自分が、そんな目に遭っているような不思議な感覚になりながら、
「何でも言って下さい、レオニス」
つい、ノヴィアは、相手の勇気を引き出すように、優しく囁いていた。
「君と一緒に旅に出たい」
呟くように、レオニスが言った。ノヴィアとアリスハートが目を丸くするのへ、
「あ……トールも一緒に。ほら、アリスハートも。みんなで」
慌てたように、付け加えたものだった。
「もし、そんな風に出来たら……良いなと思う」
「とっても良いですね」
にっこり笑うノヴィアに、レオニスがほっとしたようになる。そして思い切って、

「その前に……君に頼みたいことがあるんだけど、良いかな」
「何でしょう。私に出来ることでしたら」
「近々……領主になる継承式があるんだ。そこに……君たちに、いて欲しい」
「私たちに？」
「僕が、継承式に出るところを、見て欲しいんだ」
それは決して、晴れ姿を見て欲しいというのではなかった。
ただ、自分が歩くところを、見ていて欲しいのだ。
ノヴィアに見守られるだけで、鉄のように重く固い両脚が、まともに動く気がしていた。
それればかりか、長年、心に垂れ込めていた暗雲が綺麗に吹き払われてゆくようなのだ。
あてどもない闇雲の怒りと憎悪が影を薄め、暖かな感情が芽生えてくる。
誰にも努力をするところなど見られたくもない、歩けぬことで苦しんでいる姿など人に見せられない。ずっとそう思ってきた。そんな屈辱にはとても耐えられないと。
だがその思いを、突然現れたノヴィアの存在が――眼差しが、変えてくれる気がした。
「頼む――君に、見守っていて欲しいんだ」
レオニスが言った。ほとんどすがるようだった。
そのレオニスの思いを、ノヴィアは、直接心に流れ込むかのように感じ取っている。

そして、ほとんど間を置かずに、答えていた。
「喜んで」
そのときのレオニスの顔には、紛れもない、救われた者の微笑みが、広がっていた。
「あの影法師さん……いやいや、トールったら、遅いわねぇ」
アリスハートが言いつつ、きょろきょろ辺りを見回し、何となく肩をすぼめた。
「なんか、気づかないだけで、実はいるんじゃないかって気がしてくるのよねぇ……」
だがトールの姿は、文字通り影も形もない。レオニスが手を叩いて笑った。
「噂をすれば影ってやつだ。トールは、父親が死んでからずっと、ああなんだ」
「お父様が亡くなってから……ですか？」
「ちょっと屈折してるわよねぇ。お父さんが死んで、嬉しいなんてさぁ」
「ジーク・ヴァールハイトさ――」
そろりと、面白いことでも教えるように、レオニスが言った。
「へ？」
アリスハートがきょとんとなる。ノヴィアもいきなりジークの名を出されて驚いた。
その二人の顔を、どこか楽しげに眺めながら、レオニスは言った。

「ジーク・ヴァールハイトが、トールの父を斬ったのさ」

かこっとアリスハートの顎が下がった。ノヴィアも大きく目をみはっている。

「そういえば、ジーク様は、以前、この地で戦ったとおっしゃってましたが……」

「よかったら、聞かせてあげるよ。この聖地と、赤髪の剣士の因縁を」

そう言われてノヴィアは迷ったが、一方で従士として知るべきだという気持ちが湧いていた。この地でのジークの働きを理解するためにも知る必要があるのだと。また同時に、次期領主であるというレオニスが、ジークのことをどう思っているかが気になっていた。極端な話、このときノヴィアは、レオニスが敵か味方かを探る気持ちを抱きつつ、

「……お願いします、聞かせて下さい」

そう、かすかに息を詰めるようにして、言ったのだった。

「だいぶ昔の話さ。あの赤髪の剣士のお陰で、僕の父は命拾いし、そしてトールの父は倒された。僕がこうして生きているのも、ジーク・ヴァールハイトのお陰なんだ――」

同じ頃、城を出て湖畔を巡る、ジークの姿があった。

感覚を研ぎ澄ませ、どんな些細な異変も見逃さぬ構えである。そしてその感覚が、今はっきりと異常を告げていた。街から湖へと続く道が、やけに多いのだ。しかもほとんどの

道が新しい。それ自体は何でもないことだが、今のジークにはそれが異常と感じられた。
それが何を意味するかを漠然と思案する一方、ジークは、以前ここを訪れたときよりも格段に豊かになった街や耕地を目の当たりにしていた。思わず、かつてここが争乱の地であった証拠を探したくなるほど、何もかもが平和に覆われているのである。
全ては花の下に埋もれた過去だ——ロムルスはそう言った。事実、その通りだった。むしろだからこそ、様々なものが自然と胸に甦ってくる。それはこの一帯を占拠した軍であり、蛮族の戦士達の戦さ衣装であり、友やある女性の面影であったりした。
それらのものが断片的に浮かんでは消え、今見る景色と、かつて見た光景とが、自然と重なり合ってゆく。そして自分がその手でしてのけたことの数々が思い出されてくると、ジークは思わずその足を止め、美しく陽光を乱れさせる湖に見入っていたのだった。

当時——
ドラクロワは剣士団を組織すると、武功を立てる一方で、和平に奔走していた。むしろ和平こそ本来の目的であり、武功はその通過点に過ぎない。その証拠が、ドラクロワの配下に徹底された禁止事項である。捕虜の待遇、占領した街での行動、全てにおいて暴力を禁じたのだ。特に、捕虜の待遇を良くすることは独自の戦法といえた。当時まだ

大きな勢力を持たなかったドラクロワは、捕虜からも、配下となる人材を探したのである。敵もドラクロワ相手であれば容易に降伏し、進んで配下となった。そんなドラクロワが、聖地シャイオンとつながるのは必然でさえあった。

ロムルスは当時、蛮族の娘と結ばれ、かつ領主となった異例中の異例の人物だった。聖法庁からも蛮族からも敵視されながら、味方を増やし、勢力を築いたのだ。

その時点ではまだ和平のためというより、ひたすら身を守るためだった。あらゆる汚い手を使い、業火の中を走り抜けるようにして領主の地位を手に入れたのである。

そのロムルスにも、ついに進退窮まるときが来た。

聖法庁側で、ロムルスと対立する者たちが暗躍し、聖地を守る兵を引き上げさせたのだ。二つの民が結ばれるくらいだから兵など要るはずがない。そうほくそ笑みながら、ことごとく撤兵させていったのである。冗談ではなかった。当時の聖地シャイオンの平和など、いつ崩れるか分からぬ砂の城である。何としても、兵力という強い柱が必要だった。

その柱を奪われたロムルスは、一つの秘策を講じた。

当時、知名度を上げつつあったドラクロワを、突如、聖地シャイオンの和平の仲介人として指名したのである。ロムルスが和平という言葉を示したのもこのときだった。生き残るためには、もはやそれしかなかったのだ。そしてそれは聖地そのものの変革だった。

これには、ロムルス潰しを画策した聖法庁の面々も唖然となった。
剣士団は戦う集団である。和平を仲介するということは、土地を奪うことも、砦を陥として自分の物にすることも出来ないということだ。それでは剣士団の完全否定である。いったい誰が自分を否定するために働くというのか。聖法庁の面々は大いに嘲笑した。
だがこの嘲笑は、すぐさま衝撃による沈黙へと変貌している。
ロムルスから指名されたドラクロワの反応こそ見事だった。すぐさま和平仲介を承知すると、全軍を上げて聖地シャイオンに直行したのである。
しかも和平交渉であるにもかかわらず、完全武装による進軍だった。聖堂周辺を包囲し、道沿いに兵を配備して、補給線まで用意した。聖法庁の兵と入れ替わりに、まるで蛮族に代わって聖地シャイオンを占領してしまったかのような有様となった。
この進軍に、今にも聖地に雪崩れ込みかけていたヴラドの民の戦士たちも愕然となった。
ロムルスは、進軍してきたドラクロワの姿を見て、快哉の声を上げたという。
当時、ドラクロワの平和への意図を見抜いていた者は少ない。その数少ない一人が、ロムルスだった。ロムルスは、ドラクロワのために、最大の武功を用意したのである。
それが和平の実現だった。ドラクロワにとっては喉から手が出るほど欲しい功績なのだ。
事実、聖地シャイオンでの功績を讃えられたドラクロワは、その後、各地の和平を誰に

も邪魔されず実現することが出来た。そして武功を上げるよりも数段速く、勢力を拡大させたのである。それが、捕虜を味方にする戦術を、最大限まで推し進めた結果だった。

またドラクロワはこのときロムルスと補給契約を結んでいる。以後、ドラクロワは聖地シャイオンの有り余る物量を最優先で受け取り、どんな戦場でも物資に不自由しなかった。

和平の仲介は、ドラクロワにとっては十分に利益のある話だったのだ。

その上ドラクロワは、ロムルスでさえ予想しなかった策を講じていた。

シーラ・リヴィエールという女性を、和平の立会人としたのである。

〈癒す者〉の称号を持つシーラは、〈銀の乙女〉の逸材であり、聖性をもって負傷者を癒す、救護団の代表であった。だが当時はシーラも、それほど知名度があったわけではない。

ドラクロワの推薦とあってはロムルスも認めざるをえず、特にシーラに何かを期待していたわけではなかった。だが、これによって、事態は大きく進展した。

〈銀の乙女〉が動いたのである。和平の交渉を見守る第三者として、公正さを保証する役を請け負ったのだ。当然、その代表は、シーラということになる。

これでもうシーラは、一介の聖道女ではなくなった。その背後には〈銀の乙女〉がおり、何万人という聖道女がいる。ロムルスでさえ、この措置に呆然となった。これはロムルスの死後も、和平を恒久的なものにするための措置だったからである。

和平が実現したからといって、多くの者がそれを認知し、守り続けるよう仕向けねば意味がない。そのためには〈銀の乙女〉ほどの組織の存在が必要だったのである。これではロムルスの死後に誰かが多少暗躍したくらいでは、この地の和平はびくともしないだろう。死後のことまで考えるというのは、明らかに、そのときの利益を度外視することである。今生き残ることが最優先の人間に、死後のことまで考えられるわけがない。
そこが、自分が生き残るために和平を選んだロムルスと、ドラクロワの違いだ——
「覚悟が違うんだよ」
当時、ジークは、シーラに平然とそう断言したものだった。
「でも、ロムルス公が、ドラクロワを指名しなければ、この大役は任されなかったのよ」
だからもう少し、ロムルスに感謝しても良いのではないかとシーラは言う。
しかしジークは不機嫌だった。聖地シャイオンに進軍したときは、燃え上がるほどの喜びを感じたものである。ドラクロワを平和の使徒として指名した男への期待が膨らんだ。
だが本人を見てがっくりきた。自分の妻子を守ることに汲々とし、ひたすら生き残るために和平を求めたのだ。それでは戦場を駆け巡って命を拾う自分と変わらないではないか。
「つまらないな」
ぶすっとして聖地の防備に努め、豊穣の地に見とれる兵たちに、厳しく軍令を飛ばした。

ジークが不機嫌になっているときに、誰も逆らったりはしない。みな、首をすくめてやり過ごそうとする。そんなジークを宥められるのはドラクロワかシーラしかいない。ドラクロワは寝る暇もない忙しさだったから、シーラがもっぱらその役を務めた。
「ドラクロワだって、平和のために何もかもを投げ打っているわけではないわ、ジーク」
シーラは、穏やかに微笑して、そう言ったものだった。
「ちゃんと食料も安全も確保して、あなたたちのために利益を求めているでしょう？」
それはいわば、ロムルスが妻子を守るのと同じである。ドラクロワもまた自分の兵団やシーラの安全を守り、その命と意志とを生き残らせることに奔走しているのだ。
「それを否定したら、それこそ、平和は無いわ。無欲ばかりが価値ではないのよ」
平和とは、無数の利害から必然的に生まれてくるものである。利害が一致しないことを怒って、私利私欲を棄てさせようとすれば、それ自体が争いの種になるのは必然だった。
「特に、ヴラドの民は、一度、自分たちの聖地を奪われているわ……」
信仰や歴史において否定し合う者達に和平をもたらすには、それこそ今現在の利益をもってしなければならない。和平が成れば、みなが豊かな利益を得ることが出来る——そのような和平策を、ドラクロワは今、ロムルスと全力で練り上げているのだ。
シーラにそう諭されては、ジークも渋々ながらそれを承知せざるをえない。

「妻子を愛し抜いて、この争いの大地に生きてきた人を、敬意をもって護りなさい」
シーラは、ロムルスとその妻子を、高く評価していた。民の違いを超えた愛情のために、ひたすら生き抜いてきたロムルスとその妻に、感動さえしていたのだ。
ジークは、シーラにそう言われ、毒気を抜かれたようになって、聖堂の護衛に努めた。
そしてロムルスと妻子が語らうところを見るにつれ、家族というものが、ひどく尊く感じられるようになったのも事実だった。それは孤児だったジークにはなかったものだ。
確かに、もし自分がロムルスで、妻がシーラなら、生き残ることだけを考えたかもしれない――などとロムルスに共感しつつ、思わずそんなことを想像する自分に顔を赤らめた。
「ジーク、ちょっと良いか」
ドラクロワに声をかけられたのは、ちょうどそのときだ。
「な……なんだ、ドラクロワ……」
思わず狼狽したようになりつつも、ジークは懸命に顔を引き締めている。
和平交渉で忙殺されているドラクロワが直接呼びに来たのだ。ただごとではなかった。
ドラクロワはジークをつれて執務室に入り、短く告げた。
「ヴラドの民が、戦いを挑んできた」
ジークは無言だった。兵は常に臨戦態勢にある。戦いになるなら今すぐ出陣するだけだ。

「いや、戦いくさではない。戦いだ」
ジークが眉まゆをひそめた。何が違うんだと言いたかった。
「一対一の戦いだ。それを、ヴラドの民の戦士団だんが、望んでいる」
ジークは、話についていけず、ぽかんとなった。
何と、和平交渉の席で、ヴラドの民たみの戦士たちが、双方そうほうから代表の戦士を出して大勢の前で戦わせようと言ってきたのだという。その結果を見て和平を考えるというのだ。
「和平のための条件じょうけんは、既すでに、ほとんど絞しぼり込めているのだが――」
ヴラドの民を聖地せいちに移住いじゅうさせる計画はロムルス自身が既に立てており、その調整の席で、ドラクロワは、ヴラドの民にも、幾いくつもの派閥はばつがあることを知った。
中でもヴラドの英雄えいゆうと呼ばれる男の派閥は、民の戦士の大半を掌握しょうあくし、最も好戦的な上、最もこの和平に反対していた。ロムルスとしてもそれを無視むしできない理由があった。ヴラドの民に強い影響力えいきょうりょくを持っていたし、何よりロムルスの妻の兄が、その英雄だからである。
そのヴラドの英雄が提示ていじしてきたのが、公開試合であった。
「なんだ、それ」
というのがジークの正直な感想だった。試合に負けたら和平を認みとめるのならまだしも、その結果を見て考えるとは何か。だったらさっさと攻せめて来い。そう思うほど癇かんに障さわった。

「見せ物か。馬鹿にしてるな」
公開試合とは、剣を楽しむ者の発想だった。英雄と呼ばれるからには、さぞ数多の敵を斬り屠ってきたのだろう。その強さを見せつけたいがための提案にしか思えなかった。
「だが案外、計算高い」
ドラクロワが言う。ヴラドの民にとって、ドラクロワ軍は、未知の相手である。
これまで駐屯してきた聖法庁の兵よりも強いのか弱いのか。それさえはっきりとしないまま、うかつに攻め込めない。だから、和平交渉に乗りつつ様子を見ているのだ。
「奴らは、この和平の申し込みが、ロムルスに兵力が無いゆえであることを悟っている」
ロムルスと聖法庁との関係が上手くいっていないせいで兵が引き上げていったことに、うすうす感づいているのだ。ヴラドの戦士にとっては千載一遇の好機なのである。
むろんロムルスを殺して聖地を奪っても、すぐに聖法庁の大軍勢が押し寄せ、再び追い出されるだろう。だがそのときは聖地を火の海にし、耕地も治水も破壊して逃げればいい。
ヴラドの民の聖地は、既に湖の底だ。今更、何の未練も無い。耕地に塩を撒いて二度と作物がとれなくさせることさえしかねなかった。
「そうなれば彼らの聖地も、我らの聖地も、この地の歴史も、全て無に帰す……」
ヴラドの英雄が率いる戦士たちにとっては、今がその機会だった。公開試合でこちらの

力をはかりつつ、民の戦意を煽ろうというのだ。
血みどろの道を開くための、残忍な儀式だった。ジークは胸くそが悪くなった。
恐らくその英雄の目的は、公開試合で相手をなぶり殺し、敵の無力さを示して、今こそ民を挙げて攻めるときだと叫ぶことにある。たとえそれが滅びの道だとしても、戦士としての快楽を味わえれば、満足なのだ。そんな男を義兄にもったロムルスも哀れだった。
「この試合を断ることは出来ん。それこそ逃げたといって余計に戦意を煽るだろう」
「俺にやらせろ、ドラクロワ」
ジークが言い放った。声が憤怒で震えている。全身の血が沸騰するほどの怒りだった。
だがそこで、ドラクロワが、ちょっと困ったように頬を掻いた。
「いや、実は、私が、その試合に出ようと思っていてな。そのことをお前に……」
たちまちジークの目が据わった。
「ドラクロワ」
、、、、、
「うむ……まあ、剣士団の団長としては軽率ではあるが……。ただ、そのヴラドの英雄とやらが直接、お出ましになるようなのでね。ならば、私が……」
「俺がやる」
、、、
ドラクロワが苦笑した。

「お前を見ていたら、私の方が冷静になってきたよ」
「それでいい。頭に血を上らせるのは、俺の仕事だ」
ジークが真顔で言った。ドラクロワが、今度こそ本当に笑った。
「ジーク。一つだけ命令だ。決して殺すな」
ドラクロワが言った。ジークは沈黙したが、やがてはっきりとうなずいてみせた。
「次の交渉で戦いの日取りを決める。体を大事にしておけ」
それで話は終わりだった。ジークは烈気を抱いて部屋を出て行った。

「私が代わりに試合に出ましょうか？」
シーラが真顔で言った。公開試合のことを話した直後の言葉である。
シーラも、ヴラドの英雄が民の滅びも気にせず血に酔うたぐいの戦士であることを敏感に察しているのだ。負傷者を癒すシーラにしてみれば、天敵のような男だった。
確かに、誰かの怒った顔を見ていると冷静になれるな、とジークは思った。
「いや……お前には違うことを頼みたいんだ、シーラ」
「もちろん、あなたが傷を負ったら、すぐに癒すわ。戦っている最中でもね」
本気で、戦闘の場に走り込んできそうな様子で、シーラが言う。

「いや……逆だ」
ぽつっとジークが返した。シーラの目が丸くなった。呆れたように口元に手を当て、
「私が、その、英雄さんとやらを……癒すの？」
「ドラクロワから、殺すなと言われた」
そう言われてシーラが黙った。相手が殺す気でかかってくるのに対し、こちらは殺さぬよう戦うというのは想像以上に難しい。しかも相手は英雄と呼ばれる男である。
本気で戦わねば、どんなところで後れを取るか知れない。だが殺したくない。殺せば、それが遺恨となる。あくまで、試合にのみ勝たねばならないのだ。
「分かったわ……」
シーラが溜息混じりに言った。ジークの対戦相手が負傷すれば、シーラが癒すのだ。
「すまない」
ジークも、出来れば、そんな男などに、シーラの手を触れさせたくなかった。
「良いのよ。そういうあなたたちだから、一緒にいるんだもの」
そう言いながら、シーラは、にっこりと嬉しげに笑ってくれた。
その笑顔が、ジークを更に冷静にさせた。自分は決して暴虐に任せて剣を振るうのではない。守るためだ。和平と――この笑顔を。その思いが強く湧いた。

そして一方で、確かにシーラのこの笑顔を守るためなら、自分はどんなことでもするだろうな……と、ジークは改めて、ロムルスに対する共感を、ひそかに抱いていた。

輝くような湖のそばで——レオニスが、ノヴィアとアリスハートに聖地の経緯を面白げに話す一方、昏く沈むような目で、過去と現在の両方をひそかに見据える者が、いた。

影法師トールである。ひっそりと気配を絶ち、木立の影の一つででもあるかのように、じっと、湖畔に佇むジークの後方で、立ちつくしていた。

そうしているだけで、手がじっとりと汗ばんでくる。トールは珍しいものでも見るように自分の両手を見つめ、そして、感情の消え果てたような目を、ジークの背に向けた。

あなたが、ヴラドの英雄を殺した——

そっと口だけを動かして、心の中で囁きかける。

あなたが、父を——

すうっと手を伸ばし、遠間のジークを両手で抱くようにした。そのまま、手の中のジークを押し潰すようにして、両手を握り合わせる。そうするうちに、自分がジークとなり、父を殺した気になってくる。また自分が父となり、ジークに殺された気にもなる。

希薄な自我が、拠り所を求めてジークにすがるようであった。そんなときでさえトールに存在感はなく、むしろますますその気配が薄くなってゆく。そしてジークが今まさしく過去を思い出していることを直感するように、トールもまた空気に溶けるようにしてひそみながら、遠くジークとともに、まざまざと当時の戦いの光景を脳裏に甦らせていた。
それは、民の崇める英雄と、燃え立つような赤髪の剣士の、凄惨なる一騎打ちだった。

公開試合は、馬鹿馬鹿しいくらいに盛況だった。
場所は、湖のそばの野原である。そこに数少ないヴラドの民の遺跡があった。今は無人の野だが、巨石が円を描いて置かれており、かつての祭礼の場であることを示している。
その巨石の円の中が、戦いの場であった。
ヴラドの民と聖法庁の民が、巨石の円の周囲の、南側と北側に分かれ、群れ集う。
それぞれの兵も互いに分かれて配備され、緊張した顔で向き合っていた。
夕刻である。篝火がたかれ、澄んだ鏡のごとき湖の向こうの稜線に、夕陽が沈んでゆく。
やがて、ロムルスが、双方の代表へ、巨石の円の中に入るよう命じ、
「ドルク・ヴュラード！」
ヴラドの民の戦士たちが、歓声を上げて、その名を連呼した。

化け物じみた大きな背丈の男だった。異常なほどつるりとした肌に、髭も髪も無い。頭部一面に入れ墨を彫っているが、顔はきわめて無表情だった。その紫の瞳には何の感情も無く、無慈悲な殺戮者の面相である。兜はかぶらず、分厚い鎖帷子を着込み、馬の首さえ一撃で刎ねるという巨大な戦斧を軽々と手にしている。
そのヴラドの英雄ことドルク・ヴュラードの目に、ふいに訝しげな光が浮かんだ。
巨石の円の向こう側から、予想もつかぬ者が現れたからだ。
燃え立つような赤髪をした剣士——しなやかな身に、鋭い目、手には身の丈に匹敵するほどの長剣を握っている。同じく兜をかぶらず、鉄片を叩き込んだ革鎧を着込み、いかにも戦い慣れた様子であるが、あまりに若い。まだほんの青年といっていい。
その赤髪の剣士ことジークが、ドルク・ヴュラードと距離を置いて、立ち止まった。
たちまちヴラドの民が、嘲笑と罵声を豪雨のように降り注がせた。聖法庁は、わざと、一、番、弱、い、兵士を出してきたのだ。ヴラドの民への侮辱だ。八つ裂きにされてしまえ。
そういう叫びを浴びながら、ジークは平然としている。巨石の円の外側にいる、ドラクロワとシーラ——そしてロムルスとその妻子を、順番に見ていった。
ロムルスの妻は、まるで夕闇に咲いた、一輪の銀の薔薇だった。ほっそりとした面に淡く澄んだ紫の瞳、艶やかな銀の髪。その白い手が、しっかりと傍らに座る息子の肩を抱い

ている。息子は、生まれつき脚が弱く、ほとんど歩けないという。
ロムルスがその半生をかけて守ってきた家族——その妻も子も、争乱になればひとたまりもなく殺されるだろう。己の身だけでなく、妻と子をも守って生き残ったロムルスに、そのとき初めて、ジークは憧憬にも似た、敬意の念を抱いていた。
そのとき、ドルク・ヴュラードが猛然とその斧を振るった。空を裂く刃の唸りとともに、
「消えろ、小僧」
相手を頭から押し潰すような、重く太い声音で、言い放った。
「仲良くやろう」
ジークが真顔で返した。ドルク・ヴュラードの無表情な顔に変化はない。ただ、据わった目の奥で、何か恐ろしいことを考えているような、嫌な気配が全身にみなぎった。
「小僧が、俺を侮るか」
脅すでもない、単に確認するような口調である。ジークは正直、この時点で、既に殺意を抱き始めている。それほどの暴虐の気配を持った相手だった。
「お前のような子供は、殺しはしない。手足を全て切り落とす。這って生きろ」
それで勘弁してやるという言い方だった。
「あんたみたいなのがいるから、戦さが減らないんだよ……」

ぼそぼそと言った。それがジークの、真正の怒りを表していた。声が低くなり、何を言っているのか分からなくなったときが、怒りの頂点だった。
激しい怒りを抱く一方、ジークはまた、ドラクロワへの深い感謝を感じていた。ドラクロワがいなければ、ジーク自身、この男のように、力のみに頼っていたかもしれないのだ。
心まで剣を握るな――かつてドラクロワは言った。そしていつかその手も、剣を放す日が来ることを信じろ――そう強く念じたとき、ロムルスの声が、上がった。
「これが流されるべき最後の血とならんことを願い、これより、戦いの儀を始める！」
巨石の間で、篝火が燃え、円の内部を緋色に染め上げ、闘争の始まりを告げていた。
炎が上がるやいなや、斧と剣とが、真っ向からぶつかり合い、刃の間で火花が散った。
ドルク・ヴュラードが、瞠目した。明らかな驚きの光が、その目に浮かんでいる。
一つには、ジークが、いきなり疾風のごとく走り込んで来たからだ。
また一つには、振り下ろした斧を弾いたジークの剣が、砕けていないからだった。
ドルク・ヴュラードは、その斧の一撃によって、最高で四人まで殺したことがある。剣と鎧ごと一人目を叩き斬り、その勢いで、横に並ぶ三人を吹き飛ばしたのだ。四人が四人とも即死だった。そのときと同じくらい、仮借のない一撃を送ったはずなのに、この、自分よりも二回り近く歳が離れたような剣士が、それを正面から弾き返したのであった。

ドルク・ヴュラードの驚きは、そのまま怒りとなり、殺意となった。
斧が、立て続けに、ジーク目掛けて振るわれた。その全てを、ジークの剣がことごとく撃ち弾く。あまつさえその刃が、ドルク・ヴュラードへと迅速に、無慈悲に襲いかかった。
周囲の歓声が、あっという間に、変貌していた。みなが、なぶり殺されるジークの姿を想像していたのだ。このジークの苛烈な応戦に顔色を変えなかったのは、ドラクロワとシーラ、そしてジークの強さを戦場で目の当たりにしている剣士団だけだった。
ロムルスでさえ、震える手で妻子を抱きながら、ジークの戦い振りに圧倒されていた。
ついに、ヴラドの民が、悲鳴のごとき声を上げた。
ジークの剣が、ドルク・ヴュラードの隙を突き、胸元をかすめたのだ。
じゃらっ。鎖がドルク・ヴュラードの分厚い胸で垂れた。鎖帷子が、肩から胸にかけて綺麗に切り裂かれたのだ。だが、ドルク・ヴュラードの顔には、いささかの恐れもない。
「聖印の剣――」
ドルク・ヴュラードの目が、鋭く、ジークの剣をとらえていた。
ジークがドラクロワの配下となった際に授けられた、紋章付きの、聖印が刻まれた剣だ。
その聖印が、鋼を剛くし、信じがたいほどの切れ味を生んでいるのである。
剣が強いのであって、ジーク自身は、ただ動きが素早いだけ――ドルク・ヴュラードは、

そう見た。そして、それまで以上に豪腕に物を言わせ、必殺の斧を猛然と振るってきた。
剣が強いなら、ジークの体力を削れば良い。それには圧倒的な力で攻め、その重圧で、精神力を消耗させるのが一番早い。さながら暴風雨のごとくに、攻めに攻めてくる。
だが――ジークに対する真の驚愕が場に満ちたのは、それからのことであった。
ジークの動きが、一向に衰えぬばかりか、ますます迅速さを増してゆくのだ。
しかも心なし、その全身がおぼろな燐光のようなものを帯びているように見える。
間近で戦っているドルク・ヴュラードには、更にはっきりと、ジークの剣の刃が、白い炎のようなものをまとい始める様子が、見えていた。
「堕気を身に帯びているのか……」
そう声に出したのはロムルスである。死の力、混沌の力が、ジークに無尽の体力を与え、その聖印の刻まれた剣に、更に恐るべき鋭利さと剛さを与えているのだ。
ロムルスの驚愕は、周囲の驚きよりも、更に深い理解によるものだった。
「あのような強烈な堕気を体に受けるとは……死が怖くないのか」
聖性を光や水とすれば、堕気は、いわば火や風だ。生命やあらゆるものを燃焼させる力であり、それが吹き荒れれば、後には燃え尽きた残骸が残るばかりである。
その力を制御せねば、その場で命を燃やし尽くし、干涸らびて死ぬだけだった。

その堕気の恐ろしさを思い知ったのが、ドルク・ヴュラードだ。
なんとその斧が、徐々に、ジークの剣にやどる堕気の影響で、脆く砕け始めたのである。
それはまさに崩壊だった。刃に亀裂が走り、鉄がぼろりと砕けた。柄に巻いた革がすり切れ、破けてゆく。そのときドルク・ヴュラードの目にやどったのは、限りない怒りと——恐怖であった。そしてある一瞬、恐怖が、怒りを凌駕した。
斧をかわしざま、ジークが、素早くドルク・ヴュラードの左腕を浅く斬ったのだ。
その傷から堕気が侵入した瞬間——傷のそばの血管が、斬られてもいないのに、ぶちりと音を立てて破裂した。周辺の皮がずるりと剝け、血の玉がぶつぶつと浮かび、筋肉が骨から引き剝がされるような痛みが、腕全体に走ったのである。
——轟！
ドルク・ヴュラードが吠えた。それまで無表情であった顔に、冷たい汗と恐怖の表情が、一面に浮かんでいる。そして、吠えながらなお、もう一方の腕で斧を振るっていた。
だが、もはやそれは勇猛の一撃ではない。ただただ痛みと恐ろしさから逃れるための、闇雲の力であった。その斧を、ジークが冷静に見極め——斬った。
斧の刃の、上半分が、綺麗に斬り飛ばされ、くるくると舞って、地面に刺さった。
そのときには、ジークの剣が、ドルク・ヴュラードの両腿を、深々と斬っている。

ドルク・ヴュラードが、ぱくぱくと口を開閉し、空気を求めて喘ぐような仕草をした。
膝のすぐ上で真横に斬られた傷が、堕気で捲れかえり、血に濡れた白い骨が現れてゆく。
その巨体から力が抜け、両脚から流れる血溜まりの中へ、どっと膝をついた。
一拍の間を置いて、ドルク・ヴュラードの口から、雄叫びにも似た悲鳴が上がった。
激痛から逃れようとする者が、息の続く限りに叫び、逃げ場のないことを呪う声だ。
その前に、ジークが立ち――ものも言わずに、残った右腕を、斬った。
ドルク・ヴュラードの、右腕の肘から先が、ほとんど切断されたようになった。
「這って生きたいか」
ぼそりと、訊いた。戦いの最初で、ドルク・ヴュラードが言ったことだった。
半ば白目を剝いた状態で、かっ、かっ、と、ドルク・ヴュラードが、喉を鳴らした。
言葉を放とうとするのだが、激痛で、声にならないのである。
その顎の下に、すっとジークが剣尖を差し入れ、言った。
「今まで何人、こういう風に殺してきた」
ドルク・ヴュラードが、歯を食いしばった。質問に答えられるような状態ではない。その口に、大量の泡が零れた。もはや、痛みで失神寸前だった。
「ジーク！」

ドラクロワの大喝が飛んだ。
はっとジークが剣尖を離し、慌てたように、相手から後ずさった。
ドルク・ヴュラードが、気を失い、どさっと横倒しになった。
「ジーク――」
柔らかな声とともに、白い手が、ジークの剣を握る右腕に、そっと触れてきた。
そちらを見ずとも、誰であるか分かった。癒しの聖性が、ジークの戦いの気配と堕気を、鎮めてくれた。ジークが目を閉じると、その優しい手が、静かに離れた。
「戦いの儀は、これにて終了した。儀における勝利者を、ここに讃える――」
ロムルスの声が、遠くで聞こえた。
再び目を開くと、懸命にドルク・ヴュラードの傷を手当する、シーラの姿があった。
その向こうに眼差しを移せば、蒼白となって沈黙するヴラドの民がいる。
ふいに、ドラクロワがやって来て、ジークの背を叩いた。
「良くやった。ヴラドの民は、もはや我らを弱者とは見ない。和平は進行する」
そのドラクロワの言葉で、急に、泣きたくなるほどの安心がジークを襲った。
「強かった……」
素直に、本音を吐いた。強敵だったからこそ、ああまで容赦無く、相手の体も心も追い

つめねばならなかったのだ。そうせねば、やられるのは自分だという恐怖があった。目を閉じれば、凄まじいまでの戦斧の残像ばかりが、瞼の裏に浮かんでくる。実際、ジークはそれからしばらく眠るたびにドルク・ヴュラードの斧が迫る夢を見た。青白く光る斧が自分の腕を斬り、脚を斬る。そして最後に首を刎ね――そこで、はっと目が覚め、慌てて手足が無事であることを確かめるのが、連夜、続くほどだった。

「最後の血……」

ぽつんと、ジークが呟いた。心の底から、そうであって欲しいと思った。

そしてその思いを、他ならぬドルク・ヴュラードが、打ち砕くこととなった。

公開試合を経て、和平交渉は、一挙に進展した。ヴラドの民のほとんどが、血みどろの闘争よりも、利益が保証された和平へ傾いたのである。ドルク・ヴュラードの敗北の姿は、闇雲の闘争と、その果ての無惨さを、十分に示してみせたというわけだった。

ドルク・ヴュラードは、シーラの癒しと自身の体力によって急速に回復したが、部屋から一歩も出ぬまま、ひたすら呆然としているという。

和平への道が具体的に示されるにつれて、ドルク・ヴュラードの存在は影を潜め、むしろヴラドの民の中で、その敗北を喜ぶ声が、多く出るという有様だった。

だから、ドルク・ヴュラードが突如として兵を率いて聖地に攻めてきたとき、真っ先に恐慌に陥ったのは、ヴラドの民だった。和平交渉のまっただ中での挙兵である。交渉に臨んでいるヴラドの民の面々が、即座に皆殺しにされていてもおかしくなかった。
「あなた方と、かの兵とは、全く無関係だ」
ドルク・ヴュラード挙兵の報を受けるや否や、ドラクロワは、すぐさまそう明言した。
「あれは、この地に攻めてきた、ただの盗賊である」
もはや攻めてきた者たちを、兵とも呼ばない。ただの賊であり、敵でさえない。
そう断定したところに、ドラクロワの熾烈な怒りがあった。
「耕地が与えられなければ、略奪が常套手段となる……。この地の歴史を考えれば、ドルク・ヴュラードのような戦士を慕う兵が多いのは理解出来る……」
ドラクロワは、そう言いつつも、鋭くジークに命じた。
「捕虜は不要だ。これ以上、和平交渉を長引かせれば聖法庁の中の反対派が動き出す」
一瞬、ジークは啞然となった。捕虜は要らないということは、全滅させろということだ。
明らかに、ドラクロワのこれまでの戦い方とは一線を画した命令だった。
そしてすぐに、ドラクロワとドルク・ヴュラード、両方の意図を察した。
ドルク・ヴュラードはただ死にたいだけなのだ。戦いの中で死ぬためだけに兵を挙げ、

聖地を焼き払い、自分も民も何もかもを、滅びの中に叩き込みたい。ただそれだけだ。
和平が成立すれば、自分たちの存在意義が無くなると信じるヴラドの民の戦士もまた、ドルク・ヴュラードと同じ気持ちだろう。修羅の恍惚の中での死が、彼らの望みだった。
既に滅びの中に半ば身をひたしたような者たちを捕虜にし、説得するには多大な労力が要求される。その労力を支払っている間に、より厄介な敵が動き出してしまう。
聖法庁そのものである。蛮族との共存など言語道断だと思う者が、聖法庁には多数、存在するのだ。彼らが結束して妨害を始める前に、何としても和平を固めねばならなかった。
「ここで容赦するな。お前の力で即座に撃滅しろ」
ドラクロワは、はっきりとそう言った。
「そしてそれを今度こそ本当に、最後の血とする——私の命に換えても」
ジークはその命令とともに、凄烈な戦いの気配をみなぎらせて出陣した。
剣士団に敵兵団を各個迎撃させながら、自身は真っ直ぐ、ドルク・ヴュラード率いる騎兵の一団の前に立ちはだかった。ただ一人の、軍団として。
ドラクロワの命令が無い限り、ジークは滅多に〈招く者〉の力は使わない。使えば確実に、相手を残らず殲滅することになるからだ。
街を守るようにして立つジークに、ドルク・ヴュラードが、騎兵を率いて押し寄せ、

「勇士の名誉に懸けて、貴様を、地面に這わせてくれる！」
そう叫んだのを聞いた瞬間、ジークの中で、一切の容赦が、今度こそ消えていた。
何が勇士の名誉か。戦う力も持たぬ者まで道連れにして滅ぼうとする者が勇士か。
燃えさかるような怒りを抱くジークの周囲を、ごうごうと風が吹き、慟哭の声を上げた。
争乱の犠牲になった無数の魂が、咆吼を上げているのだ。その死者の怒りにこそ真に民の区別はない。嵐のごとき堕気の風の中、高々と掲げた左手にまばゆい雷花が迸った。
「悲憤の魂よ、地刻星の連なりの下、巌魔へイトレッドとなりて我が敵を払え！」
烈声を上げ、手の平を大地に叩きつけた。地面から轟然と青い稲妻が吹き荒び、巨人のごとき魔兵が現れる。実に、手足が馬の胴ほどもあり、ドルク・ヴュラードが子供に見えるほどの巨体である。そしてその全ての魔兵が、手に武器を持っていない。
「山羊座の陣！」
ジークの言下、巌魔の大群が、地響きを上げて扇状に展開した。
瞬く間に両軍が衝突し、巌魔の素手の手が、騎兵を殴り殺し、馬ごとなぎ払った。
異形の軍団が突然現れたことに驚愕した騎兵は、たちまち陣形を乱し、勇士の誇りも名誉も無く、粉砕された。その混乱の中を、勇猛果敢な一騎が駆け抜けた。
「我が名は、ドルク・ヴュラード！　滅びにて栄誉を得る者だ！」

その馬の首を、巌魔の拳が真っ向からへし折った。ドルク・ヴュラードが宙を跳び、着地するなり、そのまま長剣を掲げてジークへ驀進した。

ジークもまた、真っ向からドルク・ヴュラードの剣を弾いている。そのまま立て続けに、何合となく打ち合った。だがこのときは、ジークが不利だった。魔兵を招き出している分、力が減殺されるのだ。特に左腕は、魔兵を招き出しているため、ほとんど使えなかった。

だが、魔兵の助けを借りようとは考えもしない。ジークがその手で戦い、倒すべき相手だった。その懸命の戦いの中、ジークが僅かに劣勢となったかに見えたそのとき、ふいにドルク・ヴュラードの左手に、隙が生じた。ジークは無我夢中で、その左腕を斬った。

ドルク・ヴュラードの左腕の肘から先が綺麗に消失し、鮮血が弧を描いて噴き出した。

だがそのとき、ドルク・ヴュラードが浮かべたのは、紛れもない笑みであった。

威圧の笑みでも、暴虐の笑みでもない。不思議なことに、それはジークの目に、満足の笑みと見えた。そしてその笑みのまま、ドルク・ヴュラードは剣を振るってきた。

騎兵が、魔兵によってあらかた叩き潰された頃、二人の戦いが決着した。

ドルク・ヴュラードの剣が、半ばから折れ砕けたのだ。それでもなお半分になった刃を振るって戦い、その剣が更に鍔元から折れると、腰から短剣を抜いて挑んでくる。

出血で紙のように蒼白となった顔で、ドルク・ヴュラードは憑かれたように戦い続けた。

そしてジークがその右腕を切り飛ばし、渾身の力を込めて、その分厚い胸に、必殺の剣を突き込んだとき――ドルク・ヴュラードは、なんとそのまま真っ直ぐに踏み込んできた。
刃が、一気にドルク・ヴュラードの体を貫き、その胸が、鍔元に叩きつけられた。
その瞬間、かっと開かれた口が、ジークの首に迫っている。堕気を身にまとったジークに両腕を斬られ、胸を貫かれた状態から、この男は、首の頸動脈を噛み切りにきたのだ。
一度、堕気のもたらす苦痛を味わっているため、慣れが、それを可能にさせたのである。
悪夢のような男であった。その歯が、咄嗟に首を庇うジークの左手首に、食いついた。
鉄片を打ち付けた手甲が食い破られ、ジークは戦慄して剣を手放し、逃げた。
ドルク・ヴュラードは、満足げに笑んだまま、胸を剣に貫かれ、立っていた。
かわしたのではない。この男から一瞬でも早く遠ざかりたくて、逃げたのだ。
笑みに吊り上がった口が、食い破った手甲の破片を噛んでいる。ジークに戦慄を与えられたことに、心底、満足している顔だった。その口から手甲の破片が落ち、
「我が子……皆の家族……。最後の血だ……」
笑みのまま、どうっと地響きを上げて倒れ伏した。
数瞬ののち、ジークは、この男が、戦いの最中にわざと左腕を斬らせたことに気づいた。
「対等に、戦うために……？」

恐る恐る、訊いた。だが、ドルク・ヴュラードはもう答えない。

その背から、鋭い刃が、墓標のように突き立っていた。

血まみれの剣を手に、悄然と歩むジークを、青ざめた顔のシーラが出迎えていた。

シーラの表情に、強い恐怖の色があるのを見て、ジークは足を止めた。

「終わった……みんな死んだ」

ぽつっと告げた。シーラが哀しい顔になった。その口元に当てた白い手が震えていた。

そういえば、〈招く者〉の力を、まともにシーラに見せるのは、これが初めてだった。

シーラがそれを見たことは何度かあったが、いずれも後方の宿営からだ。こんな目と鼻の距離で使ったことはない。怖がるのも当然だ。そう思ったとき、ドルク・ヴュラードの死に様が脳裏に浮かんだ。我が子、皆の家族――あの男はそう言って死んだ。その思いが、急に胸に迫った。あの男たちは、自分たちが和平に邪魔なことを知っていたのだ。

聖法庁の民の中には、あの男たちに略奪され、殺された者も沢山いる。聖法庁がそのことを言い出せば釈明の余地は無い。必要な略奪であったとしても、民の死は事実だ。

和平においては、あの男たちはどうあがいても罪人であり、邪魔者だった。

ならば戦いで死に、自分たちの存在ごと禍根を消すしかない。実際ドラクロワも言った

ではないか。あの男たちは、もはやヴラドの民とは関係無いと。あの男たちの家族も、肩身の狭い思いはするかもしれないが、危険な存在として排除されることは、もうない。
彼らは、死と引き替えに、自分たちの家族のその後を、頼んだのではないか——
「最後の血だ……」
ジークが呟いた。それがドルク・ヴュラードの最期の言葉だ。あの男がそう言ったのだ。
そう思いつつも、かぶりを振った。彼らの死に様が見事だとは、誰も思うまい。
「……みんな死んだ」
それだけが事実だった。それまで必要とされた戦士たちが、もはや無用なものとして棄てられた——ただそれだけのことだった。
「ジーク……」
ふと気づけば、シーラが、すぐそばにいて、その手を差し伸べてきていた。
そのシーラの頬を、ひどく透明な涙が、音もなく流れ落ちてゆく。
「泣かないで……」
そう言われて、ジークは、自分もまた、泣いていることに気づいたのだった。
「俺が、怖いか……」
震える声で、ジークが、訊いた。

シーラはかぶりを振り、ジークの肩に両手を触れ、無言で抱き寄せた。
「あの男は……ドルク・ヴュラードは、みなに怖がられて生きてきた……」
そう呟くジークの頭を、シーラの右手が、柔らかく引き寄せ、肩に抱いた、
「民が、それを求めたからだ。強い戦士が必要だったからだ。だけど棄てられた」
「あなたは良くやったわ、ジーク……」
「俺が、怖いか」
「あなたは、あの男とは違うわ……」
「違いはしない」
「ジーク……」
「何も違わない」
シーラは、ただ黙って、ジークを優しく抱き留めてくれた。その聖性が——そして存在が、ジークの中で荒れ狂う心と堕気を、ゆっくりと宥めてゆく。
「葬ってあげましょう、ジーク……。死んだ戦士たちのために、祈りを捧げましょう。彼らの流した血が、最後の血であることを願って……」
ジークは、シーラの細い肩に、血と涙に濡れた顔をうずめながら、何度もうなずいた。

# 第三章　もう一人の自分

ヴラドの民の戦士たちが、壮烈な死を迎えてのち、ついに和平は成った。

ロムルスの妻イルミナが亡くなったのは、それから僅か数年後のことだ。そのときはヴラドの民も聖法庁の民も区別なく葬儀に参列し、改めて共存の誓いが立てられたという。

またドラクロワ剣士団の一部は、付近の砦の幾つかに駐屯し、ドラクロワやロムルスの要請で動き、やがて独立した。その一つが、ジークが最初に立ち寄った砦の騎士団である。

「……この聖地は、俺たちにとって、最初の大きな成果だった」

ジークが、ぽつりと湖に向かって囁いた。

「そうだったはずだ、ドラクロワ……」

その途端、湖の水面に、花の下に埋もれた亡者達が一斉に手を伸ばすような気持ちに襲われ、ジークは静かに目をそらした。そのまま、厳しい表情で、きびすを返す。

そしてそのまま真っ直ぐ森に入った、瞬間――

ジークは、本能的に異変を察し、咄嗟に、後方に跳んでいた。

つむじ風のごとき跳躍のさなかに、担いだシャベルの柄を、眼前にかざしている。
その、シャベルの柄に、何かが当たり、
こーん、
と、ジークの目の前で、乾いた音を立てて、弾かれた。
手の平に、すっぽり収まるほどの、小石──それが、ジークの跳躍を正確に追って、顔面へと、どこからともなく飛んで来たのであった。
ジークが、着地した。すぐさま、今度は、右手へ跳んでいる。
着地地点を読んで、小石が二つ、更に速度を増して、飛んで来ていたのである。
一つは頭、一つは胸へ──正確に、急所を狙っていた。
その二つの小石を難なくかわし、ジークが、地面に降り立った。
同時に、くるりとシャベルを回転させ、その歯を、右斜め後ろの地面に突き立てている。
どん──！
さほど力を入れたようにも見えないのに、シャベルの歯が、根本まで埋まった。
その、シャベルが地を穿つ音に、弾かれるようにして、ジークの背後に接近しかけていた黒い影が、素早く、跳びすさったのであった。
その黒い影が、小石を放った者であることを、ジークは既に察している。

小石を放ち、二度の跳躍をさせた上で、ジークの背後を取ろうとしたのだ。
小石は、全て違う方向から飛んできていた。周囲を音もなく迅速に動き、次々に小石を放つことで、何人もの人間が、あちこちから小石を放ったように見せかけたのである。
だが、実際の相手は、その、黒い影一人だけであった。
「どういうつもりだ」
ジークが、黒い影に、半ば背を向けたまま、言った。
一瞬にして剣を抜き放つ用意があったが、そうするには飛んできたものが可愛すぎた。
何の殺気もない、ただの小石なのである。
だが一方で、何の殺気もないことがジークの警戒を呼んだ。殺気がなければ、それだけ相手の存在や意図が読みにくくなる。暗殺者としては、そちらの方が格上だ。
「……あなたが森に入ったとき、すぐに分かった」
黒い影が、何の感情もこもらない声を放った。
「私は、あなたを、試したかった……」
同時に、黒い影が、するすると遠ざかり、ジークの警戒から逃げるようにした。
ようやく、ジークが、完全に背後を向いた。
「トール・ヴュラード――」

そう、黒い影の名を、呼んだ。
「何を、試したかった？」
黒い影――トールは、覗き込むような目で、ジークを見つめ、ぼそりと告げた。
「父を殪した、あなたの強さを……それで、つい手が出ました。お詫びします」
すうっと頭を垂れた。言葉はしおらしげだが、顔は何の表情も浮かべていない。
「詫びなくていい」
そのトールに劣らず、淡々とした声音で、ジークが言う。
「いつでも試せ」
無造作な言だった。絶大な自信であり、トールへの厳しい叱責だった。
トールごとき、いつ襲われてもあしらえるという、侮辱すれすれの言葉なのである。
顔を上げたトールの眉間に、うっすらと、皺に似たものが浮かんでいた。
「良いのですか……」
そろりと、音もなく白刃を抜くような声音だった。
「構わん」
ずぼっ。ジークがシャベルを抜き、くるりと回して肩に担ぎ、鋭くトールを見た。
「ただし、俺も殺されるわけにはいかん」

トールが、この地でどんな役目を負っているか、正確に見抜こうとする目だった。
「殺すなど……」
トールは、かぶりを振った。抜いた刃を、正気に返って、慌てて放り出すのに似ていた。
「ただ確かめたかった……そして、あなたの強さに満足しました。他意はありません」
釈明するような調子だった。相手が一枚上手であることを野性的な勘で悟ったのだ。
そうした勘でトールはこれまで生き残って来た。手強いとみればすぐに退き、新たな機会を待つ。そういうところも、つくづく、戦士ではなく暗殺者に向いている青年といえた。
「私は、あなたを恨んではいません。むしろ、感謝しております」
真摯な口調で、トールは、言った。だがジークは、むしろ厳しい顔で聞き返した。
「感謝――？」
「父、ドルク・ヴュラードの死を喜んだのは、あなた方だけではないということです」
「喜んだ……」
「はい。平和を望むみなと同じように、喜びました。あなたも、そうでしょう」
ジークは答えない。ほとんど完全にトールの言葉を無視して、話題を変えた。
「俺の従士を、この辺りで見なかったか」
「はい。大変、お世話になっております」

このトールの返答はジークの予想を超えた。訝しげに眉をひそめるジークに、トールは、レオニスの前にノヴィアが現れてからの経緯をかいつまんで話した。
「ノヴィア様と出会えて、レオニス様は、ことのほか喜んでおります」
　黙然として喋ろうとしない――とロムルスに言われたトールが、今、ジークを前にして、興奮したように饒舌になっていた。妙にジークを慕うような素振りさえ見られた。
「彼女が現れただけで、レオニス様がお歩きになって……。まさしく〈見守る者〉……まるで何か不思議な力が、ノヴィア様の眼差しにはあるように思われました」
　トールは言うが、ジークは、既に、だいたいのことは察している。
　ノヴィアは眼差しの力など全く使っていないはずだった。ノヴィアの幻視の力には、人間の脚をどうにか出来るような力など無いのである。
　ノヴィアが、レオニスの前に立ったのは、単に目標を縮めさせるためだ。
　恐らくレオニスは自分の限界を遥かに超える目標を立てて七転八倒していたのだろう。
　ノヴィアはそれを見抜き、あえてレオニスの前に立って、努力で何とかなる距離を示したのである。それによってレオニスに、最後まで倒れなかったという自信を与えたのだ。
　だが、そうしたことをジークは一切口にせず、黙ってトールの話を聞いていた。
「そろそろレオニス様のところへ戻らねばなりません。一緒に参りませんか」

ジークはうなずき、トールと肩を並べ、湖畔へ向かった。
ノヴィアたちがいるところへ近づく寸前、ふいに、ジークが、ぼそりと呟いた。
「俺は、誰の死も、喜んだりはしない」
先ほどの、トールの、父の死を喜んだのだろうという言葉への、返答だった。
トールが歩みを止めた。いきなり頬を引っぱたかれたような、驚いた顔だった。
かと思うと、すぐにトールの顔から、あらゆる表情がすうっと消え去り、
「私も、そうです――」
そう返しながら、ジークの後を追った。
「父が死んで以来、どこの誰が死んでも、何も感じなくなりました」
何の抑揚もない声で、トールは、そう告げていた。

「あっ、狼男と……、う……トールだ」
アリスハートが声を上げた。途中で言葉につまったのは、咄嗟にトールのことを、影法師さん、と呼ぼうとして、違う渾名を考えるという約束を思い出したからだった。
「ジーク様……？　どうしてここへ？」
ノヴィアがぱっと立ち上がり、ジークとトールがともにやってくるのを出迎えた。

たった今、レオニスから、ジークがこの地で果たした戦いのくだりを聞き終えたばかりである。ジークのいないところで過去を聞いていた後ろめたさが急に湧いていた。また、
「あ……私、お役目を……その、決して怠けていたわけでは……」
この辺りを見ておけ、というジークの命を思い出し、慌てて取り繕うが、
「後で聞く。ご苦労だった」
ジークの信頼のこもった言葉に、たちまち、ノヴィアが喜びに顔を赤らめる。
「はいっ」
その、ノヴィアの様子を、レオニスが、呆気に取られたように、見つめていた。
「レオニス・ジェルミナル――従士が世話になったようだ。礼を言う」
レオニスの、ぽかんとした目が、ノヴィアから、のろのろと、ジークを向いた。
「いえ……こちらこそ、任務を妨げていなければ良いのですが」
呆然とした声で言った。自動的に言葉が出ている感じだった。
「レオニス様」
トールが、すっとそばに寄る。
「あ……ああ、頼むよ、トール」
トールがレオニスの体を持ち上げ、車椅子に乗せようとする。

それを、ジークが、ちらりと見た。その瞬間だった。ジークに見られているということに対し、レオニスの中で、猛然と抵抗の気持ちが湧いていた。

「い、いい……自分で乗る」

「あ……レオニス様？」

いきなりトールから身を離し、自分の脚で立とうしたが、たちまち平衡を崩している。乗ろうとした車椅子ごと、けたたましい音を立てて転倒するレオニスに、

「レオニス!?」

「ちょ、ちょっと、大丈夫ぅ？」

ノヴィアとアリスハートが慌てて近寄る。だがそれよりも早くジークが動いて、

「無理をする必要はない」

レオニスを抱き上げ、素早く怪我が無いのを見て取り、トールが戻した車椅子に乗せた。

レオニスは、顔を真っ赤にしてうつむき、頬の泥を、拳で拭っている。

ノヴィアが心配そうに覗き込むが、レオニスは顔を背け、

「無理じゃない」

「レオニス──」

「無理なんかじゃない」

硬い表情で言い放ち、きつく尖った光をやどした目を、ノヴィアに向けてきた。
「そうだろう、ノヴィア」
レオニスは、追いつめられたような、ひどく傷ついた目をしていた。
だがそのとき、ノヴィアには、そもそもなぜレオニスが傷ついたか分からず、
「はい……」
ノヴィア自身も、どこか悄然として、そう返すしかなかった。
レオニスが、固く握った拳で、また、頬についた泥を拭った。
「……無理なんかじゃないんだ」
震えを帯びたような、小さく、か細い声で言った。

聖堂の食堂を借りて食事を終え、ジークが薬湯に口をつけていると、
「私、何か悪いことをしたのかな……」
ぽつんとノヴィアが呟いていた。アリスハートが呆れたように手を振った。
「そんなことないわよぉ。考えすぎだってばぁ」
だが城に戻るまで、うつむきっぱなしだったレオニスの顔を思い出すと、ノヴィアは妙

に気の晴れない思いになる。レオニスの傷ついた感情がそのままノヴィアに宿って、ちくちくと心を苛むようでもあった。
ノヴィアであれば、心が弱ったときはまず行動に出て気を晴らす。アリスハートがいつも一緒にいてくれる安心感もある。だがレオニスは何も出来ず、トールに車椅子を押してもらうしかない。せめて城の中で、夢中になれることを持っていてくれればと思う。
「なーんで、そんなに気にすんのさぁ」
アリスハートには、今日会ったばかりの相手をこれほど気にかける方が驚きだった。
「何だか他人に思えなくて……もう一人の自分を見ているような……」
「あの子がぁ？　なんでぇ？」
「目が見えなかった頃の私に、よく似ている気がするの……」
かつて暗闇に覆われ、先が見えず、孤独で心が冷えきり、母の愛情も信じられなかった——そういう自分が、鏡映しになって目の前に現れたのがレオニスのような気がするのだ。
そう告げるノヴィアに、ジークがぽつりと訊いた。
「レオニスが歩くのを、助けてやったそうだな」
「は、はい……でも、それほど助けたというわけでは……」
ジークが察した通り、ノヴィアは別に眼差しの力でレオニスを助けたわけではなかった。

「ただ、本当に見えたんです。どうすれば、どのくらいレオニスが歩けるかが……」
それは医術的な見識ではなく漠然とした理解であり、それゆえにレオニスの感情も十分にわきまえた上での処置であるといえた。何よりそうしたことは、これまでノヴィア自身がアリスハートやジークから与えられてきたものなのだ。だが――
「でも、あれ以上は……」
同時にノヴィアには、今のレオニスの限界も見えていた。とても十歩も二十歩も進める脚ではなかった。平地ならまだしも、階段を上ることも不可能に近い。
「どうにかならないものでしょうか……」
頑張っても、どうにもならない――そういう現実に常に襲われているレオニスの心が、ひしひしと自分の心に伝わってくる気がする。だがそこで、ジークは言った。
「しばらく滞在する。任務の合間に、お前が、歩く訓練を手伝ってやれ」
「よろしいのですか？」
「無理をさせるな」
このままではレオニスが心を荒れさせ、無茶苦茶をする可能性があった。下手に脚に負荷をかけすぎては、自分から一歩も進めぬ体にしてしまうかもしれない。
「継承式の式次第を変える必要はないことを、教えてやればいい……」

それが、何よりレオニスの心を守るための処置だったし、確実に可能なことだった。
「歩けなくとも、この地の後継者としての素質は十分にある」
ロムルスも、その点は認めているのだ。むしろそれゆえ過大な期待を寄せ、覇気や勇猛さを求めてしまうのだろう。ロムルスが、それだけ我が子を頼りにしている証拠だった。
そのことを、ジークはジークで、今日のロムルスとの会話で察していたのである。
ロムルスもまた、誰かに支えて欲しいのだ。そして我が子に支えを求める自分を押さえつけようとして、かえってレオニスを傷つける言動になってしまうのである。
ロムルスにもどうしようもないのだろう。だからロムルスは早く隠者となって、息子から身を引くことを考えている。その後は、レオニス自身が、何を示せるかだった。
「一歩ずつ進むことの大切さを、領民に教えられる領主になればいい」
ジークは言った。レオニスがそうなれば、同じように苦しむ者たちは多大な勇気を得る。何より、勇猛さとはまた違う価値を示すことこそ、真に平和の時代が来た証拠だった。
レオニスが領主になることには、むしろ計り知れない価値があるのだ。
ジークの言を聞くうち、ノヴィアの顔に、たちまち花の咲くような笑顔が戻った。
「そう、レオニスに言います。ありがとうございます」
一気に心が晴れるような気分だった。この思いを何としてもレオニスに伝えたかった。

「世の中、悪いことばっかりじゃないのに、あの人たち、妙に屈折してるのよねぇ」
アリスハートが、しみじみと言う。珍しくジークに全面的に賛同していた。
「影法師……いやいや、トールったら、お父さんを狼男に斬られて、感謝するなんてさ」
アリスハートはアリスハートで、妙にあの影法師の青年を気にかけているのだった。
「俺がトールの父を斬ったことを聞いたのか？」
ジークが口を挟んだ。ノヴィアが慌てて、両手を突き出すようにして、
「け、決して、詮索するつもりでは……。ただ、ジーク様の働きを理解したくて……」
怒られるのではと思わず身を縮めるが、ジークは一向に気にした様子もなく、
「どう見た？」
逆に訊いてきた。ノヴィアはちょっと目を丸くしたが、すぐに質問の意図を察した。
「レオニスも、トールさんも、ジーク様を敵とは思っていないようでした」
むしろ慕っているとさえ言えた。それこそ、レオニスもトールも、ともに旅に出ようと言えば喜んでついて来そうな様子さえあった──というのがノヴィアの理解である。
ジークはただ静かにうなずいている。ノヴィアは姿勢を改めると、素直に言った。
「ジーク様のことをレオニスからお聞きして、ますますお手伝いしたいと思いました」
それはジークの過去から現在に続く戦いに、自分も参加するということだ。

ただ敵を撃滅するのではなく、多くのものを守るための戦いだった。
「今、この地で起こっていることが何かはまだ分からない――だが妙な気配がある」
そこでノヴィアも、街を見ていたときに感じた違和感を思い出し、
「私、見ました。湖に向かって、沢山の道がのびているんです」
ここが従士としての働きのみせどころとばかりに、具体的に、どういう道がどのようにのびているかを詳細に告げた。ジークはその一つ一つの報告に、丁寧にうなずき返し、
「よく見たな」
「は……はいっ」
「それがどういう意味を持つかはまだ分からん。また色々と見ておけ」
「はいっ」
「万が一のときの策を、今から伝えておく」
ノヴィアの顔がさっと青ざめた。それはノヴィアにとって最も不吉な言葉だった。
「は……母も、そんな風に言って、私を置いて……」
死んだ、という言葉が、喉の奥に引っかかって出て来なかった。
「心配するな。確実に生き残るための策だ」
まるで天気が悪いときのために、傘を買っておく、というような言い方である。

その淡々としたジークの口調に、ノヴィアは、泣きそうなくらい安心していた。
「手数が足らない場合、チビにも働いてもらうことになる」
「チ、チビじゃないっつーの！……って、あらぁ、今回は、あたしも働くのぉ？」
「場合によってはだ」
「では、ジーク様は、この地が戦乱に関係していると――？」
「そうでないことを願っている……」
ジークはそう言いつつ、その万が一のときの方策を伝えた。
やがて、自分たちの部屋に戻るため退室するノヴィアに、ふと、ジークが訊いた。
「……俺を怖いと思うか」
ノヴィアが目を丸くし、アリスハートがきょとんとなる。
「確かに……ジーク様の力は、恐ろしいです」
そう告げながらも、ノヴィアは、その宝杖を握ってみせ、にっこりと笑っている。
「でも、ジーク様は、怖くありません」
それがノヴィアの知る教えだった。力とは杖のようなものであり、それをむやみに振るえば脅威となる。そういう意味で、ジーク自身は、ノヴィアにとって決して脅威ではない。
「ま、狼男も、もー少し目つきが良くなると、人に怖がられなくてすむわよぉ」

アリスハートが親切めかして言い、ふむ……とジークに思案させたものだった。
修道院の一室に戻るなり、ノヴィアは、ことんとベッドに横になった。
「早く大人になりたいなぁ……」
毛布に横顔をうずめながら、どこかすねたような声を上げていた。
「あらぁ、またそのことぉ？　ノヴィアもせっかちねぇ」
アリスハートは気楽な調子で、ベッドのそばの小さな文机の上に舞い降りている。
「だって……」
ノヴィアは、ますます、すねたような声で呟いている。どうしようもないのは分かっていたが、それでも後から後から気持ちがこみ上げてきて、言葉となって零れてしまうのだ。
「早く、朝にならないかな……」
いきなり大人になるのが無理なら、せめてもっと早く夜が明けてくれないものだろうか。
今は、本来ならば、従士としての役目から離れ、一日のうちで最も休める時間である。
その自由な時間を、もっと楽しめばいいのだが、それは同時に、従士ではない自分が顔を出すということだった。その、従士ではない自分が、急に色々なことを考え出すのだ。
「シーラさんって、どんな人なんだろう……」

その従士ではないノヴィアが、アリスハートにも聞こえないような声で、そっと呟く。
過去を話すときもジークはたやすく内面を吐露しない。ただノヴィアが漠然と推し量るばかりである。そしてジークが抱く、シーラという女性への思いをうすうす察するにつれ、どれだけ頑張っても頑張りようのないものが目の前に迫ってくる気がする。
その迫ってくるものから逃れるようにして、ちらりとアリスハートを見やると、
「うーん……なんかしっくりこないのよねぇ。影法師、影法師……それ以外の渾名かぁ」
などと、しきりにトールの渾名を考えている。
「なーんか、変な約束しちゃったわぁ。渾名を真面目に欲しがるなんて変な人よねぇ」
そう言いつつも案外、真剣な顔である。ノヴィアは、アリスハートを邪魔する気にもなれず、沈み込むような思いにとらわれたまま、ぼんやりと目を宙にさまよわせた。
「ジーク様……今、何してるんだろう」
呟きつつも、万里眼でジークのいる場所を見ようとはしない。そんなことをすれば、余計に、自分が今ジークと一緒にいないことが、ひしひしと感じられてしまうだろう。
ふうっと溜息を零し、目を閉じた。その口の中が、妙に苦い気がした。
酒に口をつけたときの苦い味の記憶が、急にまた、甦っているのだった。

翌朝、ノヴィアたちは、ジークと朝食を終えると、午前中かけて街を見て回っている。昼に聖堂でジークと待ち合わせ、昼食を摂りながら街の様子について話し合ったが、幾つかの道が湖につながっているということ以外に成果はなかった。
午後になってから、ノヴィアは湖へゆき、そこでレオニスと再会している。
レオニスは、車椅子に座り、トールとともに、太陽の光がきらめく湖面を眺めていた。
湖には、川から流れてきた魚が棲み、それを獲るための小さな漁船が浮かんでいる。
聖性に満たされた、底の深い湖であった。ノヴィアの万里眼をもってしても、たやすく水底の様子を見渡すことが出来ない。それだけ巨大な湖であったし、聖性のほのかな輝きが、半ばノヴィアの視界を遮っているのだ。ノヴィアが湖の底を見ても、ただぼんやりと、昔の建物の亡骸の輪郭が、墓標のように並んでいるのが分かるばかりである。
ノヴィアが近づくと、既に気づいていたのか、レオニスが、すっと車椅子の車輪の外輪に手をかけ、自分の腕の力で回し、ゆっくりと体の向きを変えた。
「やあ、ノヴィア」
屈託のない笑顔が、ノヴィアを迎えた。
「こんにちは、レオニス」
ノヴィアも、レオニスの明るい表情にほっとして、彼らのいる場所へ歩んでいった。

トールは相変わらず無言で、何の気配もなく立っているが、アリスハートが飛んできて、
「元気ぃ、トール？」
訊くと、小さくうなずき返してきた。
「あなたの渾名、まだ考え中なのよぉ。そのうち考えつくと思うんだけどぉ」
「はい」
「ま、もうちょっと待っててね」
「楽しみにしています」
何の抑揚も無い声の底に、妙に本気で期待しているような響きがあった。
「本当に、美しい湖ですね」
ノヴィアが、湖面に目を向けながら、言った。
「澄んだ鏡――」
レオニスが、同じように湖を見ながら、その名を呟く。
「あの湖の底には、怪物が眠っていて、いつかこの世を滅ぼすために現れるのさ……」
「この地の伝説ですね。ジーク様から、聞いております」
「澄んだ鏡の向こうで眠るもの――ときどき、あの湖の底には、もう一人の自分が眠っていて、僕はそいつが目覚めて現れるのを、ずっと待っているような気がする」

「もう一人の自分——」
ノヴィアは、何となく、神妙にその言葉を口にした。
「結局、現れたのは怪物じゃなくて君だったけれどね、ノヴィア」
レオニスが肩をすくめてみせるのへ、ノヴィアが、くすっと笑った。
「怪物の方が、良かったですか？」
「さあ——」
レオニスは、冗談とも本気ともつかぬ調子で返し、
「でも、君が現れてくれたお陰で、継承式の式次第を、変えずに済みそうなんだ」
「あなたの持っている、もともとの力です、レオニス」
「それを正しく使えるようにしてくれた。限界を教えてくれたんだ」
レオニスが真摯にノヴィアを見つめた。限界を遥かに超えた目標に対する無茶を、きちんと認めている顔である。ノヴィアは、この少年の聡明さに、正直驚いた。
「それをご自分の口から言えるあなたを、凄いと思います、レオニス」
途端に、レオニスがびっくりしたようになって顔を伏せた。照れたのだ。そしてすぐに顔を上げ、真っ直ぐノヴィアを見上げたのは、紛れもなく、若い誇りの表れだった。
「君を待っていた。歩く練習をしたいんだ。もしよければ君に付き合って欲しい。君の目

で、僕がどこまで歩けるか、見て欲しいんだ」
ノヴィアにとっては、実に嬉しい言葉である。断る理由などあるはずもなかった。
「一緒に頑張りましょう、レオニス」
まるで可愛い弟を励ますような気持ちで、ノヴィアは、言った。

以来、ノヴィアたちは、午後の数時間を、毎日レオニスたちと過ごすようになった。
レオニスが懸命に自分の脚の力を確かめ、それをどうにかして伸ばそうとするのを、ノヴィアが見つめ、漠然と感じられることを告げる。力の入れ方や、歩き方次第では、より容易に体が持ち上げられるのだ。それらを一つ一つ試し、何度も繰り返す。
一方ジークは、この聖地に対する疑惑を抱きつつ表情には出さず、連日、かすかな違和感を頼りに、街を巡察している。だが、この聖地が、各地の争乱を助長している確証はどこにもなく、アリスハートなどはもはや少しも疑っていない。
「別に、なんにも無いんじゃないのぉ。平和なもんよねぇ」
「だが逆に、この地が争乱に加担していない証拠もない」
「狼男も、疑い深いわねぇ……ま、あたしは毎日楽しいから良いんだけど」
懸念があるとすれば、トールの渾名をまだ考えついてないということだけである。アリ

スハートはどこまでも気楽だった。
「申し訳ありません……。もっとしっかり辺りを見ます……」
ノヴィアは多くの時間をレオニスと費やすようになっていた。継承式が近いせいで、レオニスが支えを欲しているのだ。だがジークの任務もある。何とも心苦しかった。
「お前は、レオニスについていてやれ」
「でも、ジーク様……」
「レオニスはこの地の未来だ。それを助けるのも大事な仕事だ」
「は……はいっ」
レオニスが領主となることが、この聖地の新たな進路となる――それこそ、今の段階ではっきりと目に見えている真実だった。
「なんだか、弟が出来たみたいな気分なんです……」
ノヴィアは、赤くなりつつ、正直に、レオニスを放っておけない気持ちを告げている。
「レオニスの様子はどうだ」
「とても頑張っています。それに――信じられないくらい、多くのことを知っています」
それはここ数日で、ノヴィアが驚嘆とともに知ったことだった。レオニスの頭脳はおよそ少年のものとは思えぬほどに、広い視野と、深い見識を抱いているのだ。

「聖法庁についても、〈銀の乙女〉についても、色々と知っていて……」
何より驚いたのは、ノヴィアの宝杖を一瞥して、
「杖の教えだね。力についての、〈銀の乙女〉独自の教義だ」
あっさりと何でもないことのように話すのだ。ノヴィアでさえ最近まで知らなかったことなのである。あの若さで、ほとんどありとあらゆる聖典に目を通している証拠だった。
更には耕地の作り方から聖印の知識、医術や兵法まで、知識のるつぼといっていい。
「一度見たり聞いたりしたことは、全部、覚えているんです。それも、怖いくらいに……」
たとえば、ノヴィアがここに来てからレオニスとした会話など、一言一句思い出せるという。過去に誰が、どこで、どんな風にどんなことを言ったか、すらすらと話すのだ。
凄まじいまでの記憶力であった。しかもそれ以上に驚いたのは、その推理力である。
僅かな情報から、様々なものを即座に見抜き、次にどうなるかを考え出すのだ。
「ドラクロワを追ってるんでしょう。ドラクロワは、ずいぶん有利な立場にいるね」
既にジークの任務を知るレオニスは、面白がるようにして言ったものだ。
「古い秘儀を盗んでるからね。聖法庁も、みんなで追いかけさせたいんだろうけど、秘儀の存在が色々な人に知られるのが怖くて、信頼出来る人間にしか追わせられないんだ。ドラクロワがあちこちで秘儀を試してるのは、半分見せかけだよ。下手に大勢で追いかける

と、それだけ、秘儀がみんなにばれちゃうぞって、聖法庁を脅してるんだ」
だから、聖法庁も、大規模な捜索部隊を編成せず、ドラクロワに各地を巡ることを許してしまっているのだ。そうレオニスは指摘し、そして、こう断言した。
「ドラクロワは、もうじき、兵を挙げるよ」
「え――？」
「ドラクロワの目的は、古い秘儀にかかわる土地さ。でも、どこも聖法庁の兵で守られている。だから兵を集めて攻めるしかないんだ。ドラクロワが各地で争乱を起こしてるのは、聖法庁と正面から戦う準備のためだよ。あと半年か一年か……いずれ戦争になるな」
「戦争に……？」
「そうさ。ドラクロワはきっと、聖法庁を滅ぼす気で攻めてくるよ」
そう、レオニスは、屈託のない笑顔を浮かべて断言したのだった。
「――本当に、レオニスが、そう言ったのか」
「は……はい。ドラクロワが戦争を始めると……」
ノヴィアの声が尻すぼみになって消えた。ジークが厳しい表情になったからだ。
「俺と、同じ見解だ」
ジークが、重い声で言った。ノヴィアが目をみはった。

「ふぅん、なんだか難しいことを考える子なのねぇ、レオニスって」
アリスハートはのんびりと言う。だがノヴィアは咄嗟に驚愕を振り払えなかった。
レオニスは、この聖地から一歩も出たことがないのだ。にもかかわらず、各地を巡察し、無数の戦いを経たジークと同じ結論に辿り着くなど、もはや異才といっていい。
「ドラクロワは確実に兵を挙げる……。だからこそ今、追わねばならない……」
そう口にしつつ、ジークの中では今やレオニスへの新たな認識が渦を巻いていた。だがそれが明確な疑惑となるには、ジークにとってまだ、レオニスはほんの少年だった。
「レオニスには、領主としての素質は、十分すぎるほどにある……」
「は、はい。私も、そう感じました。とても頭の良い子です」
ちょっと嬉しそうにノヴィアが言った。自分の可愛い弟が、誰かに誉められているような気分だった。不安なのは、レオニスが、その頭脳と体と心を釣り合わせることが出来ず、均衡を崩してしまうことだ。だからこそ今、そばにいてやりたいことを告げると、
「継承式まで、お前が、見守ってやれ」
ジークは、そう言ってくれた。ノヴィアは素直に、それを喜んだ。

その夜。領主ロムルスは、単身、城を出てルミナス聖堂に入っていった。
厳重に閉ざされた地下への扉を開き、広間のような場所に立った。
広間の中央の祭壇には、鋭い金属光を放つ、分厚い板状のものが並んでいる。
板には複雑な紋様が刻まれており、その一つに、ロムルスは無言で手をかざした。
ふいに紋様が稲妻にも似た輝きを放ち、地下の広間を白く照らした。
輝きはロムルスの手の下で収束し、やがて新しい物体を出現させている。
正方形に切り取られた水晶のようなもの——聖印の原型であった。
金属の板に見えるものは、この聖堂に継承された、聖印の原盤である。かつて聖クレマチスがもたらした聖印の力を、後世に遺すためのものだ。
聖印の原盤を管理し、その力で豊穣の地を作り出すのが、聖堂の主な役目である。
ルミナス聖堂には、十五種類の聖印が代々継承されており、それらの力を使い、長い年月をかけて、川を引き寄せ、湖を造り、耕地を生み出していったのである。
ロムルスが続けて幾つかの聖印の原型を作り出してゆくうち——ふと黒い影が、すうっと音もなく、祭壇の向こうに立ち現れていた。
「トールか。報告をせよ——」
影が近寄り、ロムルスの傍らにひざまずいた。

「穀物の運送に紛れさせて各地に放った密偵たちからの報告でございます。九つの離反騎士団、七つの蛮族の民に物資が届けられ、全て、予想された通りの動きになりました」
「予想された通りか――」
「はい。どこも予想通りの利害関係となり、離反騎士団と蛮族とが、各地で動乱を起こし始めております。どこにも聖地シャイオンとの関わりを示す証拠はありません」
「聖法庁にしてみれば、離反騎士団と蛮族が、同時に蜂起したように見えるであろう。いったいどういう経路をたどって、物資が届いているかも不明であろうな……」
「はい」
「ジークは、一足遅かったな。いや、ぎりぎりで我らが間に合ったというべきか」
「全て、レオニス様の立てた計画通りに進んでおります」
「うむ……。この聖地を一歩も動かずに、各地の利害を操作し、動乱を生む……」
ロムルスが、手を止め、つと、虚空を見やった。
「我が子ながら、恐ろしい……」
そして、小さくかぶりを振り、言った。
「だからこそ今、継承式を行わねば。いずれジークも聖法庁も気づく。準備は良いな」
「ばー――」

すっと身を引こうとするトールに、
「待て。もう一つある。あのジークの従士には手を出すな。捕らえるだけで良い」
「捕らえるだけ……ですか？」
思わず、トールが聞き返していた。女子供であろうとも、この地を守るためなら容赦なく犠牲にするのがロムルスの態度のはずだった。そのロムルスが、繰り返し言った。
「そうだ……あの少女は殺さぬでよい。事が済んだ後、無傷で解放せよ」
トールは訝しみつつも、疑問を主張したりはしない。ただ、そっと心中で呟いていた。
（老いか――）
各地に争乱を起こそうとも、目の前で少女が犠牲になるのを見たくないというのは、ロムルスの覇気がそれだけ老いで衰えたという他ない。
だが――と、そこでトールは思った。もしあの少女でなく、別の子供だったらどうか。ロムルスは、何の躊躇もなく始末を命じたのではないか。どうもそんな気がするのである。レオニスにしろ、ロムルスにしろ、なぜこうもあの少女を気にかけるのか――
「気になるか」
いきなり、他ならぬロムルスが訊いてきた。トールはやや慌てて頭を垂れた。
「所詮は、花の下のこと――気にせぬでよい。わしが老いぼれただけのことだ」

ロムルスが、正確にトールの内心を読んで、低く笑った。その様子は威厳に満ち、とても老いたとは見えない。トールはますます低く頭を垂れた。
「これを使って、ジークの力を封じる。あの男の、最大の弱点を突くのだ」
両手に、たった今作り出したばかりの聖印の原型を掲げ、ロムルスが、言った。

ランプの灯りの下で、大きな地図が、広げられていた。
十人以上が座れるほどの大きさの円卓に、その地図がいっぱいに広げられている。
アルカーナ大陸の全土を記した、詳細な地図であった。
その地図を、車椅子に乗ったレオニスが、じっと見つめていた。
左手に、各地から届けられたばかりの報告書の束を持っている。
右手には、裁縫用の針が、束になって握られていた。赤や青や緑や、何十色にも塗り分けられた、様々な色の針であった。
ふと、レオニスが、報告書の束を持った手で、車椅子の車輪を動かした。
地図の南の方へと動き、やがて、ある一点へ向けて、針を握った手を伸ばした。
「赤――いや、まだそれほど赤くない。もう少し薄めの――橙色だ」
きちんと色を選び、丁寧に、一本の針を、地図の一点に刺す。

「大陸南部は比較的、動かしやすいな。ドラクロワを援護するなら、ここか」
今度は青色の針を、三か所、それぞれ地図の違う地点に刺した。
「ここはもう、黄色か。争乱が終わる頃だから——濃い黄色にしておこう」
ひょいと、刺してあった青い針を抜き、代わりに、黄色い針を刺す。
地図には、実に、五十色以上に色分けされた針が、びっしりと、刺さっている。
その土地の、利害や争乱の状態、生産高や、住民の数、砦の兵力、道路が古いか新しいかまでもが、針によって、精密に表現されているのだ。
驚くべきことに、地図には地名以外、何も記されていない。全て針の色のみで表現されているのである。針の色の一つ一つが何を意味するかを覚えるだけでも、困難を極めるはずだが、レオニスは、それらの針を眺めるだけで、
「聖法庁の目をかいくぐって、兵を集めるには、ここが一番だから……」
まるで、書かれてあることをそのまま読むかのように呟いている。かと思うと、
「そこから、一番近くて、一番古い都市……」
すうっと、レオニスの視線が、地図の上を、滑るように動いてゆき、
「聖地デュハン……」
ひょいと手を伸ばし、真っ赤な針を、地図の一点に、刺した。

「ドラクロワはきっとここで、最初に挙兵する……あとは、それを助けるように、周りを動かせば良い。やれやれ、あの男も自分でやれば良いのに、僕に押しつけやがって」
忌々しげに言った。あの男とは、自分の父親――ロムルスのことである。
ロムルスがドラクロワに協力するようになったのは一年ほど前からだ。細かい計画を立てるたびに、レオニスは、こうして父親に協力するよう命じられるのだった。
さも肩がこったように、首を回しながら、報告書と針の束を、別の机の上に置いた。
壁が埋まるほど大きな本棚には、びっしりと違う報告書が束ねて置かれている。
するすると車椅子の車輪を回し、テラスに出た。夜風がレオニスの金銀の髪を涼しく揺らして吹き抜けてゆく。闇の向こうには、月光を受けて輝く巨大な湖の姿が見える。
「地図を見ながら色々やるのも、そろそろ、飽きたな……」
ぽつんと言った。動乱を自在に生み出す、極彩色の地図のことであった。
「継承式まで、二日――」
そう呟いた途端、レオニスの胸中で、色々なものが一気に疼いた。
それは、不安であり、挑むような気持ちであり、怒りであり、憎しみでさえあった。
そしてその中で、ふいに、甘やかな感情が、小さな泡のように浮かんでくる。
「ノヴィア――」

その名を口にするだけで、かっと胸が熱くなる。
今、彼女は、どうしてるだろう——そう思いながら、ノヴィアがいる修道院の方を見る。
部屋の灯りが幾つかついており、そのどれかに、ノヴィアがいるかもしれなかった。
もしあそこまで歩いてゆけたら。どれかの窓にノヴィアの姿を見つけ、呼びかけたら
——ノヴィアは応えて窓を開いてくれるかもしれないし、気づかずに眠ってしまうかもし
れない。あるいは気づいているけれども気づかぬ振りをするかもしれない。
相手がどんな風に自分のことを思い、行動し、喋るか——まるで分からなかった。
こうあって欲しい、こうありたいという思いが強すぎて、予想がつかないのだ。
最初に現れたときから、ノヴィアという少女は自分の予想を超えることをしている。
ノヴィアと話していると、いつまでも話していたいと思ってしまう。
次にどんな表情で、どんなことを喋るのか。ただそれが見たくて話していることもある。
自分の思いを聞いてくれるか不安になりながら話していることもある。
ただそばにいてくれるだけでいい。黙って二人で湖を見ているだけでもいい——そう思
いながらも、ノヴィアの興味を引きたくて、つい話題を選ばず話してしまう。もちろん失
敗だと思うこともある。特に戦争の話。ドラクロワのことなんか話さなければ良かった。
あんな話、きっと面白くなかったに違いない。もっと楽しい話題を探さなければ——

そう思案しながらも、レオニスは、切々とノヴィアの眼差しを思い出していた。
ノヴィアに見つめられると、ひどく安心する。その目が自分を見ているというだけで、泣きたくなるほど嬉しくなる。そんな風な眼差し持った相手は、これまでレオニスはただ一人しか知らない。しかもそれはおぼろな記憶だった。母イルミナの眼差し――父の冷厳な目とは比べものにならぬ暖かさと柔らかさをもった目で、母は、自分を見てくれた。
もう二度と、そんな風に誰かが自分を見てくれるとは思わなかった。
ノヴィアの眼差しは、レオニスには奇跡に思えた。それは冷たい世界に射し込んだ一条の光だ。その光を受けていたい。いつまでもノヴィアの目を自分に向けていたい。
だんだんそれが、思いというよりも、言葉のない、想いへと変わってゆくのが分かる。
その想いのさなか、ふいに、ちくりと針で刺されたような、冷たい痛みが胸に走った。
ノヴィアが、ジークを見つめる目――それを思い出した途端、体が震えてきた。暖かな場所から、急に冷たい場所に放り出されたようだった。それは空虚で、辛辣な場所だ。
ジーク様――というノヴィアの声が耳元で甦り、その声にこもった響きが、レオニスの心をかきむしった。なぜ、同じように自分の名を呼んでくれないのか――そう思ってしまうこと自体、激しくレオニスの心は傷ついた。誇りも自信も引き裂かれ、その心の傷から、それまでとは全く違う熱さを持った感情が噴き出してくる。それは目に見えぬ炎となって

心を焦がし、体中の肉をめらめらと内からひりつかせ、レオニスを苛んだ。
ノヴィアの微笑みが、ふいに鮮やかに眼前に浮かんだ。
「馬鹿にするな――！」
思わず、大声で叫んでいた。それから慌てて、かぶりを振った。
甘い想いが、心を焦がす炎と絡み合い、いったいどちらが、本当の自分の感情なのか、分からなくなっていた。どちらも、レオニスの中で膨らみ、急激に大きく育っているのだ。
「つまらないな……」
低く呟いた。体内で燃える炎の尖端を、僅かにその口からのぞかせるような声音だった。
「あの男も、ジーク・ヴァールハイトも、みんなつまらないよ……」
その目が、いつの間にか、ノヴィアのいる修道院ではなく、湖を見ている。
「あんな地図なんかより、もっと面白いものがあるんだ……ノヴィアもきっと驚くよ」
まるで、湖にノヴィアがいるかのように、囁いた。
「おいで――」
囁きながら、月光を受けて水面を輝かせる湖に向かって、両手を差しのばしてゆく。
「おいで――」
その胸の中で、甘い想いと炎が絡み合うように――ノヴィアの存在と、湖の怪物とが、

同じもののように、レオニスの中で融け合っていった。
ふと、レオニスの面に、ぞくりと、見る者の肌を粟立たせるような微笑が浮かんだ。
心を全て閉じこめた末に現れる、あの、悽愴の笑みであった。
「おいでよ――」
その笑みを浮かべながら、レオニスは、湖の底に向かって、優しく声をかけていた。

# 第四章　祝福の日／奈落の歌

聖地シャイオンにおける和平の誓いを歌った歌が、城の広間に響いた。
その日——城の広間に、街の主立った者が集まり、継承式にのぞむ中、ノヴィアは特別に前列の席を与えられ、レオニスの登場を待っていた。
アリスハートの姿はなく、ジークはといえば、賓客の扱いを辞退し、シャベルを手に、舞台袖に並ぶ兵士たちの間にいた。変事があればすぐさま自由に行動出来る位置だ。
この聖地で何か謀略があるとすれば、継承式の前後に、最もその動きが現れるに違いない——ジークはそう読んでいた。それはノヴィアにも伝えてある。
だが今ノヴィアは、半ばそれどころではなかった。不安と緊張のまっただ中にいた。
原因は、領主の座だ。今その座の前にロムルスが立ち、左右で聖職者たちが聖歌を唱えている。その座へとレオニスが歩む段取りなのだが、問題は、そこにある階段だった。
決して数は多くない。たった三段——ただそれだけを登れば、そこに領主の座がある。
だがレオニスの脚に、果たしてそれが登れるのか。ノヴィアとレオニスが行った訓練は、

あくまで平地での歩みである。階段を登ることなど考えてもいなかったのだ。
その階段を見ているだけでノヴィアは胸が潰れるほどの不安に駆られた。
もしあの階段を、レオニスが、一歩も登ることが出来なかったら——それは、レオニスの心に、二度と取り返しのつかぬ傷を与えるのではないか。そんなことになるくらいなら、今ここで式を中止させるべきではないのか。
ノヴィアにしては珍しいほど消極的な気持ちに陥る一方で、継承式は刻一刻と進行し、やがて、レオニスが、トールの手で車椅子を押され、広間に入ってきた。
大勢の者が見守る中、車椅子が、領主の座のある階段の、やや手前で、止まった。
遠すぎる——！　危うくノヴィアは悲鳴を上げそうになった。あれでは階段を登る前に、何歩も進むことになる。レオニスは、この場に及んで再び自分の限界を超えたことに挑もうとしている。そうノヴィアの目には映った。思わずやめてと叫びかけ、慌ててこらえた。もはやどこにも逃げ場はなかった。レオニス自身が望んでそういう場に飛び込んだのだ。ノヴィアに出来ることは、ただただレオニスを見守ることばかりである。
レオニスが、ゆっくりと体を持ち上げ、車椅子から脚をおろした。
その動きに合わせて、すっと、ごく目立たぬよう、トールが、車椅子を押した。
それで、僅かに勢いを得て、レオニスが自分の体を立たせやすくしたのだ。

静かに、レオニスが、立った。顔を上げ、領主の座の前に立つ父を、穏やかに見上げる。
そのレオニスの姿に、人々が、かすかな、驚きに似た吐息を零していた。
ノヴィアにとっては、もうそれだけで十分と思えるほどの凛然とした立ち姿である。
だがレオニスは止まらない。少しずつ、平衡を崩さぬよう、右足を前に出した。
一切の苦痛を押し隠し、涼しげな顔を保ったまま、一歩を踏み出した。
続けて、ごくゆっくりとではあるが、確実に、二歩目、三歩目と、進んでゆく。
周囲の、低い、人々の驚きの声には、明らかな感動があった。領主の座の前で我が子を待つロムルスも、厳しい顔の裏では、痺れるような喜びを抱いているようであった。
四歩目が踏まれ、そこから、勢いを殺さずに、渾身の力を込めて、右足が上げられた。
五歩目が、階段を踏んだ。レオニスの体が、持ち上がった。左足が、これまでに倍する高さへ上げられ、階段の上に置かれた。ノヴィアは震えた。レオニスが階段を登ったのだ。
続けて右足が、六歩目を次の階段の上で踏んだ。レオニスの両足が二段目に乗ったとき、思わずノヴィアは涙を浮かべ、慌てて拭った。
そして次の瞬間――全身から血の気が引くような恐怖が、ノヴィアを襲った。
レオニスが、それ以上、勢いを活かせず、最後の一段を前にして止まってしまったのだ。
その全身が固く強ばり、一瞬でも気を抜けば、そのまま転げ落ちてしまう状態になった。

奈落の淵を前にしたようなレオニスを目の当たりにして、ノヴィアはもはや耐え難い思いに駆られた。もういい。もうそれ以上、頑張らなくていい。そこまでやればもう十分ではないか。ノヴィアは今こそ、その眼差しの力を使うことを決めた。

幻視の力で、レオニスを少しでも助けるのだ。出来るかどうか全く分からなかったが、もともと幻視の力は、怪我人や病人を救う、ラプンツェルという聖道女の力なのである。その聖道女は、見るだけで病を癒したという。ならば自分も、一瞬だけでもレオニスを助けられないか。ノヴィアにとって、レオニスこそもう一人の自分であり、ノヴィア自身が無茶をしてでも助けるべき相手だった。

だがその試みは無用だった。ノヴィアが、レオニスの足を見ようとした、そのとき――レオニスの右足が、何の助けもないまま、七歩目を踏んでいた。

階段の、最上段を踏んだのだ。ノヴィアの全身から力が抜けた。それとは対照的に、レオニスは全身の力を駆使して、左足を持ち上げ、右足と同じ高さへと運んだ。

ついに、レオニスが、領主の座へと登った。その肩が、僅かに上下している。実際は、思い切り喘ぎたいほど、息を詰めているに違いなかった。その疲労の極みにあって、レオニスはなお、穏やかな顔を保っている。そして、眼前の父を、誇りをもって見上げている。

今度こそ本当に、ノヴィアの両眼に熱をもったものがふき零れた。止まらなかった。

「このときをもって、領主の座をレオニス・ジェルミナルに譲り――」
ロムルスの口上が、ノヴィアの耳には、ひどく遠いもののように聞こえた。
領主を表す首飾りがレオニスの首にかけられ、手にはジェルミナル家に伝わる宝剣が渡された。聖印を刻まれ、握るだけで剣がひとりでに動いて戦うという秘儀の剣である。
その剣を手にした瞬間、レオニスの体が僅かに揺れた。もはや立つことも限界だった。
だが、そのときはもう、レオニスに、ノヴィアの助けは要らなかった。
ロムルスが、しっかりと我が子の肩を抱き、領主の座に、腰を下ろさせたからである。
「今ここに、聖地シャイオンの新たな領主が誕生した――！」
ロムルスの高らかな宣言とともに、人々の熱い喝采が湧き起こった。
継承式ののち、祝宴が開かれ、街の人々にも、城から酒や食べ物が振る舞われた。
その喧噪の中、ジークは相変わらず、壇上の舞台袖で静かに広間を眺めている。
新たな領主となったレオニスは再び車椅子に乗って、街の有力者たちの挨拶を丁寧に受けている。そしてその傍らにはノヴィアが微笑みながら付き添っているのだった。
「ああしてみると、実に、姉弟のようですね」
ふいに影法師トールが、気配もなくジークのそばに近寄り、声をかけてきていた。

「姉弟——?」
「レオニス様と、ノヴィア様ですよ」
ジークは無言で、うなずいた。ジーク自身も、そう見ていたからだ。
「出来れば、あのまま、ノヴィア様に、レオニス様の傍らにいて頂けれぱと思います。そう言えば……よく似ていると、街のみなが噂しております」
「似ている——?」
「いえ……レオニス様とノヴィア様ではなく……。ノヴィア様が、ある方に……」
「ある方——?」
トールは答えず、つと目をジークに向け、小さく囁いた。
「ロムルス様より、お話があります。このまま、お出で下さい」

「さすがに、疲れたな……」
レオニスが息をついて笑った。城の中庭にいた。庭では賓客たちが舞踏会に興じている。
「おつかれさまです、レオニス。よく頑張りましたね」
ノヴィアは笑って応えたが、実はしきりにジークの姿を探していた。ふいにいなくなったかと思うと、そのまま一向に戻ってこないのである。

「あの……私、一度、ジーク様のところに戻りますね」
何気なくノヴィアは言ったつもりだが、レオニスの心に爪を立てるには十分だった。
ジーク様——という声の響き。戻る——という言葉。当たり前だが、この少女の居場所は、レオニスのそばではない。ジークの傍らにいるのが本来の姿なのだ。
レオニスは、その冷たい傷みをぴたりと隠し、言った。
「うん、分かった。もっとゆっくり話したいけど、この騒ぎだからね」
「ええ——」
ノヴィアがちょっと遠慮するような微笑みを浮かべた。気遣うような笑み——レオニスをこのまま置いて行く笑みだ。今そうだというのではなく、いずれ必ず。ノヴィアはジークとともにこの地を去り、そして何年かに一度、会えるか会えないかの関係になるのだ。
あるいは、争乱に巻き込まれてノヴィアが命を落とすことだってあるかもしれない。
だが、それでも、きっとノヴィアは後悔しないだろう。彼女の母が死んだのと同じように、己の使命を強く抱き、その気高い誇りや思いを懸けて戦うのだから。
どうしたら、この少女を、後悔に苛まれるような状態にしてやれるだろう——レオニスの心のどこかで、そんな考えが湧いた。そしてレオニスの心の一部は、その思案を楽しんだ。それこそ、動乱を生み出す地図を作るよりも、何倍も楽しいことに違いなかった。

「ジークは、確かさっき、城の中へ入っていったよ」
内心の思いをすっかり隠しきったレオニスが、城の方を指さす。
「そうですか。気づきませんでした」
ノヴィアが慌てて城の方を見やる。一刻も早くジークの顔を見たいという様子だった。
実際、ノヴィアの中で胸騒ぎが起こっていた。ひどく不吉な予感がするのである。
「では、レオニス。私、行きますね」
「ああ。ジークによろしく」
レオニスが手を振った。ノヴィアがぱっと身を翻し、早足で城に入ってゆく。
すぐさま兵たちが、賓客たちに気づかれぬよう、ひそかにノヴィアを追うのを見て、レオニスは、振っていた手を止めた。兵たちはすぐさまノヴィアの周囲に集まり、剣を突きつけ、その身柄を誰にも見とがめられぬまま拘束する。そういう算段だった。
レオニスが首を伸ばして見ているうちに、やがて、城の二階の一室で、窓のカーテンが、さっと閉められるのが見えた。所定の部屋だ。上手くいった合図だった。
「これで、もう少し、ゆっくりと君と話せるよ……ノヴィア」
そう囁くレオニスの口元に、薄い笑みが浮かんでいた。

ジークはシャベルを肩に担ぎ、トールと並んで、城を出て街の外れへと下っていった。
すぐに川と耕地が入り組む地帯に出た。ジークの背丈を超える高さの堤防には、要所に聖印が刻まれている。その堤防の曲がり角を過ぎて、ちょっとした広場に出た途端である。
ひゅっ――と、ほとんど耳に聞こえぬほどの、かすかな刃鳴りが、空を切った。
その一瞬前に、ジークは既に、前方へと跳んでいる。
並んで歩いていたはずのトールが、自然に歩調を遅らせ、前に来たジークの後頭部へ向かって、右手に抜き放った短剣の刃を、なぎ払ったのである。
これを完全に読んでかわしたジークが、振り返りながら着地したとき――なんとトールの姿はなく、代わりに短剣の刃が、ジークのすぐ左側から、首筋目掛けて振るわれていた。
トールもまた、第一撃をかわされるや、ジークを追って影のように跳んでいたのだ。
しゅっと空を焦がすような音を立てて刃が通過した後を、赤いものが舞い散った。
トールの目に一瞬、それが血に見えた。が――そうではない。
腰を落として、刃の第二撃を避けたジークの、赤髪が、僅かに切られて舞ったのだ。
更に、刃を突き込んでくるトールの胸へ、すっとジークが左手を伸ばし、赤い籠手をはめた手の平で、どん、と押した。

ただそれだけで、トールの体が、大きく後方へ吹っ飛ばされている。
体の中心を叩くことで、トール自身の勢いを、そのままその身に叩き返したのだ。
トールは転倒しかけるのを、大きくのけぞってこらえた。
いつの間にか、その両手に、短剣を握っている。次にジークが刃をかわしていれば、その隙に、もう一方の手に握った短剣を、突き込むつもりだったのである。
それを読んで、ジークが、トールの体ごと突き飛ばしたのだ。
「くう——」
胸の下を叩かれたせいで、咄嗟に息が詰まり、呻きを漏らすトールに、
「詫びなくていい」
ジークが、言った。間違えて足を踏んできた相手に対するような、何気ない口調だった。
「本当に、ドルク・ヴュラードの息子か」
それにしては弱いな——と言うようだった。ジークには珍しい、相手の心を、わざとかきむしるような言いざまである。
果たして、トールの、無表情だった顔に、暗く怒りと憎しみの表情が浮かんだ。
「あんな下種と、一緒にしないで下さい……母を、殴り殺した父親だ……」
口調は丁寧だが、声の底に、ぐつぐつと煮え滾るような、暗い感情の響きがあった。

「お前の母は、疫病が流行ったせいで死んだ。ロムルスが知っている」
だがトールは聞いてもいない。短剣を握った両手を、だらりと下げて、言った。
「あなたを、地面に這わせることが出来たら、さぞ、気分が良いでしょうね……」
「言うことだけは、父親と同じか」
その父親でさえ出来なかったことが、お前に出来るのかと言外に訊いていた。
すうっと、今度こそ本当に、トールの顔面から、全ての表情が消えた。
人の顔が、ここまで仮面のようになれるのかと、驚くほどの無表情さであった。
その気配が、どんどん薄れてゆき、やがて、ふっとかき消えた。
現実に消えるわけがない。音も気配もなく、跳んだのだ。しかもこちらの呼吸を読み、いきなり視界の盲点に潜り込んだせいで、消えたように見えたのである。
その手練に、ジークは正直、ドルク・ヴュラードとは異質な才能と強さを感じていた。
だが、それでも、肩に担いだシャベルを構えようともしない。
ただ、横手から振るわれる短剣の乱舞を、ひょいとかわした。続けざまに、トールが刃を振るってくるが、かわすだけである。そうするうちに広場の中央に来た、そのとき――
「今だ――！」
なんと、ロムルスが、堤防の上に現れ、叫んだではないか。

同時に、広場を囲む堤防の壁が、あちこちで崩れ、水が怒濤の勢いで流れ込んできた。
聖印を刻まれた堤防がいきなり崩壊するなど、考えられることではない。ジークの目に、
ロムルスの力で解体された聖印が、光のかけらとなって宙に舞うさまが映っていた。
水が押し寄せる寸前、ジークが、トールでさえとても追いつけぬほどの高さに跳んだ。
トールを跳び越え、着地すると、風のように、もと来た道へ走り寄せている。
だが、その道の向こうからも、水が押し寄せ、ジークの足が止まった。
咄嗟に跳んでかわそうとするが、四方から水が渦を巻いて迫り、逃げ道を封じていた。
そのとき、ジークのいる場所を中心に、地面のあちこちで、聖印の輝きがともった。
ただ水を流し込んだのではなく、聖印の働きによって、今いる場所へ水が集まるよう、
事前に施していたのである。トールの目的は、その地点へ、ジークを誘い込むことだった。
たちまち、ジークの膝までが、水につかった。
トールも、同じように水につかりながら、無表情な目で、ジークを見つめている。
「大地を通して死者の魂を招く、〈招く者〉……水に覆われた地面から、魔兵を招き出すことは出来ぬ。お前自身の堕気も、聖印の働きで聖性を帯びた水が、封じた」
ロムルスが、言った。と思うと、周囲の堤防の損壊部分を避けるようにして、四方から
聖地シャイオンの兵士が現れ、一斉に、槍や弓をジークに向けて構えるではないか。

「もはやお前は、軍団ではない。ただ一人の兵だ。大人しく投降せよ」
そう言い放つロムルスを、ジークが、淡々と見上げた。
「その、一人の兵が、どこまで戦えるか、見せてやろう」
途端に、兵が怖じ気づいた。この地におけるジークの武勇は、それこそ伝説の怪物じみている。中には過去にジークの戦いをその目で見た者もいるのだ。
「恐れるな！　遠間から鎖と網で捕縛せよ……！」
ロムルスが怒鳴り、兵が次々に堤防から飛び降りる。かと思うと、
「あなたの従士が、どうなっても良いのですね」
トールが、全員に聞こえるような声を上げた。ジークがすっとトールに目を向けた。
「既に彼女は捕らえたはずです。私が合図をすれば、すぐに始末します」
声口調だけでなく、全身が、本気で言っていることを告げていた。
「待て、トール――！　やめぬか！」
ロムルスが顔色を変えて叫んだ。
だがトールは、他に何も目に入らぬかのように、ひたとジークを見つめている。
「あなたをたやすく倒せるとは思っていません。あらゆる手を使わせて頂きます」
「お前の父は決して――」

「私は、父とは違う」
まるで、その父の代わりに、ジークを殺すとでもいうような目で、ジークを見つめた。
「どうやら、そのようだな」
ジークが、ひょいとシャベルを離した。シャベルがばしゃっと音を立てて水に沈んだ。
「馬鹿者っ、トール！」
ロムルスが堤防から飛び降り、わめいた。しぶきを上げて走り込んできたかと思うと、鞘ごと剣を抜き、いきなりトールの肩を厳しく打ち据えた。
トールが思わずよろめき、歯を食いしばって痛みをこらえる。
「この愚か者がっ！　いったい誰がそのようなことを命じたかっ！」
ロムルスが続けざまにトールの両手を打ち、短剣を取り落とさせた。
「……ジークを捕らえよ。このまま川の中を歩かせ、城の水路を通り、牢に運ぶ」
ロムルスが息を荒らげて命じた。兵が恐る恐るジークに近づき、捕縛用の鎖で拘束する。
ジークはまるで抵抗せず、そのまま城に連れて行かれた。
その様子を、トールが打たれた手をさすりながら、昏く沈むような目で見つめていた。
城の地下にある、冷たい水牢であった。ご丁寧なことに、床に聖印を刻み、水に聖性を

やどらせ、ジークの堕気の力を抑えている。武装を解かれた姿で、鎖が背で両腕を縛り、そのまま、床の留め金に固定され、座ったまま一歩も動けなくさせている。
座った腰まで水につかった状態であるため、横になって眠ることさえ出来ない。
〈招く者〉の力を封じつつ、精神的に追いつめ、屈服させようという魂胆なのだろう。
だがジークは、その状態で、なおも淡々と、鉄格子の向こうの廊下を見つめている。
そのうち欠伸でもして、座ったまま眠ろうと思っているような平然とした様子であった。
「既に、おおかた、気づいているのであろうな……ジークよ」
ふいに、ロムルスが、供も連れず、単身で、鉄格子の向こうに現れていた。
「水だ——」
ぽつりと、ジークが応えた。
「武器、食料、その他の物資、そして聖法庁の密偵の死体——全て水の下だ」
「いつ、分かった……?」
「確証は無かった。だが、確信はあった。聖地シャイオンの湖から延びる川の全てが、各地の争乱に物資を運んでいる経路だ」
ロムルスが目をみはった。真実を言い当てられた表情だった。
「治水のためにしては聖印の数が多すぎる。聖性の光で覆い、物資を隠すためだ」

「そうだ……それがいわば、聖地シャイオンに眠る怪物の正体だ」
それが、湖に多くの道が通じていた理由だった。様々な物資を、商売の帳簿と矛盾せぬよう、湖の底に集積させ、少しずつ争乱の地に運び出していたのである。
「船底に荷をくくり、検問の目をかいくぐる。物資の移動さえ水面下だ。ごまかし通せるかと期待したが……死者の声を聞く男と、万里眼を持つ従士が相手では、無益か」
「今ならまだ間に合う。争乱から手を引けば、俺が真実を闇に葬る」
「間に合ってはいないのだよ、ジーク。もう何もかもが遅い。継承式も無事に終わった。もしこの地が聖法庁と対立したとしても、全ては旧領主であるわしの陰謀だ。新領主であるレオニスは、わしとは関係なく、この地を統治する。もはやわしを止めるものはない」
「妻への祈りに生きるのではなかったのか」
「そうだ、ジーク。これがわしの、最後の、妻への祈りなのだ」
ジークがふと目を細めた。そして、何ごとかを察するように、かぶりを振った。
「聖法庁の大軍勢を相手に、滅ぶ気か……ドルク・ヴュラードのように」
「そうとは限らぬ。ドラクロワは聖法庁を打倒し、新たな世界をもたらすかもしれんぞ」
「あいつが、それほどの兵力を得ることは、もう不可能だ」
「そう。不可能だ。人の兵力ならばな……」

「なに……!?」
「お前は一足遅かった。増殖器だ……堕界の魔獣を出現させ、兵力に代える秘儀だ。その最も大事な荷は、既に何十体と各地に送り終えておる。数万の兵に匹敵する荷をな」
「増殖器だと……そんな巨大なものを、何十体も、船で運び出したというのか」
「巨大なもの？　ドラクロワが、各地で増殖器の秘儀を試していたのが分からぬか。わしがそれをより小型にし、運搬を可能にしたのだ。ドラクロワは更に改良し、恐るべき秘儀とするであろう。まさしく湖の怪物そのものだ。そしてドラクロワが勝利し続ければ、参戦する者は膨大な数になる。大兵団が聖法庁を打倒するのだ」
「なぜだ……この地で流された血を、なぜ無に帰す」
「この地は平和だ、ジーク。争乱の嵐の中心として、むしろ穏やかな土地であり続けるのだ。これはわしの陰謀であり、戦いだ。民にも、我が子にも、関係がない。他の土地がどれほど荒廃し、滅びようとも、聖地シャイオンさえ平和であれば、それで良い」
　そう言いつつも、ロムルスは、苦悩の表情で、ジークを見つめている。
「わしは老いた……もはやここ以外の土地のことに何の興味も湧かなくなってしまった。わしの望みは、妻への祈りとして、この老残の身を、争乱に叩き込むことだけだ――」
「ロムルス――」

「なぜ、お前が、ドラクロワの乱に、参戦せぬのだ……」
ふいに、ロムルスの声が、非難するような調子になった。
「最強の軍団であるお前がいれば、よりたやすく聖法庁を打倒し、新たな世界を作り出せる。それこそ最後の血だ。わしはただ戦って死ぬだけだが、お前は若い。新たな世界に生きられるかもしれぬのに、なぜ、ドラクロワを助けず、追おうとするのだ」
「……ドラクロワが考えているのは、もっと恐ろしいことだ」
だがロムルスは、沈痛な様子で、かぶりを振った。
「お前を殺しはせぬ。ドラクロワの乱に参加する気になるまで、その牢にいるがいい」
そう言って背を向けるロムルスに、ジークが呟くように訊いた。
「なぜ、ノヴィアを助けようとした？」
ロムルスが足を止めた。ちらりとジークを見やり、それからまたかぶりを振った。
「花の下だ――」
全てを胸の内に封じるように呟き、ロムルスは静かに牢を出て行った。
城の一室に軟禁されたノヴィアは、周囲を武装した兵に囲まれているにもかかわらず、

「レオニス、私、何か悪いことでもしたのでしょうか」
部屋にやって来たレオニスに、大人しく椅子に座ったまま、平然と訊いたものだった。
不安の極みにあって泣いているのではないかとちょっと期待していたレオニスは、
「怖くないの？」
思わず本気で訊いてしまった。
「怖い？」
ノヴィアも真顔で訊き返している。
「それより、私、ジーク様にお会いしたいのですが」
「それは無理だよ、ノヴィア」
レオニスがちらりと笑みを浮かべるが、すぐにその表情を押し隠して、
「これは父上の仕業なんだ。父上が、聖法庁に対して反旗を翻したんだ」
むしろ沈痛な面持ちで、言ったものだった。
「なぜかは知らないけど、父上は、聖法庁を憎んでる。僕にも止めようがない」
「ロムルス様が、叛乱を……」
ノヴィアもやや呆然と呟いている。だが、さすがにジークの従士として戦いを間近で経験しているだけあって、レオニスが期待していたよりも遥かに落ち着いていた。

「でも、安心して欲しい。君の命だけは、何とかして、守るから」
逆に、不安を煽るかのようなレオニスの言だった。ノヴィアはちょっと目をみはって、
「命を……ですか。それほど危険なことに……？」
するとレオニスは、はっきりとうなずき、こう言った。
「聖地シャイオンは、もうすぐ、戦場になる」
今度こそ本当に、ノヴィアが驚愕の表情を浮かべた。
その表情を見て、レオニスは心の中で、ようやく満足の笑みを浮かべていた。

レオニスがいったんノヴィアを置いて部屋を出ると、そこにトールがいた。
「……レオニス様。万事、ことは上手く運んでおります」
レオニスはうなずき、車椅子を叩いた。
「僕の部屋まで、頼む」
トールがうなずき、車椅子を押して運んだ。部屋のドアをトールが閉めると、
「用意しておいた報告書は、全部、近辺の砦に届いたかな」
そう言いながら、自分で車輪を回して、テラスに出た。
「はい。三か所の砦の兵が動いたようです。夕刻には押し寄せてくるでしょう」

「ロムルス・ジェルミナルの叛乱――」

くすっとレオニスが笑った。

「格好良いじゃないか。あの男の、人生最後の晴れ舞台ってわけだ」

あの男と父親を呼ぶ声も、今やひどく楽しげな響きを帯びている。

「ロムルス様が既に兵員の編制をされておいでしたから、すぐに迎撃出来ますが」

「息子の継承と同時に、出陣するつもりだったわけだからね。まぁ、じきにあの男も異常に気づくさ。どうせ、真っ直ぐぶつかると見せかけて、すぐに軍を率いてこの地から逃げ出すよ。騎士団も、聖法庁の正式な命令が無い限り、それを追討出来ない」

「はい――ロムルス様に、何か別れの言葉をお伝えいたしましょうか」

「その必要は無いよ。あの男は、この地で生涯を終えることになるんだから」

目に見えぬ刃を、そっと相手に手渡すような声音だった。

「殺さないでね、トール。身動き出来なくさせるだけでいい。それは僕がやる」

うっすらと微笑みながら、嬉々として言った。

「ロムルス・ジェルミナルは、謀反を起こし、逃げ出そうとして息子の手で処刑されるのさ。あの男の首を、僕がこの手で吊る。この地の平和のためにね。きっと大勢の人が泣いてくれるよ。僕も、せいぜい悲しい顔で、父を処刑するさ」

そう言いながら、レオニスの顔には、鮮やかなほどの笑みが広がっていった。
「ただし、それでこちらの兵が混乱したら面白くない。考えておいた軍令を、各部隊の指揮官に渡しておいてくれ。あの男の筆跡を真似たものだから誰も疑わないよ」
すっと、レオニスが辺りの景色を指をさして、
「あそこと、ここと、そっちが戦場になる。北の耕地は火をつけて壁にしよう。一番の戦いの場所を、ここからよく見える場所にしたいな」
「街が火の海になりますね」
「北側だけさ。街の中に防護柵を計画通りに置いて、街の住民に盾になってもらおう。派手になるといいな。その分、僕が父を処刑しなければいけない真実味が増すから」
「はい」
「そして最後に、あそこ――」
ゆっくりと、その指が、湖をさし示した。
「本当に、現れるでしょうか、レオニス様」
「僕は信じてるよ。増殖器の秘儀だって何とかなったんだ。この地の伝説に従って、一年以上かけて準備したんだ。きっと上手くいくさ」
心の底から、期待のこもった声で、レオニスは言った。

「ところで、レオニス様——一人だけ、今朝から姿を見かけないのですが」
「見かけない……？　誰……？」
「アリスハートです」
トールが真面目に言った。確かにアリスハートは今日一日、どこにもいなかった。そしてそのことに気づいたのは、この地に関わる者では、実にトールただ一人だったのである。
「トールも細かいな。妖精一匹くらい、気にしなくて良いよ。どうせジークやノヴィアが捕らえられたんで、驚いて逃げたんだろう」
レオニスが笑った。トールもうなずいているが、どこか釈然としないようであった。
「色々と、準備を頼むよ、トール」
レオニスにそう言われて、ようやくトールが動いた。すうっと影のように退き、音もなくテラスから跳躍し、どこへともなく消えた。
レオニスは、湖を見つめ、ふとノヴィアのことを想った。ここが戦場になると言ったときのノヴィアの目——あれは最高だった。自分が父を処刑することについて、ノヴィアがどんな風に思うか。どんな驚いた表情を浮かべるか。今から、ひどく楽しみだった。
「君こそ、もう一人の僕だ……僕は君を待っていた。付き合ってもらうよ、ノヴィア」

「もぉ、どういうことよぉ。だーれもあたしが居ないのに気づかないんだからぁ」

水牢の中で、元気な声がこだました。アリスハートである。本気で怒っているらしい。

「チビは目立たなくて良い」

ぼそっとジークが言った。これが、手数が足らないときの策だった。継承式の日は、朝からアリスハートに姿を隠させて、様子を見させることをあらかじめ決めていたのである。そして相手が動きを見せれば、適当なところで捕まる。その上で、ロムルスの真意を聞くのだ。そしてその目的は既に果たしたといってよかった。

「チビって言うなってのっ。助けてあげないよっ」

ふいに、アリスハートが猛然と飛んできて、ジークの額を、ぺちんと叩いた。

ジークが縛られているせいか、いつになく攻撃的だった。あるいはその不在を、誰にも気づいてもらえなかったことに、それだけ怒っているのかもしれない。

「失言だった」

これまた珍しく素直にジークが謝る。今すぐ脱出する必要があるからだ。堕気で鎖を腐らせて脱出することも出来たが、聖性が邪魔をしているせいで数日はかかりそうだった。

「あまり騒ぐと、牢番に見つかるぞ」

「だったら早く素直にお願いしなさいよぉ。ほらぁ、見なさいよ、これっこれっ」
ジークの目の前で、じゃらじゃらと、手にした鍵の束を見せつける。
「頼む」
「お願い、アリスハート。そう言うのっ」
ぴっと小さな指を突きつける。ジークが、ふむ……と思案顔で呟く。だが口にはしない。
「普通、迷うぅ？　こういう状態でぇ。もぉ、重いんだから早く言いなさいよぉ」
鍵の束の重量に耐えるようにして、必死に羽を震わせる。ジークはむしろどこまで耐えられるか見守っている。鍵が落ちれば、それで鎖を留めている錠を外せば良いだけだ。
「たまには、名前で呼んでくれたって良いのにさ。トールの気持ち分かるな」
しょぼんと言ってうつむいた。ふわふわ宙に浮く姿がやけに哀れっぽい。
む……と、さすがのジークがちょっと真顔になる。
「頼む、アリスハート。お前の手が要る」
にやり。アリスハートが笑みを浮かべてジークを見た。
「引っかかってるぅ。狼男が引っかかってるぅ」
得意満面のアリスハートだった。ジークが、やや疲れたような溜息をつく。
「まったく、渾名をつけりゃ良いってもんじゃないわよぉ。だいたいもともとの名前って

のがあるんだからさぁ。その名前が気に入ってるなら、それで呼ぶのが一番よぉ」
相変わらず鍵をじゃらじゃらさせて言う。かと思うと、
「渾名……。ああ、そっか……」
などと、急に真剣になって考え込んでいる。ジークが鋭く言った。
「チビ、これ以上、ノヴィアを拘束させたままにしておく気か」
これが一番、アリスハートには効き目があった。
「ああ……はいはい、分かってるわよぉ。あたしだって頑張ってるんだからぁ」
鍵の束を持ってジークの背後に回り、鎖の錠を開いてやる。呆れたことに三か所も留められていた。体の小さなアリスハートには確かに重労働だ。
「よし。ノヴィアに連絡を取れ。十分に情報は聞き出した。俺はロムルスを捕らえる。ノヴィアは脱出して、周囲を見ろ。襲ってくる兵は威嚇し、戦意を挫け」
「はいはい。で、ノヴィアが見た周りの様子を、あんたに教えれば良いんでしょ」
鍵を開けるだけで疲労困憊したアリスハートが、うんざりした顔になる。
「そうだ」
「もぉ、あたしって大活躍じゃない」
真面目な顔で言って、ふわっと鉄格子の隙間から飛んで行ってしまった。

鍵束を手にそれを見送るジークも、どこか、アリスハートに共感する素振りであった。
そのアリスハートよりも前に、ノヴィアが軟禁された部屋を訪れる者があった。
ロムルスである。兵を部屋の外に出させ、ノヴィアと二人きりになって、言った。
「ジークを説得してくれるよう、そなたにも頼みたい」
「説得……ですか？　どういうことでしょう」
「ともにドラクロワの乱に参加することをだ。ジークとドラクロワとの間にいかなる遺恨があれ、かつての友だ……ともに戦うことこそ正しいあり方であろう」
ノヴィアは、大いに驚いたが、確かにこの地におけるジークの因縁を考えると、ロムルスがジークを味方にしたがるのも分かる。ただ強大な力を持っているという以上に、ロムルスにとって、ジークが味方することは、自分の正しさが証明されることだからだ。
「お断りします」
だが、ノヴィアはきっぱりと返した。
「ジーク様は、ご自身の意志で、戦っておられます。私がそれを指図出来ません」
なんとも凛とした声音であった。二人きりではなく、屈強の兵に囲まれてもなお、同じように返答するだろうことが容易に想像出来た。

「勇猛だな……」
ロムルスが苦笑した。レオニスに比べて、よほどノヴィアの方に覇気があった。
「そのように思い詰めたときの顔も、よく似ておる……」
声を潜めて呟いた。ノヴィアが何のことかと首を傾げる。ロムルスはかぶりを振った。
「そなたたちを救うためだ。このままでは、そなたたちを手にかけねばならない」
刹那、ノヴィアの中でもそれまで想像もしていなかった強い気持ちが湧いた。
「ジーク様は、私がお守りします。お手を触れさせはしません」
無謀ともいえるほどの勇敢さで、ノヴィアが言い放った。ロムルスは驚嘆した。いったい今、何と言ったのか？　ジークが自分を守るのではなく、自分がジークを守る？
この小さな身で、何という勇気か。ロムルスは、いたく感動した。そしてそのノヴィアの眼差しを見つめた瞬間、ロムルスは突然、身を貫くような戦慄を覚えていた。
この目は見たことがある！　そういう確信がロムルスを襲った。それはロムルスにさえ、甚大なる恐怖を覚えさせる眼差しであったのだ。
いったいどこで、そんな目を見たのか。すぐに思い出した。忘れようもなかった。
「ドルク・ヴュラード……」
戦慄に打たれながら、ロムルスがその名を呟いた。

ノヴィアがきょとんとなる。ドルク・ヴュラードの名は、レオニスから聞いていたが、今ここでロムルスが口にする理由など分かるわけがなかった。

「花の下だ——」

ロムルスが、胸を押さえて言う。だが堪えきれぬ様子で膝をつくと、

「すまぬ……。この地の深き因縁を、思い出したのだ……」

ノヴィアと同じ目の高さになって、かき口説くような口調で言った。

「わしには、子がいた。双子だった。だが、片方は死んでしまった——」

「は……はい。レオニスから聞いております」

ノヴィアが、びっくりして返す。するとロムルスがこんなことを言った。

「願わくば、亡くなった子の代わりに、ただ一度だけ……この腕に抱かせてくれぬか」

正真正銘、ノヴィアはきょとんとなった。ジークを説得させようとするかと思えば、今度は抱きしめさせろと言う。だが目の前の男の悲しみだけは、どう見ても本物だった。

「その……亡くなったお子さんに、私が、似てるからですか？」

恐る恐るという感じでノヴィアが訊いた。それ以外に説明がつかなかった。

「そう……似ているのだ。そなたは、実に……よく似ているのだ」

ロムルスは目を細め、ゆっくりと言い聞かせるようにして言った。

「わしは、じきに兵を率いてこの城を出る。二度とこの地には戻るまい。その後で、そなたたちを解放させよう。わしの行いは、レオニスとは無関係だ。だから最後に……」

レオニスの名を出された途端、ノヴィアの中でまた急激に強い気持ちが湧いていた。

「なぜ、レオニスではないのですか」

怒りのこもった返事に、ロムルスが、横面を引っぱたかれたように顔色を変えた。

「レオニスは生きてます。あなたのすぐそばで生きています」

ノヴィアの怒りは熾烈だった。レオニスが抱く父への屈折した思いをこの数日で痛いほど理解しているノヴィアなのだ。目の前のロムルスに、自分もレオニスも同時に馬鹿にされたような気持ちになっていた。とても許せるものではなかった。

「死んだ子供よりも、い、い、い、い、レオニスを抱きしめてあげて下さい」

そう言い放ったノヴィアの眼差しは、今やロムルスを大いに打ちのめすこととなった。

「もし……そなたが、イルミナであっても……」

ロムルスが、愕然と喘ぐように、言った。

「きっと、同じ事を、言ったであろう……」

ロムルスの総身から、悲しみの気配が、すうっと引いていった。

その頰に、強い笑みが浮かんだ。ゆっくりと膝を上げ、

「すまなかった」
心から感謝を込めて詫びていた。ノヴィアはちょっと気圧されたようになって言った。
「い、いえ……私こそ、何も知らないのに……」
するとロムルスが、晴れ晴れとした顔で笑んだ。
「そなたのお陰で、目が覚めた」
そのあまりに喜びに満ちた声に、ノヴィアが驚き、そしてにわかにはっとなった。
「聖地シャイオンと、我が妻イルミナの魂、そして我が子らに、祝福があらんことを」
静かに唱えながら、ノヴィアから離れた。途端にノヴィアはロムルスの決意を悟った。
「死んではいけません。死んだらレオニスが――」
その思いを本当にぶつけられる相手を失ってしまう。そう叫びたかった。だが、
「レオニスは一人で立ち、領主の座へと歩んだ。自慢の子だ。それもそなたのお陰だ」
ロムルスの声には、紛れもない、我が子への誉れの思いがあった。
「その気持ちを、レオニスに伝えてあげて下さい」
ノヴィアが懸命に叫んだ。しかしロムルスは微笑み、かぶりを振った。
「更に我が子に憎まれるだけだ」
ロムルスの言葉が正しいことが、ノヴィアにも分かった。思わず唇を噛んだ。

「最後に、そなたに出会えて、良かった……」
ロムルスが真摯に告げ、きびすを返した。ノヴィアは、どうしてもロムルスを止められないのを悟った。また同時に別のことも感じていた。この男は、本気で自分のことを――
ノヴィアはきつくかぶりを振った。何をどう言えば良いのかまるで分からなかった。
「私はフェリシテ・エルダーシャの娘です。そしてレオニスはあなたの子です」
何の考えもなく、大声でそう叫んでいた。
一瞬、ロムルスの動きが止まった。背を向けたまま強くうなずき、部屋を出て行った。
ドアが閉ざされ、ノヴィアは、ただ呆然とその場に立ちつくしていた。

それから間もなく、聖地シャイオンに接近する騎士団の報がもたらされた。
ロムルスはいささかも狼狽えず、すぐさま軍令を放っている。
「出陣する！　街道でぶつかると見せかけ、北方へ疾駆し去るぞ！　そしてそのまま、各地の闘争に参列し、ドラクロワとともに、聖法庁に向かって叛逆の旗を揚げる！」
すぐさま準備を整え、戦さ装束に身を包み、腰に剣を吊すと、書斎に入った。
「イルミナよ……この最後のわしの思いを、許してくれるか」
そう囁くロムルスの前に、艶やかに咲いた銀の薔薇のような、一人の女性がいた。

ただ一枚だけ、棄てることが出来ず遺された、亡き妻の肖像画――
それが、ロムルスの書斎に、ひっそりと飾られていたのである。
「我らの子は、立派に育っている……。わしの出る幕は、もはや無い……」
そう告げるロムルスの脳裏に、継承式のレオニスの姿がまざまざと甦っていた。
不自由な脚を懸命に運び、自分がいるところまでやって来た。それだけで、ロムルスの方こそ泣き崩れてしまいそうだったのだ。頭脳が明晰だから何だというのか。脚が不自由だから何だというのか。ただ我が子に無条件の誉れを感じていた。だからこそ厳しすぎるほどに厳しく接してしまった。駆り立てられたような厳格さで子供を追いつめてしまった。
イルミナが生きていたら、レオニスとの関係も、もう少し、違ったものになっていたかもしれない。つくづくそう思った。だがそれも、じきに終わることだ。
「もはや、思い残すことは、何も無い……」
レオニスには、それとなく自分が去ることを告げてある。あの聡明な子であれば、父が何を望んでいるかすぐに察するだろう。もはや別れは告げたに等しかった。
「行くか――」
肖像画に背を向け、書斎から一歩出た瞬間――
ロムルスは、突然、何かが甲冑を貫き、脇腹を深々と抉る、凄まじい熱を感じていた。

咄嗟に、腰の剣を抜いて振るったが、黒い影は素早く跳んで、それをかわしている。
ふわりと、音もなく、黒い影が、居室の円卓の上に降り立った。
完全に気配を消し、ドアの横の壁にうずくまって、ロムルスを待っていたのだ。
ロムルスは、その黒い影が、銀に光る長剣を手にしているのを見て取るや、
「聖咎の剣を使うか……戦場も知らぬ青二才が触れて良いものではないわ、トール！」
なんと腹を貫かれてなお、大喝を放った。なぜ自分を刺したか、訊きもしない。
「父を憎むならば、黙って出陣を見送り、訃報を待てとレオニスに伝えよ！」
叫びざま、剣を、トール目掛けて振り下ろしている。
円卓が真っ二つに斬り砕かれ、一瞬前に跳んだトールが、床にふわっと着地した。
トールは銀色の剣を手に、まるきり表情の欠けた顔で、ロムルスを見つめていた。

「なんか大騒ぎよ、ノヴィアぁ！」
アリスハートが部屋に飛んできた。忍び込んできたのではない。なんとこの陽気な妖精は、ノヴィアが軟禁されている部屋にやって来るなり、その扉を守る兵に、
「ちょっと、大事な用事があるんだから、早くそこを開きなさいよぉっ！」

大声でわめき立てたのだ。兵も、アリスハートが相手では何となく剣を向ける気にもならず、渋々、部屋に入れていたのだった。
「あ……アリスハート」
ノヴィアが我に返ったように言った。
「あ……じゃないわよっ。大変なんだってばぁ。みんな戦争が始まるって大騒ぎよぉ」
アリスハートが両手を振り回してわめく様子に、たちまちノヴィアが顔を引き締めた。
「騎士団が攻めて来てぇ、ここの兵隊さんたちが戦おうと準備してるんだってぇ」
「そんな……それで、ジーク様は？」
「ちゃんと逃がしたわよぉ。狼男が言うにはぁ、ロムルスさんを捕まえとくから、ノヴィアは周りを見ろってさぁ」
さすがに、これには周囲の兵たちが愕然となった。
「き……貴様ら、そこを動くな！」
怒鳴り声を上げて剣を向けるが、
「分かったわ。すぐにここから出ましょう。ジーク様はご無事なのね」
「水びたしだったけど、怪我はしてなかったよぉ」
「そんな……ジーク様、風邪を召されてなければ良いけど……」

躍起になる兵たちは、完全に無視されてしまった。かと思うと、面と向かって、
「そこを通して下さい。私、行かないといけないんです」
「ほらぁ、あんたたち、邪魔よぉっ！　さっさとどきなさいってばぁっ！」
口々に言って迫ったものである。
「う、動くなっ！」
剣を振り上げた兵の兜が、その瞬間、かーんと大きな音を立てて真後ろに吹っ飛んだ。
兵の頭は無事だが、その兜が金の矢に貫かれ、壁に縫い止められてしまっていた。
「矢が……見えます」
唖然となる兵の真ん中で、ノヴィアが低く呟いた。たちまち幻視された金の矢が三つ現れ、目にもとまらぬ速度で放たれた。ほとんど同時に、三人の兵が、剣を、矢に弾き飛ばされている。矢は、そのまま、三本とも壁に突き立った。
「一度に沢山見ると、まだ上手く狙えないんです。次は体に刺さるかもしれません」
ノヴィアが真面目な調子で言った。同時に、壁に刺さった矢が全て、ふっと消えた。
からん、と壁に縫い止められていた兜が落ちるや、兵たちが一斉にノヴィアから退いた。
ノヴィアが歩き出すと、部屋の外にいた兵までもが、慌てて道を開く始末だった。

刃と刃の衝撃き合う音とともに、ロムルスの剣が真っ二つに斬り飛ばされた。
反射的に身を引くが、腹の傷の傷みで思うように体が動かない。
ふっと黒い影が、ロムルスの眼前から消えた。かと思うと、折れた剣を握った手の真下に、トールの姿があった。同時に、銀色の刃が、ロムルスの右足を甲冑ごと貫いている。
トールが刃を引き抜くと、ロムルスが、呻き声を上げて、膝をついた。
「殺しはしません。大人しく戦場を見ていて下さい」
「せ……戦場だと……何を……」
「もうすぐこの地が戦場になります。レオニス様がそれを望んでおいでです」
一言一言区切るように告げるトールに、かっとロムルスが目を見開いた。
「愚か者どもがっ！」
怒りの声に、紛れもない悲痛の響きがあった。折れた剣を握りしめ、トールに襲いかかろうとした。トールがさっと横手に回り込み、そのロムルスの左足を、無言で貫いた。
ロムルスが、無念の声を上げて倒れ伏した。
「さすが、聖印を刻まれた剣……恐ろしいくらいの切れ味ですね」
たやすく甲冑を切り裂く剣を、惚れ惚れとした目で見つめた。
「しばらくしたら、また参ります。それまでそこで、這っていて下さい」

刺した相手の止血もせぬまま、銀の剣を手に、きびすを返す。
「ま……待て」
ロムルスが必死に声を上げた。ふいにトールが立ち止まった。ロムルスの呼び声のせいではない。部屋を出ようとした途端、猛烈な殺気が吹き寄せてきたのだ。
気配を隠す戦法を得意とするトールにとっては、対極にあるような存在だった。
それが一つや二つではなく、部屋の出口や、窓や、そこら中から押し寄せて来る。
トールが動こうとした。だが、動けない。どちらに動いてもそこに凄烈な殺気があった。
「くう――」
トールが、呻いた。そのとき――ドアの陰から、窓から、次々に、それが現れていた。
トールは一瞬、頭が真っ白になるのを覚えた。気づけば、視界がそれでいっぱいだった。
銀の鱗を持つ、人の形をしたトカゲのごとき姿。両手に分厚い剣を握り、顔には目も鼻もなく、突き出した口に、かっと鋸のような牙を剝いている。
総勢十六体の、異形のトカゲたちが、トールの周囲に集り、両手の剣を突きつけていた。
三十二枚の刃の尖端が、トールの背に、腹に、腰に、胸に、腕に、脚に、首に、頰に、触れているのだ。少しでも動けば、どれかの刃が、体のどこかに潜り込む状態だった。
しゅーっ、しゅーっ、というトカゲたちの、殺気をはらんだ生臭い呼吸が、前後左右か

ら聞こえてくる。さすがのトールが、圧倒的な恐怖に、息を呑んで凍りつくしかなかった。

「凄魔──俺のシャベルにやどる魔兵だ。中身が無かったので、代わりに招き出した」

聞き覚えのある声が飛んだ。トールは微動だに出来ず、目だけをそちらに向けた。

そこに、いつもの白外套に、黒革の鎧、赤籠手という戦闘衣装のジークが、いた。

「子供の手に触れさせるつもりはない。渡してもらおう」

トールの握る、聖咎の剣のことだ。今や完全に幼児扱いである。事実、もはや幼児のごとく無力だった。ぶるぶると体が震えた。三十二の刃が皮膚を傷つけ、頬や首や腹や全身から血が流れた。その無力感がきわまった瞬間、ぴたりとトールの震えが止まった。

じりっ、とジークに向かって、にじり寄った。むろん一斉に刃が体中に潜り込んでいる。

だがなお、じりじりとジークに飛びかかろうとするように、跳躍の姿勢になった。

その顔からは、もはや非人間的なまでに表情が消え失せている。

ジークに向かって飛びかかれば、その瞬間、五体をばらばらにされるだけだった。

だがそれでも、最後の力で剣をジークに向かって投げ放つことは出来るかもしれない。

あるいはそれも出来ずに、ただ八つ裂きにされるだけかもしれなかった。

それでもその目で、相手に殺意を届けることは出来る。あるいは気配で殺意を知らせることは出来る。相手を殺そうとする思いを、最後の最後まで全身で知らしめるのだ。

無力さの中で、己(おのれ)の全存在を懸(か)けて、相手を否定(ひてい)する——これほど純然(じゅんぜん)たる殺意もない。
凄魔(ギルト)たちが、そのトールの殺意に反応(はんのう)し、じわりと刃(やいば)に力を入れた。その刃に、トールの血が、ぬるぬると垂(た)れ落ちてゆく。トールの頬も首も真(ま)っ赤(か)だった。黒衣のせいで分からないが、もはやその全身が赤く濡(ぬ)れていそうだった。
そのトールを、ジークは、無言で見つめている。かと思うと、さっと左腕を振(ふ)るった。
その瞬間(しゅんかん)、トールは、自分が細切れに切り刻まれながらも跳躍するところを想像(そうぞう)した。
だが、そうはならなかった。全身にあった刃の感触(かんしょく)が、一瞬で消えたのだ。ジークが、凄魔(ギルト)たちを退(ひ)かせていた。残念そうな唸(うな)り声とともに凄魔(ギルト)たちが風のごとく部屋から消え、トールは思わずその場にへたり込みそうになるのを、やっとのことでこらえた。
部屋には、ロムルスとトールとジークだけになった。そして、ジークが淡々(たんたん)と言った。
「一度だけ、機会をやる。殺してみろ」
トールがぽかんとなった。まだ聖咎の剣(インドルガンツィア)はトールの手にあるのだ。先ほどは体中が刃に囲まれていた。だが素手(すで)のジークを前にした状態で、それ以上に幼児扱いされていた。
トールは、全身の血管が、急に温度を下げたような気さえした。憤怒(ふんぬ)と憎悪(ぞうお)と殺意が、荒(あ)れ狂(くる)うのではなく、ぴたりとトールそのものになった。相手が素手だろうと何だろうと、自分と同じような恐怖を味わわせた上で、無惨(むざん)に殺す。むしろ冷静に、そう考えた。

だがトールは長いこと動けなかった。やがてその手がわなわなと震え始めた。瞼が千切れんばかりに開かれてゆく。動けなかった。全く動けなかった。なぜ動けないのか。
「どうした。ドルク・ヴュラードの息子」
静かに、ジークが、言った。その痛烈な言葉にも、トールはまるで行動出来ない。
「相手の目を見て戦うのは初めてか」
その一言が、トールの魂に突き刺さった。全くその通りだった。ジークの苛烈な眼差しは、今や完全に隙を消し、トールが飛び込むべき盲点を失わせていたのだ。
気配を消し、忍び寄って殺す。それがトールの戦法だ。それ以外に知らないのだ。それは殺すということでさえなかった。掻き切り、突き刺す。ただそれだけで人は死ぬ。
「正面から来い」
ジークが声を放った途端、トールの体が大きくのけぞった。これまで人の横や背後から刃を振るったことはあったが、真正面から戦いを挑んだことなど一度もなかった。
すっとジークが近寄った。トールは微動だに出来ない。そのトールのすぐ目の前に、ジークが立った。まるで巨大な壁だった。どんなに鋭い刃でも斬れないものが眼前にあった。
「父さん……」
トールが呆然と言った。完全に無意識だった。目の前のジークの姿が、今、綺麗に、父

ドルク・ヴュラードと重なっていた。
ぱちり。いきなり音がした。何かと思ったら、ジークが右手の籠手を外しているのだ。
いったいなぜそんなことをするのか。——答えはすぐに分かった。
「ドルク・ヴュラードは、死ぬときに、お前と、戦士の家族のことを、口にした」
ジークが、拳を振り上げた。トールは、ただ震えながら、それを見るばかりである。
「ドルク・ヴュラードは、お前のために命を捧げた」
トールの手が力無く剣を放した。同時にジークの素肌の拳がトールの顔面をぶん殴った。
一瞬、トールの左半面が大きくひしゃげたようになり、鼻血が弧を描いて飛んだ。
トールの体は、書斎の入り口にすっ飛んでいった。文机と一緒にもんどり打って倒れ、そのまま仰向けに手足を伸ばした状態で、今度こそ本当にぴくりとも動かなくなった。
「父親に謝れ」
ジークが言って、ぱちりと、腕に籠手をはめ直した。

「なぜ、ここに……ジーク……」
ロムルスが朦朧とした声で呼んだ。ジークは答えず、
「俺が、全てを闇に葬る——この地で叛逆の計画などなかったことになる」

鋭く告げながら、手早くロムルスの傷を止血していった。
「頼む……行かせてくれ……。このままでは、この地が、戦場に……」
だがジークは手を止めず、静かに訊いた。
「叛逆の理由は、奥方ですか……」
ロムルスが息をのんだ。たちまち、その目に、苦悶の涙が溢れ出した。
「そうだ……。この地に和平が成って……しばらくして、聖法庁の者が、暗殺者を放ったのだ。我らを……我が家族を狙って……。イルミナは……レオニスを庇って殺された」
その手が、ジークの腕をつかみ、握りしめた。
「完全に隙を突かれた……和平が成って安心していた。守ってきた……守り続けてきたものを……たった一瞬で……」
ぶるぶるとその手が震えた。その頬を涙に濡らし、
「憎かった……暗殺者も、それを放った者どもも、ひそかに見つけて殺した。だが憎しみが消えぬ。民に遺恨を忘れろと言ったわしが……聖法庁そのものが憎くてたまらぬのだ」
その目が、ひたと、すがるようにジークを見た。
「お前は……超えられるのか……。憎しみを超えられるのか……」
ジークは答えず、ただ、ロムルスの手に手を重ね、強く握りしめた。

「この地を戦場にはさせない。すぐに決着は付く。ここにいて下さい」
ロムルスをソファに横たえると、今度はトールの様子を見に書斎に入った。
トールは完全に気絶しているが、念のため、手足をそこらの布で手早く縛った。
それから、さっと立ち上がって壁の一隅を見た瞬間、
「な――」
そこにあるものに、さしものジークが、愕然と息を呑んでいた。
「見たのか、ジーク……」
書斎の外から、ロムルスの力無い声が届いてきた。
「それが、花の下に埋もれた、もう一つの真実だ……」
ジークは何とも応えられず、ただその肖像画に描かれた女性から目が離せぬまま、
「ノヴィア……」
呆然と、その名を口にしていた。

# 第五章　見守る者／歩む怪物

「両手の指を、こういう風に立てるのよ。それで視野を区切るの」
ノヴィアが、両手の人差し指を立てて、丘の上から、街道に目を向けていた。
「い、いや……ノヴィア、今更そんなことしたって、意味無いってば」
アリスハートがおたおたして言う。すぐ向こうに騎兵の迫り来る様子が見えるのだ。
だがノヴィアは、この地に三方から迫る騎士団と、迎え撃つこの地の兵とを、それぞれ見ているのだった。それらの大まかな数や位置などをアリスハートに告げ、
「ジーク様に伝えて。私は、あの人たちを止めるから」
「と……止めるって……、大丈夫ぅ？」
「手を振れば止まってくれるわよ。ジーク様は、城の北側の二階にいるわ」
「わ、分かったけど……ノヴィアぁ、無茶しちゃ駄目よぉ」
アリスハートが心配げにわめきながら、大急ぎで飛んでゆく。
ノヴィアは深呼吸して、丘を下りた。足が震えている。本当は怖くてたまらなかった。

戦意を剝き出しにして迫る騎兵がそう簡単に止まるものではないのだ。
「矢が……見えます」
だが本当に怖いのは、この自分の力がきちんと正確に使えるかだった。
黄金の矢が宙に浮かんだ。だがまだ放たない。更にその矢を見た。矢が大きくなり、尖端が幾重にも重なって巨大な棘のようになる。もはや槍といっていい状態だった。
また一つ深呼吸した。騎士団がすぐ先に現れた。刹那、閃光のごとく矢が迅った。
疾駆する騎士たちが、前方から飛来する輝きに啞然となった。しかもそれが隊列の隙間を縫って、じぐざぐに飛び、馬の首をかすめ、全ての騎士の眼前を通り過ぎていったのだ。
たちまち隊列が乱れ、空気に残る金色のきらめきに呆然となる。けが人はいない。各部隊の指揮官が、隊列を戻そうと怒鳴り声を上げた。するとそこへ、
「ここから先へは行ってては駄目です！」
ノヴィアが駆け寄ってきて、大きく両手を広げて道を塞ぐ真似をしてみせたものだ。
先頭の騎士たちが、ぽかんとなった。その一人が、兜の面頰を上げた。
「こりゃあ驚いた。ジークの従士か。さっきの光は、あんたの仕業かい」
なんとこの地に来るとき立ち寄った砦の、騎士団長である。これにはノヴィアも驚いた。
「団長様だったんですか……兜の中までは見ませんでした」

「ジークとあんたが捕らえられた上、情勢危急なりっていう報告が来たんだが……」
「わ、わざと捕まったんです。ご心配おかけして申し訳ありません」
ノヴィアがぺこりと頭を下げる。騎士団長が頰を掻きながら、
「……てことは、いったい誰がそんな報告を出したんだ？」
訝しげな調子で呟いた。その顔が、ふいに緊張に強ばった。ノヴィアがはっとなった。
「——方陣！　三個横列！」
騎士団長が叫んだ。たちまち騎士団が陣形を整え、ノヴィアが背後を振り返って愕然となった。丘の向こうから、聖地シャイオンの兵団が怒濤のように溢れ出してくるのだ。
「逃げろっ！　死ぬぞっ！」
騎士団長が喚いた。だがノヴィアは聞かない。きつくかぶりを振り、
「動かないで下さい！　動いたら……動いたら、先頭の人から矢で刺します！」
叫ぶや否や、溢れ出す兵団に向かって、走り出していた。
騎士団長が目を剝いた。先ほどの黄金の光は、巨大な矢だったのだ。
「矢だと……？」
「だ、団長……」
騎士たちがざわめいた。あんな小さな少女が、群がる兵団へと一人で駆けてゆくのだ。

動くなと言われて、とても、はい分かりましたと言えるような光景ではない。
「動くな！　一歩も動くな！」
騎士団長が怒鳴った。だが騎士たちにこの命令はまるで理解出来ない。口々にわめいた。
「見殺しにするんですか！　死にますよ、あの子！」
「馬鹿っ！　料理だ！　あの料理だ！　見てくれで判断するな！」
騎士団長自身、なんと言って良いか分からず、思わずそんなことを叫んでいた。
「そうか……あの料理か」
それで不思議と騎士たちが落ち着いた。騎士団長の方が呆れるほどだった。
「そ……そうだ、ジークの従士が動くなと言った！　だから動くな！　動くなよ！」
騎士たちが固唾を呑む中、ノヴィアはただ一人、押し寄せる兵へと向かっていった。

ジークは、かぶりを振って、壁の肖像画から身を引いていた。
改めて見れば、何もかもが違った。絵の女性は、ジークのよく知る少女に比べて遥かに年上だし、肌も髪の色も違う。またジーク自身、過去にイルミナの顔を見知っているのだ。
そのことを思い出すほどに、はっきり別人と認識されていった。
だが逆に、そうでもしないと見間違えそうなほど、雰囲気や顔立ちが似ているのだ。

「どう思う……ジークよ」
書斎の外で、ロムルスの弱々しい声がした。ジークはすぐに応えることが出来ず、
「似ていると思わぬか……。お前がこの地に連れてきた、あの少女に……」
「馬鹿な」
思わず、低く言い返していた。書斎の向こうから、ロムルスの声が小さく響いてきた。
「双子のうち、最初に生まれた子を、ヴラドの民の風習に従い、手放した。いや……わしが、無理やり奪ったのだ。イルミナは、泣いてた。ヴラドの民の風習は棄てた。聖法庁の民であるあなたと結ばれたのだと、双子を腕に抱いて離そうとしなかった……」
だが当時のロムルスには、どうすることも出来なかった。風習を無視し、対立する民の感情を刺激することは、そのときのロムルスにとっては自分と妻子の全員の死を意味した。
「殺しはしない……死んだことにしてひそかに里子に出す。そう説得して、悲しむイルミナの手から、産まれたばかりの子を取り上げたのだ。自分たちが生きるために……」
「しかし、なぜその子が〈銀の乙女〉に――」
「聖都に近い街の、養育院に預けた。その後〈銀の乙女〉に引き取られたと聞いた。以来……〈銀の乙女〉と聞くたび、心がひどく騒いだ……」
「だからといって、あいつが――」

「言ったであろう……ジークよ。聖性の継承には体の色が同じ方が望ましいと。肌や髪、そして目の色など……万里眼であればなおさら目の色が同じである方が良い。わざわざ、そういう子を選んで引き取ったのかもしれん」
「違う。あいつの母親は、フェリシテ・エルダーシャだ。あなたの子ではない」
ジークは思わず鋭く返していた。書斎の向こうで、ロムルスが苦しげに笑った。
「あの少女もそう言った……わしの子は、レオニスただ一人だと」
その口調が、かえってロムルスの確信を如実に表していた。
「だが何の確証も無い――あなたの子息と、あいつとでは、顔もまるで違う」
「全ての双子が、似ているわけではない。一方は元気に歩き、一方は車椅子から降りられぬことだってあろう……」
「だが――髪の色も、あなたやイルミナと違う」
ジークが、肖像画に目を走らせた。まるで他に違う点がないか探すような目だった。
そのジークに、ロムルスが静かに声を投げかけた。
「ドルク・ヴュラードだ」
「なに――？」
「あの少女の眼差しには、あのつわものの目の光に似たものがあると思わぬか」

今度こそジークは本心からかぶりを振っていた。あの凄烈なる戦士と、ジークのよく知る少女との間に、いかなる共通点があるというのか。
「髪だ、ジーク。お前はドルク・ヴュラードの髪を見たことは無いはずだ」
ジークは思わず、目の前の絵をまじまじと見ていた。イルミナは銀髪だった。だが――
「ドルク・ヴュラードが、髪を剃っていいたのは、疫病のためだ」
疫病が流行ったとき、ドルク・ヴュラードもその妻も病に伏した。
そして蓄髪は病に悪いという理由から、夫妻そろって髪を剃ったのだという。
医療の行き届かぬ者たちにとって、それは必死の作業だった。
「あの無双の英雄が、妻の美しい髪を剃るとき、生まれて初めて悲しみの涙を流したそうだ……。その妻は病に果てたが、ドルク・ヴュラードは生き残った。そして二度と髪を生やさず、代わりに頭に入れ墨を彫り、妻の遺髪を、最期まで懐に入れていた……」
「髪を……」
「そうだ、ジーク」
ロムルスが、言った。
「ドルク・ヴュラードは妹が銀髪なのに対し、あの少女と同じ髪の色をしていた――」

そのとき、ノヴィアが立ち止まった。押し寄せる兵たちを、きっと見据えた。
「この聖地で、戦ってはいけませんっ！」
兵たちが、行く手に立ちはだかる少女に驚いたが、その足を止めようとはしない。
むしろ相手がジークの従士と知って、手に手に剣を振りかざし、走り込んで来る。
ノヴィアの目に涙がにじんだ。怖いのではない。ただ悲しかった。大勢の戦士が死に、ようやく平和が訪れた聖地が、こうまでたやすく争乱に陥るのがひたすら悲しかった。
慌てて涙を拭い、ぎゅっと宝杖を握りしめ、兵から目を離した。
その淡く澄んだ紫の瞳が、ひたと天を見た。
「沢山の……沢山の矢が、見えます」
戦う者の眼差しで、言い放った。
次の瞬間、そこに現れた光景に、誰もが愕然と立ちすくんだ。
それはまさしく、黄金の雨だった。

「あの少女は、わしにとって、もはやヴラドの民の血統を受け継ぐ者としか思えぬ……。それはまた、イルミナの血と……そしてクレマチスの民であるわしの血を引く者だ……」
ロムルスが言った。横たわったまま、書斎から出てきたジークを、弱々しく見つめた。

「だが所詮、全ては、花の下に埋もれた過去だ……。これからの未来に何の影響も与えない、何の意味もないことだ……そうであろう、ジーク」
ジークがうなずいた。その一瞬で、この話の全てを、丸ごと胸の底に封じ込んでいた。
「俺が闇に葬る……この地の争乱と同じように」
ロムルスの出血で青ざめた頰に、かすかな笑みが浮かんだ。
「頼む……ジーク」
それを最後にジークが身を翻した。素早く剣を拾い、真っ直ぐバルコニーに出ると、地面に向かって風のように跳んでいた。そのジークの後を、凄魔たちが咆吼を上げて追った。

ロムルスが、大きく喘いで、ゆっくりと身を起こしていった。
手当のために甲冑は既に脱がされている。のろのろと立ち上がり、負傷した両脚を震わせながら、壁にかけられた剣へ、よろめくように歩み寄った。
「すまぬな……ジーク。すまぬ……名付けることさえ許されなかった我が子よ」
剣の柄を握りしめ、それを杖にして、歩み始めた。
「レオニス……」
その名を口にするロムルスの目が、凄まじいまでの眼光を帯びていた。

そこに現れた光景を、騎士団も、聖地シャイオンの兵も、息を呑んで見つめていた。

無数の、金に光る小さな矢が、ノヴィアが睨む天に出現し、切っ先を下にして、驟雨のごとく降り注いできたのであった。

その矢の雨の中に走り込んでしまった先頭の兵たちが、叫びを上げて転げ倒れた。

矢は小さく、即座に人の命を奪うほどの威力もない。だが当たり所が悪ければ死ぬし、腕やら足やらを貫かれて転げ回る兵の異様な叫びが、みなの――ノヴィアの耳を打った。

怖かった。たまらなく怖かった。だがそれに耐えてノヴィアは懸命に矢の雨を降らせた。

実際は、僅かに数秒の出来事である。だがかつて誰も見たことのないような光景が広がる数秒だった。その様に、兵が完全に圧倒され、ある地点でぴたりと進撃が止まっていた。負傷者は僅かに十数名。死者は無い。だがその有様が異様だった。地面にびっしりと突き刺さった黄金の矢の中でのたうち回っているのだ。やがて、ふっと矢が全て消え、

「戦わないで下さい！　戦ったら、もっと刺します！　もっと刺しますよ！」

悲鳴のような声が上がった。騎士も兵も、負傷者までもが、その言葉よりも、目の前で大声を上げて泣いている少女の姿に、ぽかんとなっていた。

「この聖地で戦ったらいけません！　ここはそういう場所でしょう！　そうでしょう！」

ノヴィアの叫びに、兵たちが一様に、はっと我に返ったようになった。僅かな間ののち、あちらで一人、こちらで一人と剣を棄て、やがて、みなが武器を手放していた。

くるりとノヴィアが背後を振り向いた。

「あなたたちも、武器を棄てて下さい！」

声を嗄らして泣き叫ぶ少女の声に、騎士団長の叫びが続いた。

「全軍下馬！　武器を置けっ！」

騎士の誰一人として、それに逆らう者はいなかった。

疾風のごとく堤防の上を走り抜けるジークと凄魔に、アリスハートが苦労して追いつき、

「ちょ、ちょっと、狼男っ、ほ、ほーこくっ、ノヴィアからの報告っ！」

ジークは、ひょいとアリスハートをつかみ、更に速度を上げて疾走しながら、言った。

「言え」

「こ、こらぁっ、つかむなっ、ぐぇっ……も、もっと、そっとつかめぇっ！」

涙目になってわめきつつ、アリスハートは、ようようノヴィアの言葉を伝え、

「よし、残りの兵は俺が止める。お前はノヴィアのもとに戻り、何かあれば連絡しろ」

言うなり、ぽいと、頭上に放り出された。くるくると舞って、やっと宙に浮かび、

「あ、あたしをもの扱いすんなぁっ！　もう誰が二度とこんなことするもんかぁーっ！」
力の限りに叫んだとき、既にジークは、堤防の向こうに消えている。
「お前なんか、水の中でふやけちゃえーっ、転んじゃえぇっ、カナヅチ狼男ぉっ！」
なおもわめいたそのとき、彼方で恐ろしいものが上がった。それは炎の壁だった。
耕作地に火を放ち、城壁代わりにしたのである。しかも炎の向こうでは鬨の声が聞こえ始めている。たった今まで平和だった土地が、瞬く間に、戦場と化してゆくのだ。
「う、うわ……い、急げぇっ！　急いで走れぇっ、狼男ぉっ！」
思わず、ジークの走り去った方角に向かって、叫んでいるアリスハートだった。

「二つ目……」
ひょいとレオニスが手を上げて呟く。その直後に、耕地に炎が上がった。
「そう……そのまま敵を街の北に誘い込むんだ。そこでこちらの主力とぶつける」
好奇心に輝く目を、眼下の街並みへと向けた。喜びと興奮に頬を紅潮させ、
「こんな楽しいときに、トールは何をしてるんだろう……」
そう呟いたとき、誰かが部屋に入ってきた。レオニスはテラスから部屋を振り返り、
「トール……？」

そう呼んだままの姿勢で、凍りついた。
「ままごとのごとき軍令をよくも出しおったわ……戦さを遊戯と見るか、愚か者が」
そこに、腹と両脚の傷から血を流しながら、剣を手に立つロムルスが、いた。
「ち……」
父上――と言おうとしたが、声が出なかった。
「覇気を込めて喋れぬか！」
出血で蒼白になりながらの、凄まじい怒声であった。レオニスの総身がびくっと震えた。
ロムルスが、ぎろりと、レオニスの首にかけられた、領主を表す紋章を睨み、
「古くからの廷臣に、もっとお前を監視するよう命じる手紙を遺してある。領主としての義務を、骨の髄まで叩き込んでもらうがいい」
そう言いながら、血まみれの脚を引きずって、近づいてくる。
レオニスは硬直した。かろうじて、車椅子の後ろに震える手をやった。
「よもや、脚が思うように動かぬことが……これほどの苦痛だったとは。それも分からず、ずいぶんと、お前に、辛くあたってしまったものだ……」
ふいに、ロムルスが、優しいとさえ言える声音になった。
「ち、父上……」

レオニスの手が、車椅子の後ろにあるものを必死でまさぐり、つかんだ。
刹那、ロムルスの顔に、凄まじいまでの怒りの表情が浮かび、剣を高く振りかぶった。
「修羅の道に入りたければ、最後にそれを教えてくれるぞ、レオニス！」
猛然と斬り下ろされる剣に、レオニスが無我夢中で、つかんだものを振り上げた。
鮮やかなほどの金属音とともに、ロムルスの剣が、綺麗に弾き返された。
ジェルミナル家に伝わる宝剣——それが鞘から抜かれて、レオニスの手に握られ、続けざまに襲いかかるロムルスの剣を、ことごとく受け弾いたのだった。
車椅子に乗った少年が、物の見事に剣を振るうさまに、ロムルスが笑みを浮かべた。
宝剣に刻まれた聖印が、今やレオニスを守護するべく輝いているのだ。
「大した聖性の使い手だ……剣が勝手に動き、我が剣を弾くか……」
「そうだ……。僕は強い……！　もう、僕は、あんたの息子でも何でもない！」
レオニスが、言い放った。その目に、爛々と喜悦の光がやどっている。
「僕が、聖地シャイオンの新領主だ！　この土地をどうしようが、僕の勝手だ！」
かっとロムルスが目を見開き、凄まじい形相になった。
「よくぞ言った！　その邪悪な性根を、我が命に懸けて切り払ってくれるわ！」
ロムルスが、じりっとレオニスに近づく。ふいに、レオニスが薄く笑った。

「もう遅いよ……。誰にも勝てないものが、もう目覚める頃だ……」
そう告げるレオニスの背後で、突然、何かが白く輝きを放った。
ロムルスが、レオニスから、その向こうの湖へと視界を移し、愕然となった。
湖全体が、陽光を映す鏡のごとく輝き、その水底から何かを現そうとしているのだ。
「レオニス……貴様、まさか――」
ロムルスが、戦慄の顔で、目の前の我が子を見やった。
レオニスが、真っ向からロムルスを見返し、笑った。
「そう……シャイオンの怪物さ」
その面に、ぞくりとするような、妖しい微笑を浮かべていた。

二つの騎士団が、炎の壁を迂回しながら合流し、陣を構えて立ち塞がる聖地シャイオンの兵団へと突撃していった。ちょうど、ノヴィアが止めたときと逆の様相である。
両者が激突するかに見えたそのとき、突如として、炎の壁を突き破り、両者の間に飛び出すものがあった。ジークと凄魔の群である。凄魔が、その身を炎で焦がしながら、燃えさかる穂を切り払い、ジークのために道を作ったのだ。

その炎の道を、ジークは、かつての争乱で死んだ無数の魂が上げる、慟哭の声とともに走り抜けた。そして渦巻く堕気の風を巻かせて跳び、
「ジーク・ヴァールハイトが招く！」
宙でその左腕に雷花を迸らせ、着地しざま左手を激烈に地面に叩きつけた。
「絶望の魂よ！　冥刻星の連なりの下、哭魔ブラスフェミーとなりて雪崩れ込め！」
地中から吹き荒れる青白い稲妻とともに、赤黒い風船のごとき魔兵が続々と現れ、
「牡羊座の陣――！」
刹那、ジークの周囲で、立て続けに哭魔自身が光を放ち、木っ端微塵に爆発した。
立て続けに激しい土煙が舞い上がり、騎士団が慌てて恐慌する馬を宥め、降り注ぐ土砂の雨を浴びながら、爆発を回避してゆく。
濛々たる砂塵がようよう収まると、そこに、魔兵を率いて立つジークの姿があった。
騎士団に対しては哭魔の群が、兵団に対しては凄魔の群が、立ちはだかり、
「双方、手を引けっ！　この地を無用の争乱で汚すなっ！」
ジークの烈声に、騎士団も兵も震え上がった。それ以前に、眼前に起きた凄まじいまでの爆撃が、まさしく両者の戦意のみを、粉々に吹き飛ばしていたのだった。
「戦う者は、この地で命を落とした無数の死者が滅ぼす！」

哭魔の群が、ぞろぞろと近づく様子を見せるのへ、慌てて騎士団が後退する。
「シャイオンの兵よ、旧領主は既に戦いを諦めた！　武器を棄てろ！」
その言葉に、陣を構えていた兵団が、一斉に呆けたように剣を下げた。
「……いったいこれはどうなっているのですか」
騎士の一人が声をかける。ジークは鋭く言った。
「この地の危機は、既に回避されたということだ。これ以上、何も起こりはしない」
そのとき——
壮絶な咆吼が、頭上から轟々と降り注いできた。馬が一斉に怯えていななき、
「な、なんだ、あれは——！」
燃えさかる炎の向こうで、巨大なものが立ち上がるさまに、騎士も兵も恐怖に陥った。
ジークは、信じがたい思いで、その巨大なものを見上げた。
「〈刻の竜頭〉……」
それこそまさしく、シャイオンの湖に眠る、怪物であった。
「なっ、なっ、なにあれっ、あの化け物ぉっ！　ノヴィアぁっ！」
アリスハートがわめきながらすっ飛んできた。

ノヴィアも呆然となって、湖から立ち上がるその巨大な怪物を見ている。
それは、出来損ないの体を引きずる怪物だった。骨格に赤黒い肉体をはりつけた姿で、しぶきをあげて湖から上がってくる。全身に赤くあぶくを立て、歩くごとに体が生まれてゆくらしい。足と腕がどろどろと不定形に形作られ、泥のような尾を引きずり、巨大な爬虫類じみた顔に、虹彩のない白い目が無数に生えては、ぶつりと潰れて落ちる。
それが、かっと巨大な牙を剥き、咆吼を上げて耕地に入るや――
たちまちのうちに、作物が枯れ果て、その周囲に堕気が吹き荒れるのだった。
「……命を……魂を食べてるの」
息をのむようにしてノヴィアがその様子を見る。その目が、はっと驚きに見開かれ、
「ジーク様――！」
同時に、幾つかの轟音が、怪物のいる辺りで響いた。
哭魔が自爆して怪物の足の一部を吹き飛ばしたのだ。怪物が、向きを変えた。街に向かっていた怪物を、ジークが己の身をもって引き寄せ、街から遠ざけようとしているのだ。
それを見て取ったノヴィアは、物も言わずに走り出していた。
「ノ、ノヴィアあっ、無茶だってばぁっ！」
ノヴィアがジークの下へと行くのを察して、アリスハートが慌てて後を追いかける。

その様子に、他の者達が引き込まれたようになった。

騎士団長が真っ先に武器を拾うと、馬に乗ってノヴィアの傍らに走り寄せた。

「おい、馬の方が早いぞ！」

その鞍の前にノヴィアが乗り、馬が走り始めると、兵団と騎士団が急いで武器を拾い、戦おうとしていた両者が一丸となって、怪物の方へ向かっていたのだった。

「怪物だ――！　怪物が現れた！　シャイオンの怪物が目覚めて現れたんだ！」

レオニスが歓喜の声を上げた。その笑顔が、もはや陶然としたものになっている。

「レオニス……何ということを。なぜ目覚めさせた！　あれは操れはせんぞ！」

ロムルスが、わななきながらレオニスに向き直り、怒りを込めて叫んだ。

「〈竜骸〉の秘儀は、ドラクロワから授けられた秘儀中の秘儀だ。あれを真に操ることはまだドラクロワ自身にも出来ておらぬ。だからこそ湖に封じたものを……」

「知らないよ。僕はずっと待っていたんだ。あいつが現れてこの世を滅ぼすのを」

レオニスが笑って言った。あどけないとさえいえる笑顔だった。

「あの怪物に餌を与えるために、街中の墓から死体を掘り返して与えたよ。色々な動物を殺して与えた。街で病人や怪我人が死ぬたびに、こっそり死体を与えたんだ。あれは命や

魂の堕気を食らって成長する。目覚めさせるのに、一年かかったよ」
「なぜだ……なぜ、あんなものを……なぜ街を戦場に……なぜだ……レオニス」
レオニスが、きっと父親を睨みつけた。
「あんたが悪いんだ！　僕みたいな子をこの世に生み出した、あんたが！」
嘲弄のこもった声音を放った。本心からそう思い、目の前の父親を罵倒していた。
「生まれたことを恨んだ！　何度も恨んだ！　恨んで生きてきた！」
そう叫びながら、泣き顔とも笑い顔ともつかぬ表情になってゆく。かと思うと、
「生きてる奴らなんかみんな価値がない。つまらないんだよ。なんで怪物を作り出したかって？　なんで街を戦場にしたいかって？」
全ての感情を歪ませ、ぞっとするような笑みを浮かべた。
「見たかったんだよ。面白いじゃないか。生きてる人間が、目の前でばたばた死んでいくだなんて。命なんてみんな消えて、あの怪物に食われればいいんだ」
そう言って大声で笑った。鮮烈なまでの邪悪な笑顔だった。のけぞった白い喉笛がひどく滑らかで、笑顔だけ見れば、無邪気に花が咲くような様子だった。
ロムルスの顔に、驚愕と恐れと、そして虫酸の走るような表情が浮かんだ。
その顔を見て、レオニスが更に笑った。たまらなくおかしそうな笑い声だった。

「あんたのその顔が見たかったんだよ！」
そう言い放った瞬間、ロムルスが、静かに全ての表情を消した。
「……哀れな子だ」
すっと剣を掲げ、むしろ淡々と呟いた。
「お前こそが、怪物だ……レオニス」
レオニスの笑いがぴたりとやんだ。嘲笑するような目で、ロムルスを見た。
「手足を切って痛みを教えようと思ったが……それが駄目ならば、命を教える他ない」
ロムルスの剣に、それまでになかった殺気が満ちた。レオニスが、宝剣を構え、叫んだ。
「殺してみろっ！　殺してやるっ！」
その聖印の輝きをひたと見つめ、ロムルスが剣をなぎ払ってきた。
レオニスの宝剣が、すぐさまそれを受け、更に次の斬撃で、ロムルスの剣を斬り砕いている。そして次の瞬間、ひゅっと空を切って、勝手に動いた宝剣がロムルスの腹を抉った。
「あ……」
レオニスが、気の抜けた声を漏らした。
ロムルスが、ひょいと折れた剣を放った。気づけばもう一方の手が、腹を抉る刃を握りしめている。それだけの動作で、わざと刃を己の身に受けたことが明らかだった。

「これが命だ」
ロムルスが蒼白の顔で言った。かつてドルク・ヴュラードがジークとの戦いでしたように、そのまま真っ直ぐレオニスに向かって踏み出し、刃にその身を貫かせていった。
レオニスがびくっとなった。その手に何か熱いものが触れたからだ。その熱いものが刃にしたたり、手に絡まって、膝の上にこぼれ落ちた。血だった。赤い鮮血だった。
「これが命だ」
ロムルスがまた言った。その体がどんどんレオニスの方へ近づいてくる。
レオニスが呆けたような表情になった。ごぼっとロムルスの喉が鳴り、血反吐が溢れ、レオニスの金銀の髪の上に大量に浴びせかけられた。血臭でレオニスの息が詰まった。
「これが命だ」
ロムルスが言った瞬間、レオニスが叫びを上げた。幼児が上げるような悲鳴だった。
宝剣を離そうとするレオニスの手を、しっかりとロムルスの右手がつかみとめた。
「これが命だ」
言いながら、ロムルスのもう一方の手が、刃を握り、己の腹を、真横に引き裂いた。
レオニスは泣き叫び、滅茶苦茶にもがきながら逃げようとした。だが宝剣から手を離させてもらえず、刃が父の腹を割く感触が、じかにその手に伝わってくる。

「これが命だ――レオニス。お前がこの地で守るべきものだ」
肌が火膨れを起こしそうなほどの熱さをもって、レオニスの両手が、父の血に染まった。
「やめて、死んじゃう、死んじゃう、死んじゃうよ、父さん！」
レオニスが絶叫した。もはや相手が死ぬのか、自分が殺されるのかも分からなくなっていた。自分が父を幼かった頃のように呼んでいるなど意識にもなくひたすら泣き叫んだ。
ふいに、レオニスの手を締め付けていた父の手が、離れた。
刃を握る手も離れ、その無骨な両手が、ゆっくりとレオニスの肩を抱き、引き寄せた。
「これが、命だ」
父の腕が、レオニスの背に回され、その体を持ち上げた。頰が、父の胸に押しつけられ、気づけばレオニスは、その手で父を刺し貫いたまま、ひどく優しく、抱きしめられていた。

怪物の肩がぶくりと膨れ上がり、凄まじい悪臭をまき散らして破裂した。
その肉片が地に落ちるや、爆弾でも落ちたかのように爆発している。
そしてその肉片を避けながら、ジークが、哭魔を招き出し、怪物に食らわせていた。
自爆させるのではない。怪物がそれを牙で食らい、飲み込むのだ。

ジークの周囲ではおうおうと堕気の風が吹き荒れ、それらが全て怪物へと雪崩れ込んでゆくようだった。そして怪物の身を内側から膨れさせ、破裂を呼んでいるのだ。
同時に、しきりにジークがその身をもって怪物を誘い、街から遠ざけようとする。
だがふいに、怪物が、それまでとは違う方向を向いた。そちらを見やって、ジークが愕然となった。ノヴィアを乗せた騎士が走り寄せ、その背後には騎士団と兵団がついてきているのだ。彼らの方へ、怪物が、ずるずると体を引きずって歩いてゆく。
「来るな！」
ジークが叫ぶと同時に、凄魔が走り寄せ、一列になって彼らの行く手を止めている。
だが、さっとノヴィアは馬を降り、走った。凄魔がかっと牙を剝くが、まるで怖がらず、ジークのもとへとひた走ってゆく。その胸にはアリスハートがおり、
「こ、怖いよっ、ここ怖いよぉっ」
「ノヴィア、なぜここに来たっ！」
叫びながらも、ノヴィアの服の襟にしがみついて逃げようとはしない。
ジークが叫ぶや、ノヴィアが一瞬、びくっとなり、ついで、敢然と言い放った。
「わ……私が、あの怪物の足を、見ます」
「なに――？」

「あの怪物を街から離そうとしているのでしょう……」
だが怪物自身が、半端な体のせいで上手く歩けないのだ。それをノヴィアが補おうというのである。ジークはノヴィアを見つめた。本当にそんなことが出来るのか疑問だった。
「あの怪物に対してなら……出来る気がするんです」
そう口にしたところで、怪物が咆吼を上げて、こちらに巨大な顔を向けてきた。
すぐさまジークが左腕にノヴィアを抱えて走った。その背後で、冒瀆魔が爆発し、怪物を牽制している。だがすぐに、怪物はジークの方へ顔を向けようとする。いや――
「ノヴィアの聖性に引かれているのか……」
その証拠に、怪物は、もはや騎士や兵士の方は見向きもしない。
かと思うと、怪物が自分自身のどろどろした体に滑り、地響きを上げて横倒しになった。
倒れたまま、天に向かって、かっと牙を剝き、烈しく咆吼を発した。
まともに歩むことも出来ぬ我が身に、限りない憎悪を抱くような吠え声であった。
自分が生まれてきたことそのものを呪い、罵るかのような雄叫びが、一帯に轟き渡った。
「ひいぇえええ……嫌だぁ、もうあれに食べられるのだけは嫌だぁぁあ」
アリスハートはがたがた震えながら、ノヴィアの法衣の襟にしがみついている。
「この先に、大きな川があります。周辺に民家はありません」

ノヴィアが恐怖に青ざめながらも、ジークに抱きかかえられたまま、方角を指さし、
「そこで爆発させれば——私たちも、水の中に入ってそれをさけられます」
「なぜ、分かった——？」
「え——？」
「俺がやろうとしていることだ」
「何となく……怪物を見て、ジーク様の動きを見ているうちに……」
そこで、ノヴィアがひょいと地面に下ろされた。
怪物は、叫びを上げながら、ずるずるといびつな体を引きずって、こちらに這い寄って来ている。必死に進むその姿に、ノヴィアは見るのが耐え難いほどの憐れみを感じた。
もう一人の自分——誰かがそういう声が聞こえた。湖の中に沈む、もう一人の自分が目覚めて現れるのを、ずっと待っているのだと。
そのとき初めて、ノヴィアは、あの怪物を、レオニスそのもののように思っている自分に気づいた。だからこそ怪物が歩くさまを見ることが出来るという思いが湧くのだ。
それは何の根拠もない、ただ強い感情による確信だった。まるで、継承式で、レオニスが領主の座への階段を登るときにしてやれなかったことを、今ここで試すかのように——生まれてしまった苦痛にのたうち回る怪物への、深く胸に染みこむような悲しみが、何の

確証も無いまま、ノヴィアを突き動かそうとしていた。
「あの地点で爆発させる。良いな。お前は、俺が来るまで、その辺りにいろ」
ジークが川の堤の一点を示して言った。
「俺は、あれの体がこれ以上大きく育つ前に、堕気を注ぎ込んで限界まで膨らませる」
「はい、私が自分の方へ、あの怪物を歩ませます」
ジークがうなずき、さっと身を翻して、剣を手に、怪物へ走り寄せていった。
ノヴィアは、ジークが示した方へ駆けてゆき、堤の前でくるっと怪物を振り返る。
恐怖に震え上がるアリスハートを胸に抱き、宝杖を握りしめ、ひたと怪物を見た。
「あなたが歩いている姿が……見えます」
怪物に、変化はない。ノヴィアは、懸命になって怪物の歩むさまを幻視し、
「あなたが歩いている姿が見えます……レオニス」
ほとんど無意識に、囁きかけるようにして、その名を告げていた。
そしてにわかに——怪物のどろどろとしていた足が、少しずつ形を帯びていった。
かつて別の怪物が、アリスハートを食らって形状を得たのと同じように——今、堕気の
塊であるそれが、ノヴィアの眼差しによる聖性を受けて初めて、形を成していったのだ。
それは、真っ白い、いかにも滑らかな足であった。不定形なまま暴れ狂う爬虫類のよう

な姿の中で、その両足だけが、異常に綺麗に伸びてゆく。
怪物が、大きく足を踏み出した。ずしり。その足が、地響きを上げて地面を踏んだ。ずしり。ゆっくりと、確かに、その足が、二歩目を踏み、そして三歩目を進んだ。
怪物が雄叫びを上げた。先ほどのものとは違い、明らかな歓喜の響きがあった。
その怪物が、ノヴィアに向かって更に歩もうとするや、
「乙女座の陣――！」
ジークが苛烈に剣を振るって、哭魔に命じ、怪物を完全に包囲させていた。
たちまち四方八方で爆撃が起こった。怪物の体を削り、出来かけの足を歪ませる。怪物が怒りの叫びを上げてかっと牙を剥いた。一部の哭魔が、ジークに命じられるまでもなく、自ら飛び込んで怪物に食われ、また一方ではひっきりなしに周囲で爆撃を起こした。
ノヴィアに近づこうとする怪物が、そこで完全に足止めを食らうかたちとなった。
やがて怪物が、哭魔を指揮するジークの姿を、はっきりとみとめた。憤怒の声を上げて、巨大な顎を開き、ジークに躍りかかってきた。顔面から地面に突っ込む怪物の顎を間一髪でかわし、その額へと、ジークがすかさず身をひねって跳び、存分に斬っている。
白濁した目玉が、幾つも真っ二つに割れ、どろっとした液体をまき散らした。
怪物が苦悶の声を上げて顔をのけぞらせた。かといって周囲の爆撃のせいで逃げること

も出来ず、ぶくぶくと顔中に目玉を生やすと、ジークに向かってまた躍りかかった。それをすかさずかわし、ジークが斬りつけるということが何度となく繰り返された。ノヴィアに到達するためには、否応なくジークという壁を越えねばならないのである。斬りつけられては、哀しい声を上げてジークを越えようとする怪物を、ノヴィアが一心に見ていた。自分が無理やり怪物を歩ませ、傷つけさせているのだということが、ひどく悲しかった。ひたすら怪物が歩むさまを見続け、その足を作るための聖性を分け与えた。

怪物に出来るのは、ジークではなく、自分から飛び込んでくる哭魔を食らうことだけである。やがて怪物の姿が徐々に大きく膨らみ、哭魔と同じような形状になっていった。ぶつっ。怪物の右腕が千切れ跳び、地面に落ちた瞬間、爆発した。更に左腕が根本からはじけ、吹き飛んだ。ぐつぐつと全身を煮立たせながら、それでも怪物は、哭魔を食らい、ジークに躍りかかり、ノヴィアのいるところへ到達しようとする。

そしてその動きが鈍くなり、加速度的に膨らみ始めた。それを見て、ジークが素早く哭魔の包囲を一か所だけ解かせる。そしてすぐに身を転じ、走り出していた。

怪物が、咆吼を上げて、その包囲が解かれた箇所へと進んだ。

すなわち、ジークが走り去る方向であり、そしてその向こうには、ノヴィアがいる。

怪物が、地鳴りを上げて歩みゆき、体を前へ前へと傾がせた。かと思うと、にわかに、

その巨体が、猛然と走り始めていた。まさしく驀進だった。歓喜の声を上げ、顔を左右に振りまくりながら、身も凍るような地響きを立てて信じがたい勢いで突進してくるのだ。
アリスハートが言葉にならぬ悲鳴を上げた。ノヴィアも、息を呑んで、恐怖と——身を貫くような悲しみに、立ちすくんだようになる。
「ノヴィアっ！」
ジークが目前に迫った。かと思うと、ノヴィアの体がふわりと抱え上げられている。
さながら風が連れ去るかのように、軽々とノヴィアを抱えてジークが疾走した。
怪物が、金切り声を上げた。ノヴィアがジークに連れてゆかれることに、耐え難いまでの憎悪と悲痛を抱くかのように、雄叫びを上げて追いすがってくる。
疾走するジークのすぐ背後に、怪物の巨大な顔が迫った。その顔が左右に振られるたびに、無数の白い目から、どろどろとした液体が振り零され、まるで巨大でいびつな幼児が、走りながら泣きわめいているような有様であった。
「き、来たっ、来たっ、……って、うううっわぁーっ!?」
アリスハートが、怪物に負けず劣らず悲鳴を上げた。その瞬間、ジークの頭上を暗い影が覆っている。ジークもノヴィアも、そちらを見ずとも、怪物が何をしたのかが分かった。
怪物が、跳んだのだ。ノヴィアを抱いて走るジーク目掛けて跳びかかり、その巨体が、

大きく宙に浮かんで、今、頭上から降って来ようとしているのだった。

ノヴィアが戦慄とともにそう悟った刹那、ジークもまた、一挙に堤を駆け上がり、川岸を蹴って、跳躍していた。

そのジークの僅か後ろの頭上で、突然、怪物の全身が、宙で、ぶくりと膨れ上がった。まるで、怪物自身の憎悪と悲しみで、全身が火膨れになったような姿だった。

その怪物へと、哭魔の群が宙を跳んで殺到し、背後から雪崩れ込んでゆく。

その一瞬後、ジークは、ノヴィアとアリスハートとともに、川の流れの中に没している。

怪物が、川の一歩手前へと落下し、堤にぶつかるかに見えたとき——怪物の中の堕気が一挙に凝縮し、目の眩むような閃光を放った。次の瞬間、哭魔の群とともに、天を割らんばかりの大音響を上げて、吹っ飛んでいた。高く火柱が上がり、爆風が耕地を焼き払い、名も無き怪物は、壮絶な爪痕を残してこの世から微塵となって消え去ったのだった。

その様子を、騎士や兵たちが、遠間から呆然と見届けた。そして、川の下流からジークたちが姿を現すと、みな一斉に歓声を上げて喜び合った。

「ううう……怖かったぁ、怖かったよぉ……」

アリスハートが、ノヴィアの胸元で泣き声を上げた。

ノヴィアはずぶ濡れになった姿で、ジークの首にしがみついている。

ジークはノヴィアを抱いたまま、一方の手に剣を握り、それを杖にして川縁に上がった。
そこから、上流から今いるところにまで及ぶ、吹き飛んだ大地を見つめた。
堤は粉々になって川の水を溢れさせ、爆発が起こった川の表面には湯気さえ立ち、焼けこげた大地の上を、一面の黒い灰と火の粉が飛び交っている。その様子を見渡しながら、
「――泣いているのか」
ぽつりと、ジークが、訊いた。
「はい……」
ノヴィアが、震えながら答えた。あの怪物の死が、無性に悲しかった。そしてまた、どこかで一人の少年が、同じような悲しみを抱いている気がした。それは、それまで心が抱いていたものが急に無くなり、全てが一変したときの、淡く透明に澄んだ悲しみだった。
ノヴィアは、ジークの肩に顔を押しつけたまま、ひどく長いこと泣き続けた。

レオニスの体が、ゆっくりとおろされていった。
抱きしめられていた腕の力が失われ、レオニスを解放した。
レオニスは、黙って、自分の膝の上でくずおれるロムルスの体を見た。
ロムルスの頭が、力無くレオニスの胸に寄りかかり、その体に、かつて感じたことのな

い、沈むような重さが生じていった。
レオニスの体を灼くようだった父の血も、いつしか嘘のように冷えてゆき、時間が経つにつれ、それは、心にさえ、しんと冷たいものを感じさせるものになっていった。
温度とともに、何かが失われてゆくのが、分かった。
それが命だ、と心のどこかが囁いた。
剣の柄から、おずおずと手を離し、力を込めて、ロムルスの体の下から引き抜いた。
その血まみれの両手で、そっと、ロムルスの肩に触れた。その首に触れ、頭に触れた。
少しだけ力を込めて、頭を抱いた。
「父さん……」
まだ母が生きていた頃の、父が今のように冷厳ではなかった頃の呼び方で、呼んだ。
返事は無い。
レオニスは、ふと、右手を父の頭から離し、その袖で、目元を拭った。
そしてそのとき——彼方で巨大な閃光が走り、一つの時期の終焉を告げていたのだった。
レオニスはその閃光を見つめながら、
「あーあ……」
呆然と、声を上げていた。無力な子供のように。脚がどうというのではない。全ての子

供がかつてそうであったように。ただただ無力だった。清々しいまでに、何もなかった。
トールは、城の書斎の窓から、天に昇る火柱を見届けていた。
腕を縛る布を、手の関節を外してなんとかほどき、足を縛る布を短剣で切り裂いてから、ようやく立ち上がったとき、怪物の咆吼が聞こえたのだ。
窓の外をのぞくと、遠くの方で、異形のものが、ずるずる、ずるずると這い進んでいた。
まるで自分たちみたいだな、とトールは思った。
怪物はやがて何かの拍子に歩き始め、倒されては挑み、そしていきなり、走った。
そのときはトールでさえ、怪物の疾走に胸が躍ったものだ。
そして、跳躍の果てに、怪物が崩壊し、消え去ったあと、トールの胸の奥に、ひどく澄んだ空虚さが残った。それは、自分たちの鬱積した時期の終わりのようでもあった。
負けたのだ、と思った。それも、自分たちの全存在が挫かれた感じだった。目も眩むような悔しさであり、そしてそのくせ、今は、やけに気分が良かった。
レオニスも、同じような気持ちでいてくれればと思った。
やがて、ゆっくりと、トールは、部屋を振り返った。
そこに、レオニスの母の肖像画がひっそりと飾られている。

くまで、あの男の気を引いて誘導しようとしたためのものだ。
継承式の後で、トールは、ジークにノヴィアのことについて口にしているが、それはあくまで、あの男の気を引いて誘導しようとしたためのものだ。

本気で、あの少女が、誰かに似ているなどと考えてはいなかった。ただ単に、街の者たちがそう噂するのを実際に聞き、何となくジークを誘う方便にしたに過ぎない。
縛られた状態で、朦朧となってジークとロムルスの会話を聞いたときも、二人とも馬鹿なことを喋ってるな、というのが、殴られてぼんやりとしていたトールの感想だった。
だが——この肖像画を前にして、トールは今、ひどく衝撃を受けていた。
おかしな話だが、これを見たことで、レオニスの代わりに自分が悲しみ、怒り、そして何かを諦めたような感情を抱いた気がしたのだった。
トールは、その、自分にとっては叔母にあたる女性の肖像画に歩み寄り、静かに、短剣の刃を当てた。縦に裂き、横に裂き、もとは何の絵であるかも分からぬほどに切り刻んだ。
これをレオニスが見る必要はなかった。これ以上傷つく必要など、ないに決まっていた。
そうして、トールは、あの少年が生まれて初めて恋した少女の生い立ちを、永遠に消し去ったのだった。
レオニスの自室に戻ったトールは、そこで、ロムルスの死を見た。

レオニスは頭から血でずぶ濡れになったような状態で、しかもその宝剣が、ロムルスの腹から背へと突き出ている。だがトールはその状態に顔色一つ変えない。いつかこうなることが、心のどこかで分かっていたような気分だった。
そっと近づき、ロムルスの遺体をどかしてやろうとしたが、レオニス自身が、その手を離さなかった。トールはそのまま、レオニスが父の遺体を抱く姿を見つめた。
やがて、レオニスが、胸に抱いた父の頭を見つめたまま、ぽつりと零した。
「怪物が死んだね……」
「はい」
「父さんも死んだ」
「はい」
レオニスが、あの男とは呼ばず、父さんと呼んでいることに気づいたが、何も言わない。
「父さんは、僕が、怪物だって言った」
「――そうですか」
「僕も、そう思う」
静かな声で、レオニスが言った。
「父さんにそう言われて、嬉しかったのか、悲しかったのか、よく分からない」

レオニスの手が、ロムルスの背を撫でた。ほとんど無意識にしているような動作だった。
「僕は、父さんのこと、けっこう、好きだったのかもしれない」
遠くから、自分の心を眺めるような、寂しく乾いた言い方だった。
つとトールを見上げた。途端に、血に濡れた顔のレオニスが、驚きの表情になる。
そして、泣くだけ泣いた後に生まれるような透明な微笑を浮かべ、言った。
「お前も、怪物みたいだぞ、トール」
トールが、左半面をさすった。痺れるような痛みがあった。左目の瞼など腫れ上がって
ほとんど見えない。左頬から唇にかけて、紫色に腫れ上がっていた。
「ジーク・ヴァールハイトに殴られたんです」
真顔で言うと、ふっとレオニスが笑った。
「やられたね」
「やられました」
「やり返したいな」
「やり返したいです」
レオニスがくすくす笑った。トールの右半面にも、かすかな笑みが浮いている。
「怪物が死んだ……」

笑みを止め、レオニスが、暮れなずむ空を眺めながら、繰り返した。
「いや……。ドラクロワという怪物が、まだいる、か……」
思い出したように呟く。それから、小さくかぶりを振って、
「でも、それよりも、僕らが、新しい怪物になればいい」
当然のように、レオニスが言って、湖の方へと目を向けた。
「これまで考えていたような怪物とは、違う怪物に、なってみたい」
「――はい」
トールが、うなずいた。そしてレオニスと同じように、湖を眺めやった。
夕暮れが、赤く命をはらんだ血のような光を、鏡のような湖面に浮かばせていた。

# Epilogue　光求めて／闇の微笑

　ロムルスの死は、表向きは事故死ということになり、裏では自殺ということになった。乱が発覚したゆえの自害であり、その子に罪が及ばないための処置であるのだと。
　どちらも当たっているような、外れのような気がする。それがレオニスの感想だった。
　ジークも、ロムルスとレオニスのことについては、何も言わない。ロムルスが罪の全てを背負ったのであり、後の全ては、レオニスに委ねられている──そういう態度だった。
「急務は、耕地と治水の復興です。領主として、それに全力を注ごうと思います」
　レオニスは、車椅子に座って、微笑みながら、ジークを見上げ、言った。
　自分が、この地を戦場にしようとしたことなど、おくびにも出さず、
「あなたには再び、この聖地を救って頂きました。感謝しております」
　やけに大人びた響きが、そのレオニスの口から零れていった。
「父を葬ってくれて、ありがとうございました。父も喜んでいると思います」
　本心からそう思っているように、レオニスは言った。

ジークは小さく、うなずいた。その目が、じっとレオニスを見つめていた。
聖地の外れ――ちょうど、この地を訪れたとき、ジークが、ロムルスに声をかけた辺りであった。そこに、今、旅立つジークを見送って、レオニスとトールがいた。
「レオニス――」
ノヴィアが呼ぶと、レオニスは、静かな微笑のまま、言った。
「お別れだね、ノヴィア」
一瞬、ノヴィアの面に、悲しい表情が浮かんだ。
「また、ここに来たいと思います。そのときは、また一緒にお話して下さい、レオニス」
「そのときまでに、この土地をもとの美しい状態にしておくよ、ノヴィア」
「約束ですよ」
「約束するよ」
ノヴィアが、にこりと笑った。レオニスも同じように笑った。
「不思議だな。君がどこにいようと、君が何を考えているか分かる気がする」
「不思議ですね。私も何となく、あなたがどんな気持ちでいるか分かる気がします」
屈託のない、言葉の投げ合いだった。
だが、ジークとトールの表情が、一瞬変わり、そしてすぐにその表情を押し隠している。

この少年と少女の間に、いかなる秘事があろうと、それをジークはジークで、またトールはトールで、それぞれに花の下に埋もれた過去として、胸の底に沈めていた。
ふと、トールに、アリスハートが声を投げた。
「ひっどい顔ねぇ。せっかく良い顔なのに、気をつけなきゃ駄目よぉ」
「はい――」
「あの騒ぎで、転んだんですってねぇ、ほんっと災難だわねぇ……」
はい、と応えつつ、トールは、ちらりとジークを見た。トールの言い訳だったからだ。
ジークは、トールに『いつでも試せ』と言ったときの顔のまま、無言でいる。
「で……さ、トール。あんた、自分の名前、気に入ってる？」
「はい。ヴラドの民に伝わる戦いの神の名だそうです」
「そうなんだぁ。うん。ね、あんたの呼び方、あたし、決めたんだけど」
「はい。何でしょう」
「トール」
「は――？」
「あんたは、トールよ。トールはトールなの。それが一番なのよ」
トールが、意表を突かれたような顔で、ぼんやりとアリスハートを見つめた。

「分かった？　あんたは、あんたなの」
念を押すように、アリスハートが繰り返す。きわめて真面目な顔だった。一生懸命考えた末の結論であることが容易に想像できる。
このときトールの脳裏にあったのは父のことであり、その民のことであった。その鬱積の最後のかけらが、トールはトール、というその言葉で、すとんと消えた感じだった。
「ありがとうございます、アリスハート」
ほのかな笑みを浮かべて、トールが言った。アリスハートが鷹揚にうなずいてみせる。
「そうそう、ちゃんと名前で呼ぶってのが大事なのよ。どこかの狼男とは大違いだわぁ」
じろっとジークの方を見やるが、これまたジークは一向に気にした風もない。
そのジークに、つとまたレオニスが近寄り、真摯な顔で声をかけた。
「あなたが、争乱を防ぎ、あの怪物を相手に互角に渡り合ったと聞きました……」
レオニスの面が、一瞬、ぞくりとするような微笑を浮かべた。
「あなたは、ご自分が怪物だと思ったことは、ありますか？」
口調は穏やかで丁寧だが、声の底に、火のように熱さをもった問いだった。
「――ああ」
その熱さを静かに受け止めるようにジークがうなずく。レオニスがうっすらと笑った。

「あなたに匹敵する怪物になりたがる者を、どう思いますか、ジーク・ヴァールハイト」
「その者が、もし死者の思いを無に帰し、争乱を謀るなら……俺が、闇に葬るだろう」
ジークが淡々と答える。その目は、今や正確に、誰がこの地を戦場にしようとしたかを、見抜いていることを告げていた。だがレオニスは、なおも微笑して、訊いた。
「もしこの地に、また新しい怪物が現れたとしたら――？」
「そのときは、俺が相手をしよう」
ジークは、まるでそれが再会を約す言葉であるかのように、短く告げていた。
聖地シャイオンから延びる街道を進みながら、アリスハートが肩をすくめて呟いた。
「怪物ねぇ……そんな変なこと訊くなんて、なんか最後まで屈折した子だったわねぇ」
「そうでもない。俺も、いつでも怪物になる可能性がある」
淡々とジークが返す。ぎょっとなるアリスハートに、
「お前もな、チビ」
「チ、チビって言うなってばっ。そう簡単に怪物になってたまるかぁっ」
「アリスハートの言う通りです」
いきなり、ぴしりとした調子で、ノヴィアが言った。

「私が見守る限り、絶対に、ジーク様にそんなことはありません」
ちょっと怒ったような顔で、傍らを歩くジークの顔を見上げた。ノヴィアはレオニスのことなどまるで疑ってもいない。頭にあるのはいつでもジークのことばかりだ。
そのジークが力に溺れるなど想像も出来ないが、何かの拍子で、力の方がジークを飲み込もうとすることだってあるかもしれない。そのときに自分がいるのは何のためか。微力ながらも、ジークが道を外れぬよう助けるためではないか。それが出来なくて何が従士か。
そんな風に思い詰める半面、言い放った後で、急に不安にもなっていた。
ノヴィアはそんな存在ではないと、ジークに言われるのが怖かったからだ。
ジークが応えずに顔を道に戻し、何も言わずに歩き続けるのへ、思わずうつむいたが、
「頼む」
いきなり降ってきたそんな言葉に、ノヴィアがはっと顔を上げた。
ジークは、相変わらず淡々とした顔で、道の先を見つめている。
「は、はいっ！」
ノヴィアが顔を真っ赤にして間の遅れた返答をした。思わず大それたことを言ってしまったという、心が浮き立つような、不安なような、妙に落ち着かない気分になっていた。
そのくせ、常にこれまでジークの後を追うばかりだった自分が、いつの間にか、こうし

て並んで歩いているということに全く気づかぬノヴィアなのだった。
二人の様子を眺めるアリスハートが、一瞬、ジークが奇妙な表情を浮かべるのを見た。
それはアリスハートの目に奇妙と見えただけで、実際は微笑ったのかもしれない。
その彼らの前に、やがて更に遠くへと延びる、新たな道が見えていた。

# 後書き

初めましての方も、またお会いできましたねの方も、こんにちは、冲方です。
皆様のご愛顧により『カオス レギオン』もこうして三冊目の刊行となりました。
今回は、ドラゴンマガジンで連載された三つの短編に、書き下ろし中編を加えてのお届けです。書き下ろしが多い分、お楽しみ頂ければ、と思います。
……え？　中編じゃない？　短編七話分はある？　これじゃ書き下ろし長編だ？
おかしいですね。我が家で新たに購入したパソコンでは綺麗に120ページに収まっていますが。最近のパソコンは個性を大事にするファジー機能でもついているのでしょうか。
……は？　1ページ40行で換算するな？
まあまあ、あまり細かいことは気にせず、是非ゆるゆるとお楽しみ下さい。
なにせ、このたびは記念すべき『カオス レギオン』新キャラクター登場のお話なのです。
これまで、ジーク、ノヴィア、アリスハート、ドラクロワとシーラ、そして長編ではア

ーシアと、六人の物語が互いに触れ合って語られてきておりました。
今回新たに二人の若く初々しく、ちょっと屈折してるような気もするヤツらが、堂々の登場なのであります。彼らが背負うものと、ジークやノヴィア、アリスハートの思いが、どのように響き合うのか。それはもう書けども書けども尽きせぬ物語であり、ついついパソコンが書式を間違えるのも無理からぬことと言えましょう。ねえ、担当のシバッチさん。
……ん？　勘弁してくれ？　もうしない約束だったじゃないか？
申し訳ありません。何せうちのパソコンたらファジー機能搭載で編集者の言葉を個性的に解釈、気づけば1ページ16行から30行、そして40行へと三段階変速でメモリー。何となく予定枚数に収まってる気がしてひと安心の数字のマジックです。嘘です。ちゃんと守ります。すいません。

さておき……。
どうも、ウブカタは少年が好きなようです。
こう書くとあらぬ誤解を招きそうですが、別に変な意味じゃありません。
けっこうドロドロしてるくせに、どこかでいつも澄んだような哀切がある。真面目なのに滑稽だったり、頑張ってるのに無茶苦茶だったり、何やってんだろうと思いつつも、そ

うせざるを得ない何かがある。あの妙な生き物としてのオトコノコが好きなようです。ジークにしても、昔はどんな少年だったんだろうと、ついそっちに興味がいってしまう。もちろん女の子も同じように好きです。ただウブカタもかつては少年だったせいか、どうも男の子に対する肩入れの方が強いような……。
そんなわけで、今回素敵な少年たちが登場してくれて、僕としては、大いに盛り上がりました。それがそのまま、読者の喜びとなることを願ってやみません。
今後、その少年とノヴィアの関係が一つの軸となり、物語に重要な縦糸を織りなしてゆくことでしょう。どうぞ、お楽しみに！

……はい？　今後ってなんだ、ですって？
今後は今後ですとも。未来です。明日です。はばたけです。そう、これからなのです。
二千三年の春に刊行された長編・短編集の後書きでは、「ひとまず完結」などと言っておりますが、なんと早くも秋からドラゴンマガジンで連載が再開されることとなりました。
もちろん短編と並行して、長編も出る予定です。
それらは主に『カオス　レギオン0』をスタート地点とし、長編『カオス　レギオン』へと還ってゆく物語になるでしょう。『01』から『02』『03』と、長編『カオス　レギオン』

に少しずつ近づいてゆく物語となる予定です。

思えば今回新登場の二人も、実は『カオス レギオン』の物語が話し合われた当初から出番を待っていた人物達でした。しかし様々な制約上、ついに登場することのなかった人物達が、まだまだいるのです。そうした人物達の人生が、ジークの道行きとどのように交錯し、そして長編『カオス レギオン』へとつながっていったか——

まだまだ書いていないシーンが沢山あり、それを書く僕自身が今から楽しみです。

そしてそれが書けるということは、ひとえに皆様の応援の賜物に他なりません。尽きせぬ感謝とともに、今後ともご期待に沿えるよう一生懸命踏ん張って、ジーク達の旅についてゆき、彼らの姿を一行一行、叩き込んでゆくつもりです。

僕の大好きな彼らを、どうぞ今後とも応援してやって下さるようお願い申し上げます。

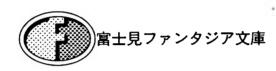
さて最後になりましたが、謝辞を述べさせて頂きます。

実は酒豪であることが判明、結賀さとるさんには、修羅のごとき忙殺の中、素晴らしい絵で物語に暖かい血を通わせて頂き、本当にありがとうございました。特にレオニスはもう鼻血ものです。思わず印税で生原稿買おうかと思ったくらいです。

一生スーツは着ねえ、といつも心に春風を、担当のシバッチユイユイ氏には相変わらず

大変お世話になってます。これから始まる新たな戦いでも、得意の直球で勝負です。
僕よりも僕の近所の名所に詳しい郡司さん、増えた枚数に「それ、やりすぎ」と言いつつ、特にそれ以上何も言わずに許容頂いて本当にありがとうございました。
たまに壊れるウブカタに付き合ってくれる奥さん、みなさん、妖精さん、ありがとう。
いざ欧米圏へ、異なる言語と文化に真っ向勝負の『カオス　レギオン』海外版の開発に向けてラストスパート中のカプコンの皆様、楽しい打ち上げをありがとうございました。
そしてジーク達を愛して下さった皆様へ――
心より御礼申し上げます。
これからも頑張ります。

冲方丁　二千三年　六月

初出　『在りし日の凱歌』：月刊ドラゴンマガジン2003年3月号～5月号
『シャイオンの怪物』：書き下ろし

カオス レギオン01

聖双去来篇

平成15年7月25日　初版発行

著者——冲方(うぶかた)　丁(とう)

発行者——小川　洋

発行所——富士見書房

〒102-8144

東京都千代田区富士見1-12-14

電話　営業　03(3238)8531

編集　03(3238)8585

振替　00170-5-86044

印刷所——旭印刷

製本所——本間製本

落丁乱丁本はおとりかえいたします

定価はカバーに明記してあります

2003 Fujimishobo, Printed in Japan

ISBN4-8291-1537-8 C0193